演藝畫報

昭和二年五月一日發行

クラク

六月號　五十錢

田中内閣の陣容及青年時代（特別記事）……田中榮三

「椿姫の駈落事件」……

大評判の六大長篇

遁亡（小説）……遁亡の企てが空に歸す（運命を巧みに描いた名作）……久保田万太郎

美婦哀傷（社會小説）……畸々奇！失恋の秀香謀……三上於菟吉

蒼白い影（家庭小説）……畸形の兒島運命や如何に……長田幹彦

獵奇館瓦解記（江戸綺譚）……秘密を仄かす玉小蘭！……大佛次郎

人性の苦樂（長篇小説）……野鶴老人の魚捜奇會と冒險碧眼！……村上浪六

二つの愛（戀愛小説）……或る温泉場に於て自殺に對する奇拔極る告白と情死と變態性慾！……徳田秋聲

東京市丸ノ内ビルディング四階　クラブ社

大懸賞……自動車は何處へ？（全國讀者招待）黒部神祕境探勝

夜光珠を繞る女性……（讀書界驚異の長篇探偵小説）……甲賀三郎

快談奇説

芦原將軍（奇拔論文）……（奇人の筆に成る天下の怪狂人、皮肉な筆觸は何人も一讀三嘆！）……廢姓外骨

坊主になった清隆（奇傑異聞）……（偉傑黒田清隆は何人も知る人本篇に描かれたる彼の風貌を見よ）……本山荻舟

獸魂（田園悲話）……（酒亂の運命に亂れ行く愛する二人の悲運は誰か涙なきを得る？）……森本巖夫

男は強し女も強し（探偵小説）……（大力の大女の家に盗みに入つた小男の滑稽にして皮肉な光景！）……和氣律次郎

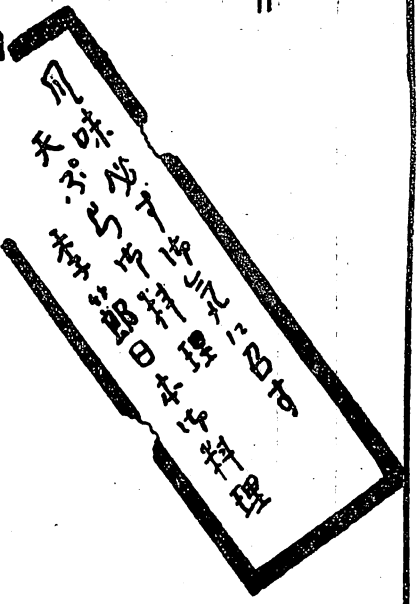
「桃中軒雲右衛門」……眞山青果

趣味讀物　拾數篇　◇歌　柳原燁子　山田邦子　岡本かの子

苦樂の因……大谷光瑞　政治家の心境……床次竹二郎

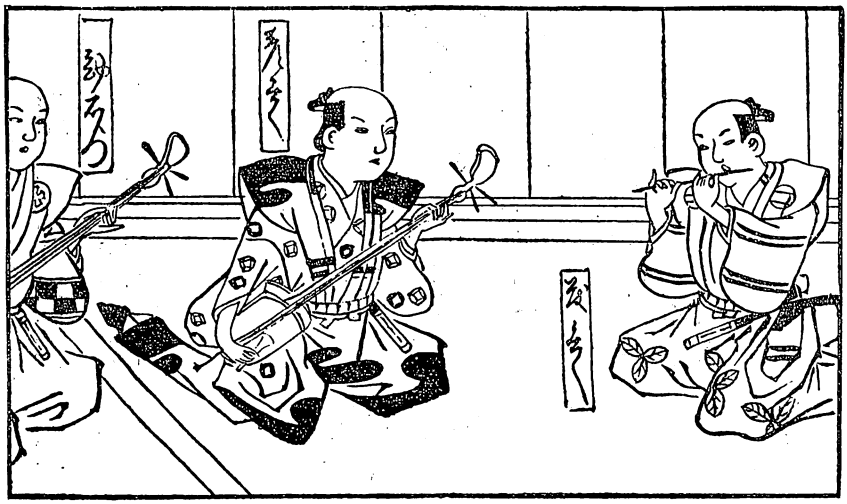
大阪市東區野村ビルディング六階　クラブ社

御芝居歸りには打揃ふて
お坐席で是非御會食を——



道頓堀戎ばし北詰

支店
大阪支店　北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋



新版『やく者ゑづくし』より

昭和二年五月一日發行

道頓堀

第九輯　五月號

口繪　中村鴈治郎初演當時の繪本番附・鹽原多助の筆蹟と墓碑

演劇雜感　白井松次郎　二

多助とワグナー・馬の天才　高安吸江　四

漫談『鹽原多助』　高原慶三　七

鹽原多助の思ひ出　中村鴈治郎談　一〇

春宵夜話　成瀨無極　一二

圓朝の鹽原多助　高安月郊　一三

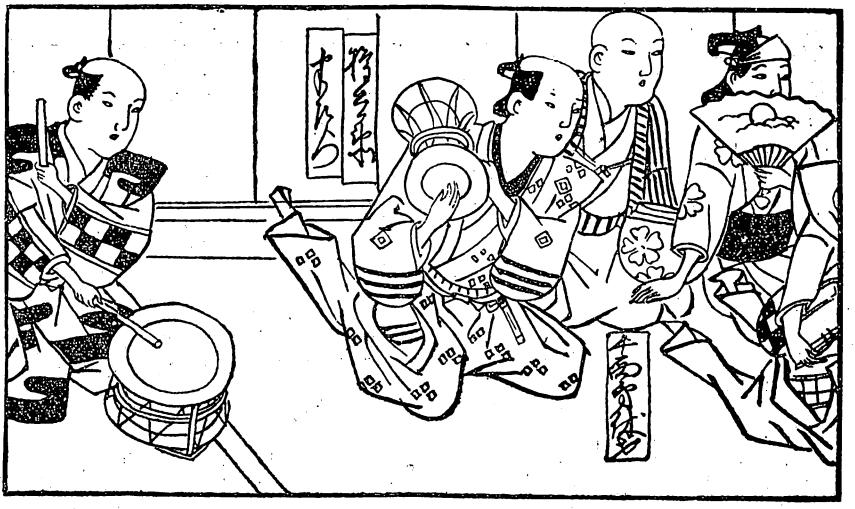
十種香の舞臺　高谷伸　一五

成駒屋十二姿（短歌）　木村富子　一八

鹽原多助漫談　富田泰彦　二〇

下新田紀行　田中總一郎　二三

鹽原多助馬の別れ　川尻清潭　二六



東京土産『平將門』　井上正夫　三

眞山氏の『平將門』　綿貫六助　三四

井上正夫と新派劇　楠田敏郎　三六

劇壇漫語　姥谷久一　三八

平將門（芝居見たまゝ）　素木宗一　四〇

井上正夫に對する
印象・感想・希望　文壇七十餘氏　四四

毛谷村私見　新谷誠水　八六

成駒家斷片　北川康男　八七

喫煙室　高橋蓼雨　八三

浪花座五月興行上演
脚本　死の一歩前　中井泰孝　五七

□中座總役割一覽

□辨天座の五月

□新刊紹介二書

編輯後記　姥谷生

表紙　大塚克三

發刺たる
大の風味
金
醤油
大金
しぬき小豆島
丸金醤油株式會社

小道具 小切 貸衣裳

松竹衣裳部

本　店　大阪市南區久左衛門町八番地
長電話南一一八八番
四七一一番

東京支店　東京市淺草區並木町十五番地
長電話淺草五五九九番

素人演藝會　春秋溫習會
宴會の催物　婚禮の衣裳

其他一般の衣裳を多少に拘ず御利用下さい
御來客の御相談に應じ御便利よく取計ます

五月の中座にふさはしい

梅園のお献立

お芝居の

幕間と

お歸りには

梅園

お芝居での御食事は食堂にておかへりには白鷹にて一寸一ぷく江戸すしを

中座食堂

本店 太左衛門橋北一丁
電話南六二二七番

ほゝ笑の
お姿を……中座三階の
電光寫眞……にて
印象深き一葉に
あなたの微笑と輝きが溢れてゐます。

とても粋な……
あなたの趣味にピッタと適つた
芝居好みの
人形玩具
中座賣店の
利久堂

皆様よりあぶら取紙はスキナに限ると
益々御好評を賜つて居ります。

スキナ

あぶら取紙

五色紙

白粉

フジ色
サクラ色
トノコ色
クリーム色
ミドリ色

貴女のお粧ひを
一段と引立てる 御化粧料！

各地の化粧品店及び中、浪花、角、辨天の各座賣店にあります、何卒『スキナ』と御指定を願ひます。

製造元
大阪 中田商店
スキナ屋

發賣元
朝日堂株式會社
大阪市北久寶寺町堺筋

南米ブラジルの曠原に
原始時代を繼承せるロッグハウス
そのまゝの趣味と感じを出せる
モカのコーヒの和やかな
愛のまどひの

モカで有名な
喫茶店

ロッグハウス

洋酒其他の飲物完備

高津郵便局東 ―

電話 南四二四四番

山崎寫眞館

優秀の技術と迅速が當館の有つ唯一の誇りです。
御散索の折にせひ御立寄りを。

會旗優勝旗
劇場幕幟
緞帳フラフ
神戸市楠社西門
梅原商店
電話元町一六一五番

劇とキネマ欄を新開拓したフワンの見逃がす事の出來ぬ

大阪新聞

休無中年

一ケ月　五十錢

特色

水曜日に……内外キネマ界の事が洩れなく全紙面を埋める「大阪キネマ附錄」(本紙二頁大)と土曜日に……家庭の御婦人達が必ず一讀を要する流行記事を集めた土曜附錄(本紙二頁大)を添附

本社　大阪市西區土佐堀船町壹七ノ壹
電話土佐堀六三〇〇番・六三四〇番・六三四一番

東京支局　東京市京橋區丸屋町五番地

神戸支局　神戸市下山手六丁目電停前

大阪毎日新聞

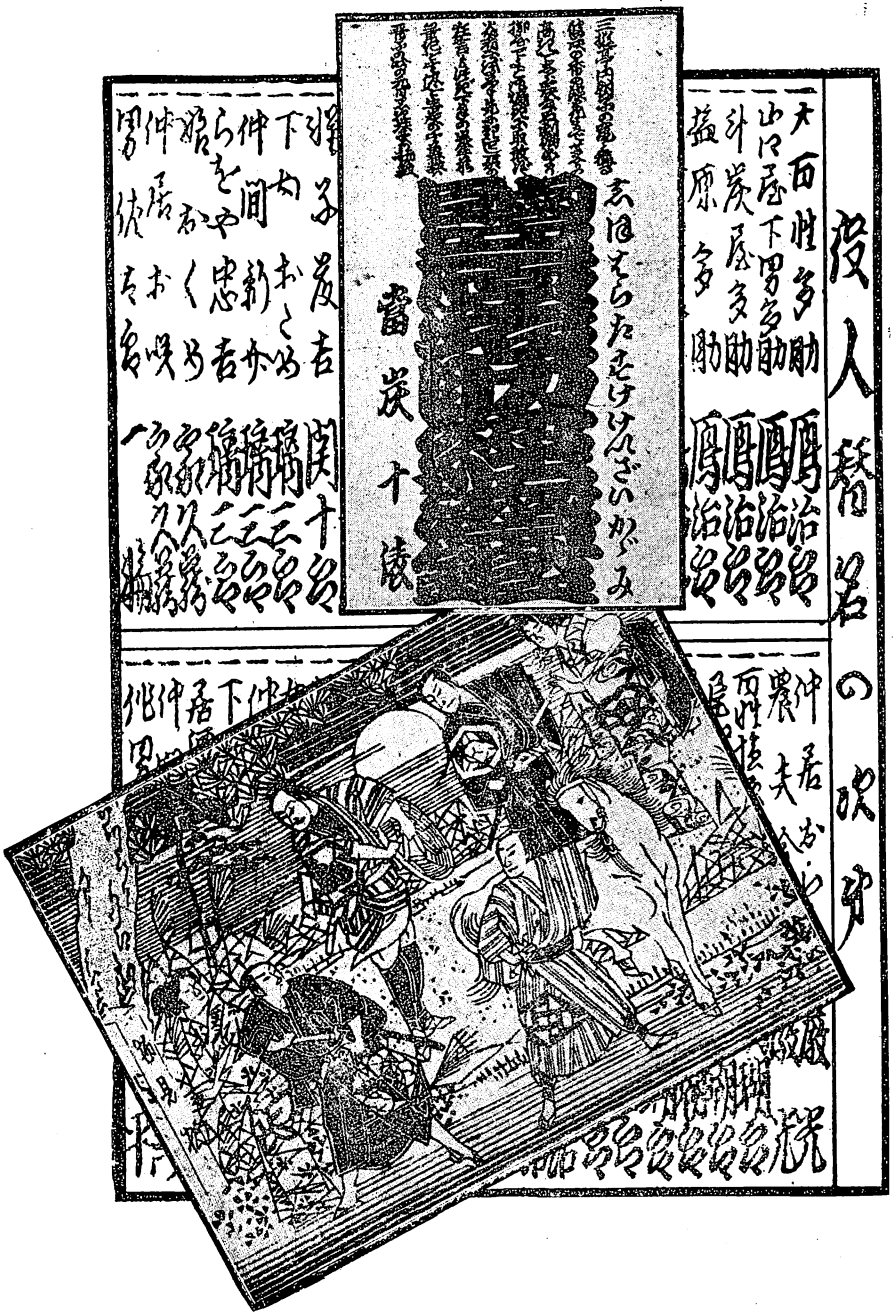
朝刊十頁
夕刊四頁

言論界の最高權威
發行部數東洋第一

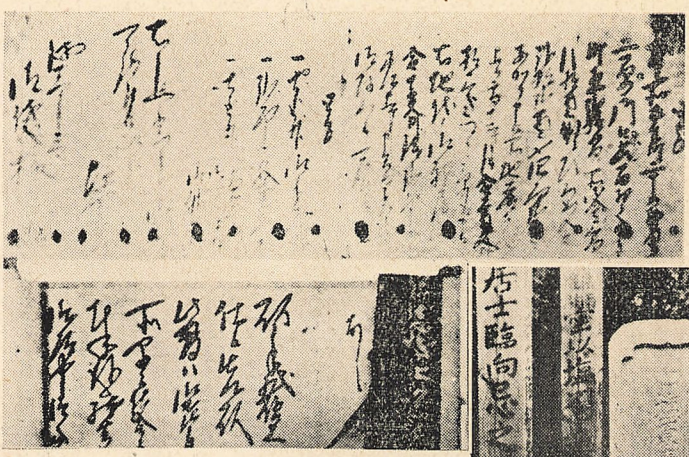
定期刊行物

日刊「英文大阪毎日」
週刊「サンデー毎日」
週刊「點字大阪毎日」

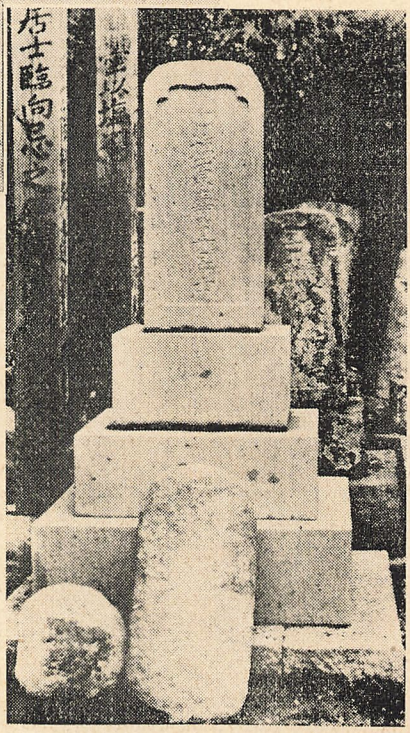
毎月二回 經濟雜誌 エコノミスト
月刊畫報 芝居とキネマ



附番本繪の座花浪（明治廿二年九月）時當演初の郎治鳳村中



鹽原多助の筆蹟



鹽原多助の墓

• 田中總一郎氏『南新田紀行』記事參照 •

八百屋
乾物屋 食料品店 全國至る所に有り
白玉クリーム
校品画

白木屋の信條

◎品質は堅く
◎値段は安く
◎取扱は叮寧

安く賣る店　買ひよい店

大阪 白木屋 堺筋

月刊・演藝研究・雜誌

道頓堀

第九輯
五月號

演劇雜感

白井松次郎

劇壇の春秋は餘りに私にとつては慌しく夢のやうに過ぎ去つて行くやうな氣持がゐたします。この月の各座興行の初日の蓋が開けられる前後には休息の間もなく來月興行また替り狂言などに就て頭を惱ませてゐなければならない次第です。そして皆様の御期待にそむかないお芝居を御覽に入れて、多少なりとも社會的に何かの貢獻を捧げたくその自負と使命を思ふ時、寸暇のいとまもなく双肩に重荷を感じます。

たゞ偏に皆様の御聲援と御教導の程をお希申上げておきます。

×

こんどの中座は久びさに歸阪した中村鴈治郎丈を始め關西大歌舞伎名題連の大一座で、故三遊亭圓朝口述の『鹽原多助經濟鑑』六幕を上演されることになりました。

財界不振の折柄、同狂言が皆様の御投票により撰擇に預つた事は大衆のためにある演劇が社會人心と必然的に結ばれたものと信じます。立志傳中の人としての鹽原多助のお芝居は娯樂本位のみに墮せず、勤儉力行の美風を理想的背景として描かれてゐるものだけに、見て敎えられるところが多いと思ひます。

同狂言は三十八年振りで中村鴈治郎丈によつて上演されるもので珍らしく通し狂言と共に、とにかく時節柄當を

得たものと存じます。

×

近頃の劇壇に屢々『歌舞伎滅亡』を說く人を見受けます。ながい傳統と形式美をもつた歌舞伎がさう一朝一夕に亡びるものでないと私は信じます。

演劇が近代思想によつて變遷して行くやうに歌舞伎も亡びるものでなくして、また變つて行くものでないでせうか、一つの理論も時代につれて變つて行くものと思います。こんどの『鹽原多助經濟鑑』などは新しいものであるかも知れませんが、歌舞伎と云ひ條所謂現代人が見ても興味あり理窟に適つてゐるものゝ一つと言ひます。歌舞伎のもつ美しい要素を無視して、また理論のみに沒頭して時代錯誤を叫び消滅するなどと說くのは餘りに早計でないかと心得ます。

×

浪花座は井上正夫君によつて眞山靑果氏の『平將門』その他が上演されてゐます。同狂言は東都二月の劇壇を震駭せしめたもので、文壇劇壇の諸先生から過大の賞讃をうけました。それに東都上演の節は興行成績が不良でございました。何故に興味ある國民劇が大衆に歡迎されないのでせうか。それは俳優の人氣または興行政策によるものと思ひますが、その非は大衆にあるのではないかと存じます。

しかし當地では連日の滿員をつゞけて非常の人氣を煽つてゐます。いゝ芝居と俳優が積極的にかく觀衆より歡迎されなくては嘘だと思ひます。

多助とワグナー・馬の天才

高安吸江

昨今のやうな經濟界の混亂時に、勤儉貯蓄の標本である鹽原多助が上場せられるときまつたことは、或は時宜に適して居るとも云へるが、また皮肉なやうにも感ぜられる。それはとにかくとして、是まで何か一つは白く塗り立てる役がないと、納まりかねた御大、成駒屋が、いかに出世狂言をつたとは云へ、土臭い野暮な多助の通しを出すことにしたのは頗る面白い。彼がもはや梅忠や紙治のやうな純粹の艶ものでは自分に滿足出來なくなつたのは、あまり新しいことではないが近年彼の爲に書き卸された新作ものを見れば、殊に是等の消息を窺ふことが出來る。其成功と否とはとにかく、またそれが彼のために良いかわるいかは別の問題であるが、要するに彼が何か是までとは別な途に出やうと焦つて居るのはたしかで、今度の多助もその試みの一つと見るべく、同時に一種の若返法のつもりかも知れない。

私が以前に見たこの狂言は、先代右團次(齊入)、同璃寛、珊瑚郎、巖笑、多見之助(多見藏)等の一座で鴈治郎の出世藝として大當であつたのであるが、東京では五代目菊五郎が、明治廿五年一月歌舞伎座で勤めて、やはり大入で、日延とも三十三日の賣れ高六千九百三十二間と云ふ好況と年代記にも記されて居る。しかし元來鹽原多助は越後傳吉の刻苦勉勵と佛佐吉の無抵抗主義とを綯ひ交ぜにしたやうな性格になつて居るから、巧いにはちがひ無かつたらうが、意氣で機敏な音羽屋の畑ではないと思ふ。猶本文によると、多助は騙の邪魔をした意趣返しに、道連の小平から撲られる處で、打たれた其數を勘定して居たといふやうに、トボケた大きい處があるから鴈治郎には此のノンビリした妙味が、生地で逢つて見ると極

めて明白に感じ得られるのであるが、不思議にも舞臺の上では、藝事に對する細心の注意から此の特質が隱され、神經過敏な怜悧さのみ目に立つのが常で、此點は誠に遺憾である。今度この多助を、老熟した彼の藝でどう云ふ風に描き出すかは興味ある問題であるが、唯彼の熱演と、抑揚に乏しいその聲調とは、たしかに五代目以上に多助の實直さと野趣とを現し得るであらう。

今回上演せられるものは、故勝諺藏の脚色を補修せられたのだと聞いたが、私の古い記憶をたどると、劇的場面として印象をとゞめたのは、戸田邸で多助が實の父母にめぐり逢ふ處であつた、歌舞伎では八百藏(中車 秀調(先代)の角右衛門夫婦が好評で、養父への義理で名乘らずに追ひ返へす條で、『炭屋の下男に知己は持たぬ』と勵まし、ぐづ〳〵して居れば鎗玉に上ると表面は强く云て、腹で泣く仕草が素敵によかつたと、見た人の話を聞いたが、私の見たのは右團次(齊入)璃寛(先代)の夫婦で、是はあまりに情に脆く、少々泣き過ぎたやうであつた。それでも今日の處大阪で、鴈治郎の多助を向ふへまわして誰が角右衛門を演り得るかを考へると、思ひ半に過ぐるものがある。

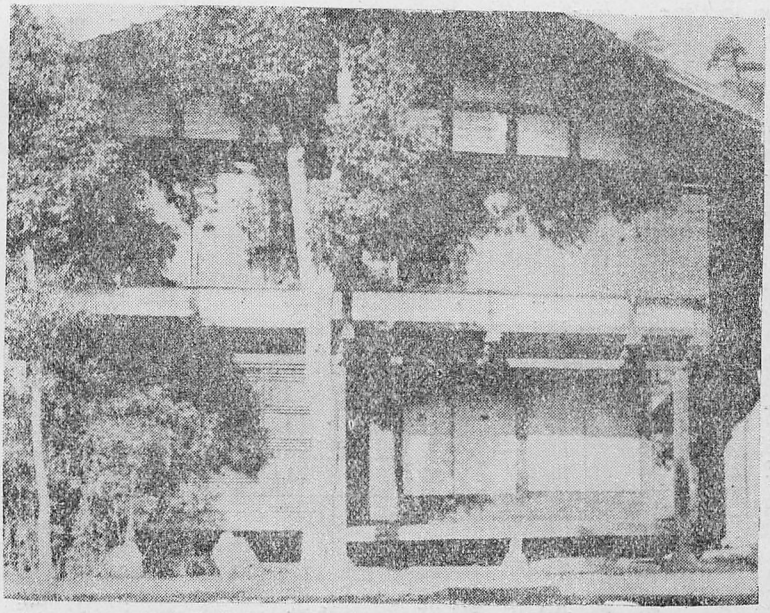
云ふまでもなく馬の別れは此狂言の山であるが、是はどうも咄を聞いて居る時のやうにシツクリと感が出ない。私も圓朝から此場の口演を聞いたが、實際馬の涙がポタリ〳〵と地に落ちるのが、まのあたり見える樣で、思はずシンミリとさせられた。青も多助も皆圓朝がやつて居るのに、芝居の方では俺が多助一人にしかなれないと、流石の音羽屋が愚痴を云ふたそうだ。それに相手はあの滑稽な姿をした芝居の馬である。近來は大分改良せられて昔程にはないにしても、やはり腰から下、殊にあの變な後脚を見ては、忍耐力に乏しい近頃の見物に、吹き出すなと注文するのが無理かも知れない。多助が立ち去らふとする時、その袖を咥へて引止める處など、ともすれば却てドツト來て、折角の感興をぶち毀される恐れがある。此場の至難であるといふのも、一ツはこんな點にある。さりとてほん物の馬を舞臺で使ふわけにもゆかず、先ツ從來の通りで辛抱せねばなるまい。

眞物を舞臺に使つて非常な効果をおさめ得た例は、しかし絶無でない。外國のことではあるが序ながら、その話をしやう。一八八一年(明治十四年)の四月に獨逸のミュンヘンでワグナーの大曲『ニーベルンゲンの指環』の第三日『神々の黄昏』が試演せられた。大詰はライン河畔で、勇士ジーグフリードを火葬する時、情人ブリュンヒルデは愛馬グラーネに跨り、

その火中に跳入るのであるが、このグラーネを勤めた馬は嘗てバイエルンのマキシミリアン王の召料であつたもので、この時不思議な位天才的技能を發揮したのである。

ブリュンヒルデに扮した女優テレゼ、フォーグルが『さらばよグラーネ、爾の友を禮し云々』の一節を唄ひ出すと、馬は直に不安の狀を示し、鼻息を鳴らし、前足で地を搔きはじめ、最後の『ジーグフリードよ御身に幸あれ』で急にクルリと廻り舞臺を横に駈けて、炎々と燃え上る積薪のだゝ中へ跳び込む、恰もフォーグルは其間に彼の鬣をシツカと握んで馬上の人となる。此呼吸が殆ど間髪を入れずといふ有樣で、一般に非常な感動を與へたと云ふ。此女優は元來巧妙な騎手ではあつたが、奇蹟的な怜悧さをもつ此馬によつて、始てこんな離れ業が出來たと後で人に話たそうである。實の處この馬はテレゼから別に何等の合圖をもうけず、又彼女の乘のをも待たずに、いつも全く同一の所で上に述た跳込を演ずるので恐く音樂を解しその役柄をも辨へて居つたやうに思はれる。

以上は同年五月始めて伯林で上演すべき『ニーベルンゲン』にフォーグル夫妻の出演を交渉すべくミュンヘンを訪ふた監督アンゲロ、ノイマンの追憶談である。猶この馬について種種の逸話もあるが、餘談にわたるから略す。多助から青それからワグナーまで飛んだが、此の上に大切十種香へ來ると丁度狐を馬にのせたことになるから先づ此邊できりあげやう。



鹽原多助の生家（茨城縣利根郡根本村）

漫談『鹽原多助』

高原慶三

『道頓堀』の姥谷君から鹽原多助について何か書けよとの命令である。

が、遺憾にして小生、鹽原多助についての持合せが頗る貧弱である。それでもその持合せを披露する以上は勢ひ大正元年？多分十二月の東京歌舞伎座へ、その當時の市村座連＝菊五郎、吉右衛門、三津五郎、勘彌、榮三郎（今の彦三郎）、東藏（今の友右衛門）等が一座した全盛時代＝の引越し興行の一番目に三世河竹新七の『鹽原多助一代記』の一部が出た。その印象に溯らざるを得ぬ。

書却には

序幕、上州大原村茶店の場、同返し、數阪峠谷間の場、二幕目、下新田鹽原多助内の場、同返し、小松原青馬別れの場、三幕目、鹽原内婚禮の場、同返し馬部屋の場、四幕目、横堀村菴室の場、同山奥殺しの場、五幕目戸田邸内鹽原宅の場、大詰本所多助内の場、同返し一ツ目炭店の場

五幕十一場といふ長丁場だが、小生の見たのは（一）鹽原多助内の場（二）小松原青別れの場（三）本所藤野屋勝手口の場があつたが、これは書却當時のどの場に當るのか、見當がつかぬが、繼母のお龜が乞食姿で多助と出會つて詫をすること、藤野屋の娘お花が多助を見染めると、藤野屋杢右衛門も多助に感じて婚約が整ふといふので大詰となるのであつた。

即ち道づれ小兵衛、またたびお角のくだりを省略して、青馬別れを中心に多助の出世話をかいつまむで三幕に纏めたのであるが、根つから山のない狂言、全盛時代の市村座の活氣横溢せる菊吉兩優が演じても、さほど好評といふではなく、

その後十五年間一度もどこの劇場にも出なかつたのを見てもの餘り香ばしいものでないことだけは判る。

いやはや、投票で多數決になつた折角の名狂言にケチをつけるやうで甚だ恐縮だが、幸ひにして今度は名優鴈治郎が圓朝通の作者の脚色でやるといふのだから鬼に金棒、減多に見物が欠伸をするなんてことはあるまいて、この事はまづ安心して可なりである。

甚だたよりないが、その當時の役割を思ひ出して見ると、

鹽原角右衛門(當時の榮三郎)、原丹治(當時の東藏)、おかめ(菊三郎)、明樽買久八(吉右衛門)、原丹三郎(故紋三郎)、百姓圓次郎(三津五郎)、藤野屋杢右衛門(勘彌)、藤野屋娘お花(故菊次郎)、鹽原多助(菊五郎)。

多少間違ひはあるかも知れぬが未だに眼に殘つてゐるのは吉右衛門の明樽買久八と菊五郎の多助とが貨殖論をやる對話のうまさ、故竹の舍主人(櫻庭筍村先生)も劇評中に激賞してゐられたのであつた。青馬別れはあの廣い歌舞伎座の舞臺…燒失以前のではあるが…一杯に菊五郎の多助がたつた一人きりで馬を相手に見物の涙をしぼる、却々大がゝりな一幕であつた。菊五郎は五代目より實物らしいといふ一般評だつたがそれは五代目の後ろ姿はどんなにしてもイキ過ぎて、百姓多助にならぬといふ意味であつた。

元來鹽原多助に關する文獻なるものが、極めて寥々たるもので、わづかに宮川舍漫筆中の十數行(別抄參照)が唯一無二の物で、かく有名になつたのも全く三遊亭圓朝の藝の譽でゴマの蠅や女賊、不倫の嫁姑、忠義の飼馬などを綯交ぜに殊更狂言綺語を加へたものに過ぎない。

參考のため宮川舍漫筆から抄出しておかう。

貴賤貧福は人の勤不勤にあるを、むかしよりその例擧げてかぞふべからず、こゝに余が目のあたり見し福者あり本所相生町にて鹽原といへる炭薪等商ふ鹽原多助といへり、このもの生れは遠國より參り、篤實に商ひ大事と勤めしゆえ、終に一かどの福者となり、竪川にて肩を並ぶものない、此もの年中閒木綿の丸に十の字の紋付を著す、これ田舍を出でし折の服を忘れざる爲といふ、斯く仕出す程のものなれば一了簡あり時に文化三寅年氏神龜戸天滿宮祭禮ありし折鹽原がいふ、我れ一代にして斯く不足なき身分となりし事全く氏神の御加護なれば我子供も分限に應じ祭を出すべしとて二と下らぬ程の祭衣裳をこしらへ出しける、扨祭も終めば其後の右の衣服をみじんに切裂き捨ける故、番頭はじめ妻なるもの之を止めし所、鹽原曰く、かゝる美服を置きしならば子ども等有

るにまかせ祝儀不祝儀にも著しなば、これ奢りの初めにして我家滅亡のもとなり、是れ切捨てしは無益なれども家の滅亡に換え難し、と奢りを禁めしは實に人感ずる處なるべし、この鹽原にはかゝる福者となりし處土藏一ケ所もなき故、番頭はじめ土藏の二つか三つも非常の爲にと勸めし處が、いはく我家今は何不足なきもとはこの薪炭商ひし故なり、今金子あればとて土藏を慥え品々を貯ふをこれも奢りなり、この炭薪を見よ、雨にも風にもさらし置ながら我々ばかり榮躍にあまる事は、この品に對しても勿體なしといひて、其身一代土藏造らずといふ。

土藏を作らぬロジツクは滅茶滅茶だが、氏神の龜戸天神の祭衣裳をこしらへながらその翌日に切捨てたところは一寸江戸ッ子らしくこの多助の方がどうやら芝居のそれよりも共鳴出來そうである。

さて、話は一寸轉換するが、田村成義先生の『續歌舞伎年代記』中に

此回の鹽原一代記は東京府の編纂にかゝる小學讀本中の修身談にも記載しある處より櫻痴居士に其筋書の訂正を依頼し序文を乞ひ受け是を府下六百餘の小學校へ寄贈し且教員生徒に限り場代飲食物等都べて定價の半額にて見物せしむることを附記したり。

と、あるが、さてはこんども時節柄、公心商才併せ有つ白井社長はこの故智を學むで、この興行の大あたりをねらつてゐると見たはひが目か、何と圖星でござらうがな。

◇中座五月興行總役割一覽◇

鹽原多助(鴈治郎) 原丹三郎、鹽原妻お清、息女八重垣姫(福助) 下男五八、山口屋善右衛門、白須賀六郎(右團次) 百姓圓次郎、荷主吉田八右衛門、原小文次(長三郎) 山口屋弟善太郎(政治郎) 下女おため(成笑) 百姓紋左衛門、女房おすま(成三郎) 輕子市助(高雀) 輕子仁太郎(雀) 長家娘お傳、右文次) 伊助女房お辨(扇) 子守お德、鴈之助) 百姓粂之進(鴈藏) 輕子七助(芦鴈) 息子福松(敏夫) 許嫁お榮、穩屋久八(魁車) 悴万太郎(章景) 早川藤助(八百藏) 百姓九藏(卯十郎) 下女おくに(右若) 小竹屋下女おすみ(福万壽) 百姓平右衛門、輕子九助(市昇) 百姓勘太郎、辻番親仁甚作(右左次) 仲間新助、莚平) 煮賣屋伊助(延郎) 百姓八十、綿屋佐助(齊五郎) 繼立の仁助、百姓七兵衛、茶店婆おくら(箱登羅) 百姓鹽原後家お龜(莚女) 原丹次(吉三郎) 鹽原角右衛門(市藏) 「當る五月興行」道連小平、武田勝頼 延若) 娘お花(扇雀) 太左衛門娘お作(成太郎) 分家太左衛門、藤の屋下女およし(當之助) 百姓六助、手代和平、長尾入道謙信(鰕十郎) 鎌田女房お菊、腰元滿衣(雀右衛門)

『鹽原多助』の思ひ出

中村鴈次郎談

時節がら『鹽原多助』の狂言は、ちやうど適當かと考へられます。地味な芝居であるに抱はらず、從來この狂言が上演せられる度ごとに、大抵の興行は成功して居ります處を見ますと、さすがに、人情味の深いところがあるのだと感ぜられます。

想ひ出しますと、もう三十八年の以前、私がまだ三十歳の、明治二十二年の九月、浪花座ではじめて此芝居が書卸されたのです。

關東の人情噺が東京でなしに、大阪で始めて、書卸されて而かもその芝居が大成功であつたといふのも、經濟が根本になつてゐる處が、商賣所である此大阪に欲つたのかと思はれます。

その時はたゞ今とちがつて、時間に制限がありませんから、全十幕すつかり圓朝さんの噺のまゝを脚色したのです。さうして此芝居の稽古の爲めに東京から、わざ〳〵圓朝さんが來てくれまして何から何まで、悉しく說明や注意をしてくれましたので、よほど後々の參考になりましたわけです。

役割はたしか、私の多助に、先々代の璃寛さんが、獵師の女房お清、角右衛門妻お清、原丹治、先代右團次さ

ん(齊入のこと)が鹽原角右衛門、道連の小平、などであつたと思ひます。

初日が開きますと、お蔭さまで大變な評判。幸ひに圓朝さんも非常に喜んでくれまして、わざ〳〵私に油をかけて『後世おそるべし』など〻云つてくれました。而しあの眞面目な圓朝さんの口から聞いたのではたゞのお世辭だなど〻は思はれません。私は嬉しく受けました。

お恥しい余談に渉つて恐れ入ります。

まあかうしたわけで、多助といふ役が、ほんとに自分の欲り役かどうかはぞんじませんが、幸ひにも書却以來から、いろ〳〵注意も聞き、自分でもひと通り工風はして見ましたゞけに、まあ〳〵見て頂けるかと思つて居ります。どころで、追々と時代も變つてまゐりましたゞけに、あまりに芝居々々した處は變へて行きたいと思つて居ります。御承知の『青の別れ』などもそうです。床にのつて行きつ戻りつ、ではあまりに意味がなさすぎますから、もつと〳〵深い味を出すやうに心がけたいと思つて居ります。自然馬の方の動作も、うんと注意します筈で、馬か人間かわからないやうな、動作は却つて馬鹿々々しくなるばかりですから、動物は動物らしく、たゞ人間の眞情が動物まで感動せしめるといふ本位に演つて行きたいと思つて居ります。

すべてまあかういふ風に萬事に此頃の時代といふものを根本に工風を凝らしたいと思つて居ります。かういふ風なことを申上げてゐてはきりもないことですから、もうこれくらゐで御免を蒙ります。

春宵夜話

成瀬無極

偶然に東京の花を觀た。上野の花の下で少年の昔を偲んだ上野の丘から遠望すると、東京は他國の都會のやうに思はれた。

團十郎の光秀、菊五郎の紙治、團藏の仁木、女寅の何かの役、それ等が少年の頃の自分や友達の姿と一緒になつて髣髴と眼前に浮び上がる。花に暮れた朧月夜の根岸のほとりである。

加賀太夫はどこか亡父に似てゐる。考へてみると、抜け上つた額ぎはの爲めであり、眼鏡の爲めであり、負けじ魂の現れの爲めでもあるらしい。省線大井、大森間で偶然隣り合はせに座つた。

『本郷のお歸りですか。』

『はい、さうです。』

『昨夜赤坂を拜聽して、久振りで溜飲を下げました。』

『……』

『菊五郎と三津五郎が診察の眞似をしたり、交通巡査の身振りをしたりして笑はせますが、あれは誰でもやる事なのでせうか。』

『さうです、先代も色んな工夫を凝らしたものです。』

『帝劇で六代目と拇彌との赤坂を觀ましたが、あの時は實に意氣がしつくり合つてゐました。』

『やはり、あの二人でなくては揃ひません。』

『他日御隱退にたるやうなときよい後繼者がおありですか』

『どうも、まだ見當りません。延壽さんはおしあはせです。しかし、お蔭とまあ至て達者で、こないだも、あなた、雷車の中でつい居睡りをしましてね、大森ときいたやうにおも

つて、慌てて片足プラットフォームへおろすと、電車が動き出して、およそ一雫車半といふもの引摺られて行きましたが、あの時は驚きましたな、それでも車掌がほめて呉れましたよ、かういふ場合には大抵片足か片腕もぎ取られるものだが、あなたは本當に運が強いつてね、一日寢てあくる日の晩は演舞場へ出勤しましたよ。』

『國寶だから自然に保護されてゐるのでせう。』

七十四歳の加賀太夫と大森驛前で袂を別つた私は無上に嬉しくなつて俥へ飛び乘り、新米の書生上りらしい俥夫にいつもの倍の駄賃をやつた。

帝劇の『累』、本郷の『河内山』、歌舞伎の『南部坂』それぞれ感心させられた。

中座に『鹽原多助』が出るといふ。それを聞くとやつぱり少年の春が想ひ出される。あれを讀んで幾度泣かされた事だらう、あの名馬のやうな人間がせめて、もう少し殘つてゐたらこの世も住み甲斐があるだらうに。（をはり）

圓朝の鹽原多助

高安月郊

此話は明治十一年、即ち圓朝四十歳頃、柴田是眞に聽いたのが始めで、それから先づ本所へ行つて調べると、何の手掛りも無いので、その菩提寺、淺草八軒町の東陽寺へ行つて、墓地をさがすと、轡の紋のついた墓があつた。然し四面に法名が刻してあつて、どれが多助のやら分らなかつた。所が不圖みつけたのはその後に新しい塔婆が立てゝあつて、それに施主梅の舍としてある。それで住持に逢うて聽くと、それは鹽原の系統で、當主は鹽原孝太郎、しかも長谷川町の寄合茶屋

で、自分も仲間の集會に幾度も行つた事のある家であつた。圓朝は大に喜んで、早速尋ねて行くと、その主人の母は一尺ばかりの多助の木像や、黑羽二重の袷羽織など出して、その傳統を話した。それから更に上州へ行き、幾十日も土地の狀況や云ひ傳へを聞いて、そして作つたのである。どれ丈が實說で、どれ丈が創意かは分らぬが、牡丹燈籠ほども空想を奔せぬ丈、眞實味があるのが、此作のすぐれた所。それに圓朝自身の性格が陰然入つてゐるのが殊に生命のある所、彼自身も武士の血を引いてゐる。父は落語家となつて、宗家との關係は切れたが、其子の幾之進といふ者圓朝が名を擧げてから會見して、其國へ歸る時は板橋まで送り送られ、別れるに忍びなかつたといふ。此出合は多助が久々で實父にあふあたりに應用されたのではあるまいか、舊師圓馬が自分より先へ出て、自分の用意してゐた話を先へ云うたり、他の弟子を身ひいきして彼を辱しめたりしたにもかゝはらず、其危篤に供給した厚情は多助が自分をいぢめた繼母の落魄を救ふのに一致してゐる。それに彼自身の死ぬ時(明治三十一年)は八十人もあつた弟子の中、寄りつくものは唯の三人、然し今更多助よりみじめな人世を語るには、眠つてばかりゐて寢死に死んだ。

彼は極貧の中から上つて、隨分人世の苦を味はうたが、艱難の果は安樂に終るとした多助の一生、これは事實でもあらうが、また江戸の草双紙の紋切形で、それに傚つた所もある其終が幸か、いつが眞に生の價があるかは認めえなかつたかも知れぬが、其話の內におのづから現れた。或時云うた『人は成下りがよろしい』と、即ち落ちぶれても野卑にならず、どこかに氣高い所があるのが成上りと反對で好いといふのである。

彼の話し振りも其社會にしては品があつた、その中からにじみ出す情味は持前で、小平の樣な惡黨は紋切形であるが、太助の樣な正直な人物の方が理想的の中にやゝ實らしいのは彼の性格の底から純眞の部分が出たのである。されば舞臺へかけても、單に技巧ばかりで無く、本性の底から出したら、馬との別れでも、不自然に見えず、人と獸と共通の情も見えよう。忍耐と儉勤で最後に成功するのは一般的で又江戸より多く大阪の民性に合うてゐる。

然し單に物質的に見ず、人生の苦と、それが精神を試練して、富より價値のある人間となり、貧富にかゝはらず努力するのが生の本義と見えたら此話も劇となつた効果があらう。

十種香の舞臺

―その他―

高谷　伸

劇の發達の跡をふりかへると、宗教上のある形式として用ひられた時代、單なる物眞似狂言として見られた時代、教化の機關として用ゐられた時代、純粹に舞臺藝術として觀る時代などいろいろと見ることができるが、早學問といつて芝居によつて倫理を說き歷史を教へやうとした時代はかなり長く勸善懲惡といふことが、言はゞ劇壇の主潮でもあつたといふことさへできる。

この早學問といふ點で立志傳鹽原多助經濟鑑が劇化されたとしてもそれだけでは曲がないので噺にしても道連小平などの件りが挿まれたりする。しかし、そこに色彩といふものをすつかり忘れてしまつたために、聞くだけの人情噺より當然面白いにきまつてゐる芝居の鹽原多助の方がそれほどにないといふ結果にたつてしまつた。同じやうに噺から出ても牡丹燈籠には『からころ』の下駄のひゞきをきかす高座とはまた別趣の味が舞臺に出るが、多助の方はよほど難物である。

それに較べると廿四孝のやうな院本物には何といつても傑れた點がある。

それに就ては大體前輯の拙稿『歌舞伎禮讃』の中に述べたがさらに部分に就て述べることゝする。

廿四孝の四の切、十種香から狐火までを見て第一に目のつくのは舞臺上の均齊のうまさである。正面に立つ勝頼を中心に上手には「舘の娘八重垣姫云なづけなる勝頼の切腹ありしその日より一間どころに引籠り床に繪姿かけまくも御經讀誰のりんの音」に對し下手には「こなたも同じ松虫の鳴く音に袖も濡衣がけふ命日を吊ひの位牌に向ひ手を合せ――」てゐる。

この三人の關係を勝頼を中に左右均齊に進めて行く技巧はこれに限らず玉三の金藤次を中心に桂姫初花姫の布置などにも見る院本作者の常套手段であるが、この場合には玉三の赤姫を二人並べた純粹の均齊ではなく、根本を均齊に、いはゞ勝頼を頂點に八重垣姫濡衣といふ二邊を持つ二等邊三角形を作り、その各邊は相似といふよりも陰陽の相對的効果を强めるために役立つてゐるのである。

長尾謙信の娘として育つた八重垣姫はどこまでも陽性であり、美濃の城主齋藤道三の娘でも不遇の人濡衣はどこまでも陰性である。

色彩から見ても着附は赤と黑である。まさに陽と陰である補助色も白や金に對し水色である。二人の着附でも既にこの對比を持つのみでなく一方が現世的な色彩の繪姿に對し他は白木の位牌である。小道具にも陽と陰の相對を見る。境遇もちがへば性格もちがひ、外面的にも內面的にも好對照を持つ二人の女性がからみあつて勝頼を中に進んで行く、この巧みに半二の腕が見える。

狐火は八重垣姫のひとり舞臺である。

諏訪法性の兜を持つた姫をとりまく狐火のいろどる幻想の世界こそ、歌舞伎獨特の魅力である。男のためといふ一心、それが兜と姫の姿態とにあふれてゐる。姫のひるがへる袖の搖影とともに狐火はあやしくふるへる。兜に男を象徵させたのも心憎いうまさである。

八重垣姫はこの二場で遺憾なく現れてゐる全曲を通じても姫のしどころはこの場より無いが、全體としては姫以上に筋の上に重要さを持つ濡衣がこの場だけでは、やゝ不分明になつてゐる。そのために、濡衣と勝頼の關係が曖昧になつてくる。簑作と勝頼との差も、二段目の板垣兵部のとりかへ子を說明しない限りわからない。要するに武田勝頼として切腹した盲目の若殿は實は兵部のとりかへて置いた僞勝頼で、身代りにすると兵部がつれてきたが時刻遲れてまにあはなかつたのが本ものの勝頼でこれが庭作り簑作となつて入り込むのである。姫と勝頼との許嫁は第一段で說明され、濡衣がこの盲勝頼と戀仲だつたことは第二段で說明されてゐる。その上四段目の口、道行似合ひの女夫丸は、この勝頼と濡衣との道行である。しかも可愛相な濡衣は父道三の炮火のために、たをやめ御前の身代りになつて死ぬのである。

かうした複雜な筋を一幕や二幕で現はさうとするのは無理であるし、演者もこの葛藤を見せやうといふのではないと思ふ。

十種香のおもしろさは舞臺上の並列的進行と色彩の對照にある。

狐火はその怪奇的な幻想にある。

これらのおもしろさこそ歌舞伎劇の本質的價値だと思ふ。

廿四孝といへば三段目の慈悲藏と横藏の件も面白い廿四孝の名題もこの方が主でできたのであるが、俳優の都合でこの頃は十種香の三回に對して一回の上演もないのは、この舞臺上の均齊の强味に押される點も多少はあるのであらう。

わたしはどこまでも歌舞伎は色彩が舞臺効果の上に强い力を持つことを主張する。

辨天座の五月

辨天座五月興行は二十九日初日で一回興行に還り津太夫は極め附きの「寺小屋」に土佐の「酒屋」朝太夫は定評ある美聲で「重の井子別れ」を語る尙新加入の貴鳳太夫は團六の糸でツケ狂言「淡路町」を語る。その語り場は左の如し。

前「菅原傳授手習鑑」大序「大内清涼殿」(淀路太夫、稻丸以下)「時平別業」(源福太夫、友作以下)「加茂堤道綱横死」(源路太夫、越惣太夫綾太夫、清二郎、可太郎、八造)「杖柳鑑」(島太夫、廣太郎、友平、友若)(相生太夫友造淺造)(和泉太夫友之助・八助、綱右衛門(町太夫歌助芳之助)「東天紅」(つばめ太夫、勝市)「相亟名殘り」(大隅太夫道八)「車先」(越名太夫、鏡太夫、富太夫、鶴尾太夫、猿二郎、猿太郎、友衛門寛市)「車場」松王丸(叶太夫)梅王丸 錣太夫)櫻丸(相生太夫)時平(島太夫)杉王丸(大隅太夫)三味線(叶)「茶釜酒」(駒太夫、才治)「喧嘩場」(文字太夫勝平)「櫻丸切腹」(源太夫仙糸)「寺入り」(角太夫、猿糸)「松王首實驗」(津太夫、友次郎)中「艷容女舞衣」「酒屋」中(錣太夫、新左衛門)切(土佐太夫、吉兵衛琴團二郎)次「戀女房染分手綱」「重の井子別れ」中(越名太夫友之助)切(朝太夫松太郎)切、梅川忠兵衛冥途飛脚」、淡路町」(貴鳳太夫、團六)

前「菅原傳授手習鑑」大序より四段目までは文五郎の女房千代で榮三は得意の菅相烝に令人松王丸の二役で活躍尙中「艷容女舞衣」酒屋の段次「戀女房染分手綱」重の井子別れの段では文五郎の嫁お園と乳母重の井で榮三は切「梅川忠兵衛冥途飛脚」淡路町の段の扇屋忠兵衛等兩者が各狂言に必死の努力をすると、尙其の他の役々は親白太夫、武部源藏(玉次郎)判官輝國、母妙かん(玉七)伯母覺壽、酒屋半兵衛(竪龜)女房戸浪、親宗岸(小兵吉)宿根太郎、舍人梅王丸丹波屋八右衛門(玉松)立田の前、舍人櫻丸下女まん(紋十郎、藤原時平、春藤玄蕃(玉幸)女房八重、美濃屋三勝(扇太郎)土師兵衛、本田彌左衛門(門造)奴宅内、手代伊兵衛(玉市)雁迎イ、酒屋半七(玉德)苅屋姫、女房はる(紋太郎)加茂道綱、宰領(兵十郎)川邊武彦、宰領(兵次)天蘭慶、五人組、山田甚内(傳之助)定國、半兵衛女房(冠四)時世親王、馬方三吉 市松)百姓十作、腰元お福(文之助)虎王丸、丁稚長太(光之助)下男三助、馬方(鷺三郎)三好清貫、小太郎(萬次郎)よだれくり、調姫(留三郎)菅秀才おつう(紋三郎)御臺所(玉米)

成駒屋十二姿

木村富子

明眸は甲斐に生まるゝ水晶の美しさよりうつくしきかな

揚幕をいづる紙治が薄藍の頬冠りより淋しきはなし

行燈の灯に惱ましう浮きいでし紙屋治兵衛の白き横顔

椀久がかざせる花を見てしより物狂ひをもあはれとぞおもふ

清七の瞳は悲し憂き戀に醒めはてし身か醒めあへぬ身か

編笠をとれば艶なる櫻丸わが羽子板をいつ抜けて來し

朝日さす波間に組んづほぐれたる柴の母衣くれなゐの母衣

出陣のどよめきを後に立ち出づるあな蓮生が素足の草鞋

鴈治郎の富樫の姿すがすがと舞臺にありぬ艶なる夜かな

鐵札かはた金札か人はみな默す靜寂の心をどりよ

南部坂にふれる白雪幕切れのまばゆきばかり降れるしら雪

武士道は成りぬ降り積む雪よりもかじやき見ゆる主税のひとみ

鹽原多助漫談

富田泰彦

臺銀と鈴木商店との多年の腐され縁から遂々我國經濟界に近來になき恐慌の襲來となつた。其處で若槻内閣の拋げ出しやら、政友内閣の出現へと、可成り凄い混亂を見せた財界と政局とが、モラトリアムと云ふ注射が利いて忽ち人心安定への第一歩を踏み出したことは頗る慶賀して可いと思ふ。

◇

此經濟的な危機を、見ン事突破し、辛き試練を經て來た大阪市民への慰安として、白井社長が『鹽原多助經濟鑑』を持ち出したことは、遺に天才的興行手腕を以つて今日の覇を握れる人らしい寔に機宜を得た狂言の選擇振には、感服の他はない。

◇

殊に鴈治郎氏の『鹽原多助』と云へば、初演以來定評のある是れが正眞正銘の秘藏狂言と昇いでも可い筈のものだ、初演は明治二十二年九月の浪花座で、三十八日間も大入を續けたと云ふ記錄がある——勿論その頃は私は漸と三歳になつた位だから知らないが、ずつと後に中座で同優が上演したことのあるのは記憶してゐる、之れも大方二十幾年かは經つて居よう、それ來以今の右團治が數年前に演つたきりで、道頓堀としては實に珍重して可い狂言だ。

◇

鹽原多助は實在の人であることは誰かも書くだらうが、上州沼田在下新田の角右衛門の子である、先祖は鹽原八郎家忠から出て代々名主だつた。後に本所相生町二丁目の炭屋鹽原屋多助として立志美談中の人で、文化十三年八月十四日に七十四歳で沒し戒名は『鹽原壽山居士』と云ひ、江戸淺草七軒町東

福寺は、その菩提所だつた。その子孫の幸次郎と云ふのが先代菊五郎が初演の砌濱町一丁目で經師職をしてゐて、多助の遺物を提供したり、その芝居にも二百名の組見をこしらへたりして多いに放奔をしてゐることは、その頃の『歌舞伎新報』に記されてゐる。

◇

その鹽原多助の立志傳に、從來の越後傳吉などの筋を欲め込んで三遊亭圓朝が得意の讀物として終つたのが、更に歌舞伎の舞臺に移したのは、鴈治郎が嚆矢とされてゐる。作者は勝諺藏で『鹽原多助經濟鑑』である。是れを前後して一昨年死んだ宮島助が、先代橘三郎の爲めに『薪炭翁青馬曳綱』と云ふのを書いて京都の芝居で出してゐる。

◇

先代菊五郎の演つたのは、それから三年後の明治二十五年一月興行の歌舞伎座で藝題も『鹽原多助一代記』で默阿彌、三世新七、竹柴其水、久保田彦作の四人の合作になつてゐる——斯うして此狂言は三系統に分れてゐることが今日傳はる臺本は、恐らく是れ等のものをアレンヂされたものだと思ふ。それに、六幕目十一場からの通し狂言で、さしたるヤマもないだけに、今の觀客に受けるか何うかと危ぶまれてか、今度は餘程現代式に改刪を加へたと云ふ話である。

◇

それで鴈治郎と、菊五郎との多助の比較評は、鴈治郎のは如何にも田舍の實直な人に見えたが、菊五郎のは、少しイキ過ぎて江戸ッ兒の多助だつたらしい、その代りに道連れ小平でウント受けたらしい、大躰『越後傳吉』を多分に用ひた狂言だけに、菊五郎のは中幕に『箱根山の會我對面』を小平の夢の場として持ち込んである、是れは四世歌右衛門が弘化三年七月廿七日初日の市村座の『青砥稿』の越後傳吉の六幕目に常磐津の『毗鄙』を欲めた趣向をその儘失敬したものらしい。

◇

今度は序幕の大原村の茶店の場と返しの數坂峠の場を拔いて、直ぐに多助の内の場から出るらしい。茶店の場は、この劇の大立者となつてゐる青(馬)を立場の九兵衛から鹽原の角右衛門が五兩五粒で買ひ取る約束をする、五十兩の才覺に盡きた岸田右内が樣子あり氣に角右衛門の後を追つて行く處、舞臺が廻はると、逢貝村の谷間場で主人を世に出したいばかりに五十兩の金を貸して呉れと右内は角右衛門に賴むが、勿論通りがゝりの二人とて、キツパリ斷はるトゞ脅しのつもりで刀を拔いて角右衛門を追ふ。

◇

今度は數坂峠の觀音堂へと「泥棒〳〵」と角右衛門が逃げて來る「コレ滅多なことを云つて下さるな、五十兩の金さへ貸して下されば！」と刀を置いて頼むが、聞入れぬ遂には角右衛門と組打をしてゐる内に右内が、ズドンと鐵砲で打たれる五段目の勘平もどきに獵師姿に浪人の鹽原角右衛門が出て來る、こゝで右内が角右衛門の家來であることが判り、女房おかめと二人の仲に出來た娘お柴の行末を頼んで死ぬ。其處へ浪人角右衛門の妻おせいが息子の多助を連れて來る、さうして五十兩の金から多助の養子問題が、兩角右衛門の不思議な邂逅ひから纏まる。浪人角右衛門は江戸へ、百姓角右衛門が多助を連れて我家へ――而して此間十五ケ年相立候で、二幕目の多助の内の場になるのだ。

この筋を何處で何う賣り込むか、知らないが、此の序幕は如何にも圓朝が作意ある、劇的な幾多の因果關係を持つ伏線が張られて、所謂くさ草紙趣味が横溢してゐるやうに思はれる。

◇

兎に角『鹽原多助』は鴈治郎の當り狂言であるし、松竹も久しく伏せてゐた取つて置きの狂言であるし、來年は圓朝の三十年忌に相當するから、大阪上演が、機縁となつて恐らく今秋には東京の舞臺でも誰か演るに違ひない、大躰が縁起の好い狂言である。菊五郎も『鹽原多助』で味を占めたその年の夏直ぐに圓朝物の『牡丹燈籠』を書卸さした點から見ても能くそれが判かる（二、四、二五）

◇新刊紹介二書◇

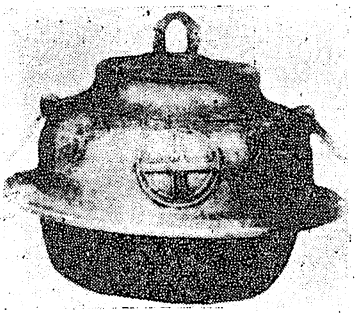
愛の劇場　鈴木善太郎

この標題と序が語つてゐるやうに著者の「劇場を愛するこゝろはこの一卷の書と成つた」のである。これは著者が今日の劇場を愛するが爲に、明日の演劇について多くの期待と希望をかけて眞面目に考究研精をしられた記錄に外ならない。

第一部は著者が「今日の劇場の仕事をしてゐる一人」として歌舞伎劇や新劇に就て明論卓説してゐる。第二部には著者が外遊した時の見聞、劇作家モルナアやコツアドに就ての研究を紹介してゐる。卷中に外國劇舞臺面の珍らしい寫眞が十數葉も挿まれてある。切に演劇愛好者の必讀を望む。（定價貳圓、東京市京橋區弓町九、彩雲堂發行）

犯罪學者の眼　ウキリアム、ハラット著　高橋誠之譯

而白いほど興味ある探偵小説である。「一千磅の誘惑」は「長い最後」にまで引込して行く。その他サンツの「若い巴旦杏」やコナン、ドイルの「ボヘミヤの國辱」等數篇、世界探偵作家の粹がこの一書に收められてゐる。（定價壹圓貳拾錢、大阪市浪速區河原町一、波屋書房）



下新田紀行

——鹽原多助のこと——

田中總一郎

——上野を出た時はむし暑かつた。

私は、汽車の中で、これから訪れようとしてゐる鹽原多助の故郷のことを、色々に想像しながら、怠屈な時間を送つた。

高崎で後閑行にのりかへる。沼田で下車。

「沼田在下新田」と言ふのだから、沼田で下りればいゝと思つた。そして沼田で、一番古くからある宿屋を捜して泊つた。

宿の老主人に尋ねると、下新田は、これからまだ三里も奥だと言ふ。然し、そこには、今も、多助の生家が現存してゐると聞いて、やゝ安心する。

翌朝、早く、宿を出て、自動車をやとふ。

東京では、もう櫻も散つてゐるのに、この邊りでは、まだ梅が咲きのこつてゐた。——

途中、月夜野村を通る。義民茂左衛門の地藏尊がある。河原に淋しく立つてゐる刑場の跡を見て、私は、去年やつた井上正夫の演劇を想起した。

月夜野は、今も、「義民」の出そうな貧しい村らしい。荒れ果てた村落だつた。

路は、赤谷川の懸崖に添つて、奇勝を追ひつゝ進む。

「——あすこが下新田です。」

運轉手の指さす方には、白い土藏がいくつも建ち併んでゐ

た。

「これが多助様のお墓です。」

教えられた路傍の一角に、六七基の墓があつた。

私は、車をそこですてて、墓に近づいた。そして「壽算居士」の墓標に額づいた。

少し行くと公園らしいものが建設中だつた。池や築山の向ふに、六尺に十六尺位ある大きな碑が、まだ白布に覆れたまゝ建つてゐた。

私は、そこで働いてゐる石工の一人の尋ねた。

それは、多助の碑だつた。多助の紀念公園を造つてゐるのだつた。

多助の生家と言ふのはすぐに判つた。

立派な家だつた。表に樫の木があつた。

案内を乞ふと、三十前後の青年が出て來た。

私は、來意を述べた。

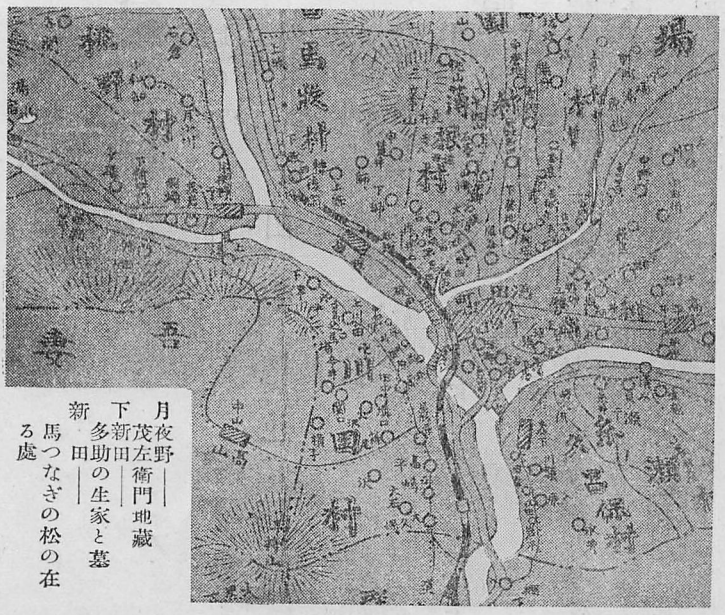
青年は、快く私を家へ入れて、應接してくれた。

その人は、多助の七代の子孫にあたる鹽原裕太郎氏だつた

他には、その祖母にあたるらしい老人がゐ合した。

私は、ぶしつけな訪問を詫びながら、多助に關する一切のことを話して下さいと乞ふた。

私の頭の中には、故人圓朝の物語がしつかりと收はれてゐるのだから、今の私は、單なる聽手となつて、「物語」と「實際」の差異を判つきり知りたかつたのだ。



月夜野——茂左衛門地藏

下新田——多助の生家と墓

新田——馬つなぎの松の在る處

裕太郎氏は、枘撲な口語でぽつりぽつり話してくれた。

鹽原家は、昔、某藩に仕へた侍のなれの果であること。

多助は養子でなく實子であること。

繼母とその連子(圓朝の言ふおかめ、おえいである)は實在してゐて、多助は、その繼母にいぢめられて家出したことは事實であること。

多助は、江戸へ出て、刻苦して、炭屋渡世で成功し、その晩年、(今から百二十年位前)江戸から、多額の金を、この下新田に仕送つたこと。

現在の鹽原の家は、多助の送金によつて建てたこと。

裕太郎氏の「多助様」の話はそんなものだつた。勿論その他にも、立志傳中の人にふさはしい數々の逸話も傳へられたがそれは、よくある奴で、常識的なものだつたので、大して私の感興をひかなかつた。

それよりも、その裕太郎氏や、時々口を挾さむ老人の口の端に、私達が圓朝の速記本で讀み知つた「がんす」とか「むし」とか「だんべえ」とか言ふ方言が浮ぶ時、私は、言ひ知れぬなつかしさを覺えた。

「多助様が馬をつないだ松がのこつてゐます。御案内しませう。」

裕太郎氏は、丁度勤めてゐる銀行が休業中だつたので、先に立つてくれた。

下新田は、富裕な村らしかつた。月夜野とは雲泥の相違だつた。「多助様」が出て以來、村の人はそれに見習つたのであらう。

所謂「馬つなぎの松」は、赤谷川の吊橋を渡つて十四五町山を上つた所にあつた。

この邊は、養蠶地なので、至る所桑畑だつた。

芝居でする「馬の別れ」は、舞臺一面のすすき原だが、この「馬つなぎの松」は山の中だ。眺めがよすぎる。

私は、もう一度下新田へ下りて、裕太郎氏には厚く禮を述べてお暇した。

裕太郎氏の話は、仲々面白かつたが、時々、その話が圓朝の「物語」を話しかけるので、多少恐れ入つた點もあつた。

それから私は、この近所の風俗を調べた。

六十以上の老人を探しては、雜談を交はして言葉の研究をした。

誰もが「多助様」を鄕土の名士と崇拜してゐるのはいゝ心持だつた。

この下新田からは、生方と言ふ代議士まで出してゐる。

私は村端れの茶店で「鹽原羊かん」をほゝばりながら、とつぷりと日のくれおちるまで、そこの老婆と「多助様」を語り合つた。

鹽原多助 馬の別れ

川尻清潭

ひいき役者鴈治郎子が、先月東京の歌舞伎座に出演中、二三度話合つた事のあつた時、『鹽原多助』の狂言の話が出た。

中座に上演される『鹽原多助』は東京で五代目菊五郎に書卸された三世河竹新七脚色、默阿彌、其水、彦作諸氏補助の正本とは、大分趣を異にしてゐる由であるが、併しいづれにしても圓朝の原作を土臺とした事に變りは無く、殊に『馬の別れ』は、東西とも大同小異に思はれるので、五代目菊五郎が如何に此場面に苦心を凝したかを、今回鴈治郎子の勤める多助の舞臺に對照して見る事も、好劇家に取つて一つの興味であらうかと、當時の記憶を雜然と書並べる事にする。

東京での『鹽原多助一代記』は明治廿五年歌舞伎座一月興行に書卸されたもので、興行主の田村成義氏が、千葉勝五郎氏から金七千圓を借受けて益を開け、資金と同じ程な純益があつた大當りの芝居で、開場に先立つての宣傳としては『鹽原多助』の立志美談が小學讀本に揚げられてあつた所から、教訓劇を標榜して東京府下公私の小學六百余校に筋書を配布し、教員と生徒に限り、場代と飲食物を半額にして優待したのも評判の一つとなり尙鹽原多助の後裔が日本橋區濱町に經師屋を仕て居たのに交渉して、先祖の多助が用ひたと云ふ品々を借受けて飾つたりしたのであるが、とにかく鹽原多助と云ふ人の成功の證據は、上州榛名神社の石の玉垣に『奉獻江戸本所鹽原多助、文化五戊辰年八月吉祥日』と刻まれた文字が現存して居る事に於て明らかになつて居る。

五代目菊五郎がこの狂言を上演するに就ては、歌舞伎座の附茶屋武田屋の二階で、圓朝に『鹽原一代記』を讀んで貰つた其時菊五郎の言つた言葉に『飛んだ事を仕て仕舞つた、圓朝

さんの話は聞かない方がよかつた、聞けば話に依りたくなるが圓朝さんの多助は出る度毎に泣く、しかし舞臺で私があの通りを仕たら、決して見物は泣いては呉れない、私は馬の別れと戸田の邸の親子の對話だけを泣いて見せて、其外は一層間の抜けた男で演じて見たいと思つて居る』と云つたのは、流石に舞臺を知つて居る考へであつたが、又其時の圓朝の言葉に『私の話は私が一人殘らず饒舌るので、つまり出て來る人物全部が圓朝の口から出る所に面白味も湧かせられるのだが、舞臺ではいゝ役者と惡い役者に役を振分けるだけに話で聞かせるやうな興味は出ますまい』と云はれたのを、一座の者が口惜しがつた所から、五代目はそれに附込んで、『皆んな氣を入れて、圓朝さんの話以上にやつて呉れ』との聲掛りで、一同が骨を折つて勤めるたけ、舞臺が緊張した上に、更に五代目のやかましい小言が利いて、狂言は一倍面白く見られ、圓朝は特に揃ひを拵へて、三遊亭の全員を率ゐて盛大な觀劇會を催した。

扨庚申塚の馬の別れで多助の拵へは、サラ毛の鬘を甘いクリにして、ボツトを避けた根上り髷の誂へ、着附は田舍縞の太めの筒袖の上から袢大を着て、小倉の角帶を締めた好み、破れのある半股引、糸だてと竹の子笠を着た裝で、上手から馬を引て出るのであるが、素顏同樣な砥の粉作りが、とかく老けて見えるのを、若く見せる事に就て苦心を疑したもので、所で馬が動かなくなる、圓次郎が替つて引て花道へ入る、多助が圓次郎の籠を背負つて一人になり『女房のお榮に迄馬鹿にされる俺だから』云々でホロリとして、花道の附際で一寸よろけ、籠を一ト搖り背負上げて『圓次どん〳〵』と呼び乍ら花道へ入る。

黑幕を振落すと舞臺一面の薄原になり、圓次郎が馬を引て花道から舞臺へ來る、丹次が多助と思つて突く、それと同時に多助が花道から出て舞臺へ來て死骸につまづき、屹驚して跡へ下がるのが馬にぶつかる手順で「青が爰に居るからはもしや」云々で、死骸を抱き起すのが月の出るキツカケ、多助が圓次郎を抱へて行かうとする、圓次郎は言殘す事があると云ふ、多助がそれを聞て『言つて置きたい事があるとは』と下に居るのが虫笛入の合方の掛りで『錢も取らずに逃げたから』云々の臺詞があつて落入る、多助が『情けねえこんだなア』と泣くのがチョボの掛り、いつもとは違つて突然と語り出させる所に五代目の若心があつたもので、有名な安さんの三味線で菖蒲太夫が語つて、毎日々々五代目から駄目を出されて居たのであり『扨も果敢なき世をかこち』からメリヤス

になつて、多助が『口をしめしてやるべえか』から説教の合方死骸を運ぶ所から文彌の合方と云つたやうに、事細かな註文が附けられてあつた、多助は秋草を拔いて手向けをしてうしろ向きで拜むのがチョボの切れで又メリヤスになり、それ迄下手に居た馬を眞ん中へ連れて來て正面を向け、馬の背に掛けてある『鹽原』と書いた油紙を外してたゝみ、カマスを取下して藁を搔廻して首へ掛けてやり、張面を出して金の整理をして、自分の錢の二百文だけを懷中する事があり、再びカマスを下して見ると、馬が少しも藁を喰べて無いので泣き、手綱をまとめて馬の鼻面を擦るのが、床の『多助は靑に打向ひ』となり、此時から四方八方で虫笛を吹かせ、此段へ圓朝の話の口調をそつくり取入れて素で臺詞を云つたのが大味噌で、『實に名殘が辛れえぞよ』で、床の『人に物言ふ如くにて言聞かすれば頭をうなだれ』になり、是から菊五郎式の芝居に取掛り『涙と共に言ひければ――アア、アヽ、アヽ、ア』と云つたやうな語り口で、絃に乘つて跡ぢさりをしたり、『蓍類乍ら兩眼に』云々で馬も目をしばたゝき、草で涙を拭く仕科其外耳を動かしたり、尻尾や足を動かしたり、馬にも充分に大芝居をさせて居たもので、多助も淺黃手拭をいろ〳〵に遣つたりして居た。トヾ『靑や別れだぞよ』と多助が上から下へ行くのを馬が咬へて引戻す段取に成り、爰でポテチンがあつて、拂つて下に居る、そこへ馬の首が出る、下からそれを抱へて見上げて極る形ちなどもあつて『いとゞ哀れに鳴る鐘の』で泣上げるのが本釣鐘『うか〳〵しちやア居られないわえ』と云ひ、馬と向ひ合ひの附まわしになり、馬の手綱を一本松へ結び付ける、舞臺が廻る。多助は花道へ掛り、いつもの所で薄を搔分け兩手を舞臺の方へ差出し馬に別れを惜しむ仕科、呼吸を計つて下つて行くのと共に舞臺が廻り切る。多助は思切つて手拭を口に咬へ、兩腕を抱へ込んだ形ちで、振返り〳〵向ふへ入る、多助の體が揚幕へ消えた時、舞臺の引幕が下座だけ殘る位な寸法に締めさせる注文で、それでなければ余韻が殘らないと、頗るやかましく言つたものであつた。

とにかくイナセな役を專賣にして居る五代目が暮の頂上とも云ふべき多助を見せる事が、それが一つの呼物であつたにも相違はないものゝ、さりとて全然イナセな所を見せないのは、見物も物足りない譯であり、又五代目としても損の卦である爲に、二役の道連れ小平に出たのであるが、此小平は至つて臺詞を少なく、いつゝとは行き方を替へて、上州のゴロツキと云ふ所から、糸織の着附に黑八丈の襟の下着を重ね

た三枚着、黑の腹掛脚絆、袁が縞裏が飛白の引まわし合羽に三度笠、胴輪の入つた一本差、草鞋を前ゆるみに履くと云ふ凝り方、殊に圓朝の此件の口演は、前を疊込んで來て爰でグツト締めて、『鐘の響きもシンミリと、又明晩の前講に申述べます』と結んだ巧妙さに、五代目が悉く感心したのを、圓朝は『話だから情景が現はれるが、芝居ではむづかしいでせう』と云つゞけた、五代目は何でも其意氣を出して見せる心になり、庵室から山の場になつてお龜を谷へ落してから『雪にすべつてどつさりと、落ちし數丈の其下は』云々の臺詞を云ひ、舞臺裏で自前の胴羅を打たせて、跡をそつくり圓朝の聲色で『鐘の響きもシンミリ』と締めて言ふ、其處へ枝に積つて居る雪が落ちて襟の中へ入るのが木の頭、それまで黑木綿の頬冠りで包んで居る顏を、此時始めて出して見せるのが幕で、一層際立つてよかつたのである。其後小平を勤める俳優が、山道の手拭を遣つて居たのを見た時、五代目の工夫の用意周到なのに改めて敬服をした事があつた。

其外多少の參考に成らうかと思ふ事を、拾ひ書きにして見れば、馬の別れの前の場、多助が離緣狀を迫られる所では、多助は死んだ親の事を言ふ間を演所にして居る事、又其場へ出る角右衛門は本當に怒る事、丹次は怒つたやうに見せ掛けて鼻であしらつて居て、すつきりした男に勤める事等、又戸田の邸の場へ炭を入れに來る時の多助の拵へは、山口屋の印半天に半股引の裝、鬘は馬の別れより幾分鬢を高くした誂へ炭一俵づゝを天びん棒に擔いで來て、これを物置小屋へ運び込む仕科で、炭屋の樣子を出す事に工夫があつたのと、こぼれた粉炭を拾つて俵の中へ入れるやうな細かい事もして見せ勘定を受取つて錢勘定を丁寧にする事、禮を言つて行き掛け玄關の荷物の札を見て、『今の人〳〵』と呼戻す所、親に逢ふ迄を賑やかにして父親が出てから其話をシンミリと聞き、或は肯き、或は手を振つてイヤ〳〵をする事などあり、座敷の夫婦の方に多く芝居をさせ、多助は間々を縫つて、床の『話す多助がかん難を』で膝で歩いてくつ脫ぎから落ちる事、又『のび上り』で思はず玄關の上へ足を掛けて手拭で拂ふなどあり、幕切に定めし芝居をするであらうと思ふ所を、天びん棒と帳面を持つて一散に向ふ入ると云ふ行き方、次に四つ目の茶屋の場は、十の紋の付いた古着の筒袖、角帶、稍長い千草の股引、藁草履で、天びんへ籠を二つ釣つて擔いで出る、此場は樽久をシテに廻して受け身で勤め、樽久に矢鱈と煙草を喫ます好みで、多助の方は煙草入を持つて居ない事を明瞭とさせる註文、辨當を遣ひ乍らこぼれた米を拾つて喰べる事な

どもあり、經濟話は圓朝の話口調の臺詞で云ひ、おかめに意見をする所に成つてシンミリと芝居をして、おかめに興へる小錢も載いてから渡す事にして居た。大詰はお花が振袖を切る間十玉盤をはぢいて居る事、炭運びになつてから落ちて居る粉炭を明ざるへ拾ふ事、一區切炭運びの濟んだ所で茶を出す事、周圍の人々が言ふ目出度い町名づくしはすべて、時代に言はせ、且つ前々から覺えて居る臺詞を言ふやうでなく、其場の頓智で町名を讀込んで行くやうにと誂へ、それには松助の樽久の臺詞廻しがうまいから、アノ呼吸を見習へと敎へたり、一から十までの大車輪、『是で多助もと』、昔に返つて鼻の下を擦るのが木頭、『男になりやした』と髷の一を直すのが自慢の工夫で、此事は鴈治郎子にも話て置いた。以上手元に正本が見當らぬ爲、床の文句や臺詞は、うろ覺えの儘を書付けた事で、間違ひがないとは言はれぬ事を斷つて置く。

尙『本朝廿四孝』の型との御註文であつたなれど東京で行はれて居る型は、八重垣姫だけでも、團十郎、菊五郎、歌右衛門があり、濡衣と勝賴までを、配するは、甚だ長文になる事に付又の機會にお求めに應じるお約束にして、今回は此稿で擱筆する。

東都のお芝居を
坐ながらに知るには
本誌と姉妹雜誌の
月刊『歌舞伎』を
御備へ下さい。

發行所　東京京橋區木挽町歌舞伎座內
歌舞伎出版部
定價　一部　金三十錢

東京土産『平將門』

井上正夫

暫く御無沙汰した道頓堀に私は最も自信のある、且又、敢て世に誇るに足りるだけのものを持つて來ました。それは『平將門』です。

私は眞山青果氏の戯曲を非常に尊敬してゐます。だから氏の戯曲は殆んど眼を通してゐます。昨年の春、丁度芝居が休みだつたのでゆつくりと讀書の時間がありました。

その時異常の感激と、興味とを以て『將門』を讀み終つた私は熾烈な上演慾に驅られて、それからといふものは熟讀に熟讀を重ねました。

そして時機が來たら是非上演をと、其の日の來るのを待つてゐました。所がその時機は容易に來ません。

まだまだ早い。

これは餘りに高踏的だ。

これは文學だ。

といつた樣なこんな聲ばかりが矢鱈に耳にはいつて來るばかりでなかなか上演されさうな氣配は見えません。だからといつて只手を組んでその聲を受ける事は如何にも殘念なので、私は上演されるまでは——と臍をかためて待ちました。

が遂に私は勝つた。其の時が來たのです。本郷座の二月興行として上演戯曲の中に『平將門』を加へ得た時の私の喜びは此の上もないものでした。

緊張し切つた稽古を數日重ねて、初日を濟ました時、ほつとした涙ぐましいまでの快い氣分に數刻浸たる事が出來ました。

二日、三日、四日ととうとう千秋樂の日迄熟考し、研究し續けて努力した私の辛苦は完全に報はれて、文壇、劇壇批評家の諸氏より絶大な讃辭を呈され、私の藝術慾はすつかり滿足しました。だがこれ程の歡喜の絶頂に在る私の心の一隅にそれと比例する程の悲哀も潜んでゐたのです。

それは此の『將門』が私の藝術としては前例の無い程至大の賞讃を浴び――敢て廣言するならば劇壇の一大收穫とまでの榮譽を受けながら興行としては經濟的に惠まれなかつた一事です。

何故でしようか。美、味い食物を與へられて喜ばない者が無いと同樣に、良い芝居を見せて喜ばれない筈はないそれなのに何故經濟的に惠まれなかつただらう。

私は一つの大きな懷疑に卷き込まれてしまいました。

新劇の進むべき前途は益々困難なものだ※るものでしようか。

（山田盤彌の四郎と井上正夫の將門）

※らうか。――そんな筈は無い。――あの長い傳統の上に樹つた、歌舞伎劇は今暫く別として――新派は既に滅びようとしてゐる。

然らば人々は何を求めて如何なる形式の演劇を我々に要求するのか。

新しい國劇の樹立。

此の勇ましい雄叫びを數々我々は耳にします。が果して此の呼聲が大衆を代表するものでしようか。

×

人々は依然として歌舞伎芝居に陶醉し、チヤンバラ劇に熱狂し、金色夜叉、不如歸に潜然と涙してゐるのではないでしようか。

×

我々が眠つてゐるのでしようか、大衆が眠り過ぎてゐるのでしようか。この大衆の夢を呼びさましてはいけないのですか。

そんなことは無い。

今私は此の大衆の惰眠を叩き起さうとして懸命の努力を續けてゐるのです。俳優としての私の最も大きな且又最も意義ある仕事として深甚な喜びをもつて此の困難な新劇の前途開拓を力限り、根限り熱誠といふ鶴嘴で堀り立てゝ行きます。

さうして置けば後からローラーで地ならしして呉れる人々も居るでしようから。

×

兎に角『平將門』は是非觀て頂きたいのです。さうして私の努力を買つて頂きたい。私の前述の言葉の眞僞を確めて頂きたい。

その上で良い所は幾らでも讃めて貰ひませう。又惡い所はどしどし御遠慮なく叱つて頂きたいのです。それが私の前途を照らす光明となり、現在及び將來の糧となるのですから。

×

今一つの大きな慾求は皆さんの澤山の手で夜が明けかゝつてゐるのに、未だに夢を追つてゐられる方々の扉を叩いて歩いて頂きたいのです。

これは當然要求してもいゝことと敢て信じますから。

×

以上の私の皆さんへの要求は今度の來阪に際して私の持つて來た『平將門』と云ふ土産物に對して、是非共皆さんから受けたいお禮の言葉に過ぎないのであります。

眞山氏の『平將門』に就て

綿貫六助

東京で上演された平將門に就ての好評は、大したものであつた。觀客の誰もかれも、みな、口を極めて賞讃してゐた。私は、その當時、讀んでもゐなければ上演も觀なかつた。

文壇の方でもその通りの好評で、その頃、同じく上演された正宗白鳥氏の『光秀と昭巴』とが、相對して批評されてゐた。

吉田甲子太郎氏は、時事紙上で數回に亘り、正宗白鳥氏の『光秀と昭巴』は、讀んでみて面白かつたが、上演では落膽したと云ひ、『平將門』の上演を激賞讃美してゐた。その前、藤森淳三氏も同じ事を云つてゐた。

所で今度、大阪でも『平將門』が上演されるから、何か書けと、姥谷久一氏から云うて來られた。幸ひ私は十五日多摩川邊の桃で强雨にぬれて、感冒にかゝり四五日寢てゐたからその機會に、中央公論四月號の『反逆時代の將門』次に同誌一月號の『平將門』即『私鬪時代の將門』を讀んでみた。

私は感冒の苦痛を忘れて讀耽つた。多くの人の好評以上に私は感激させられた。二十歳年前、陸軍病院入院中に、レミゼラブルに感激して、數夜徹宵病苦を忘れたことまで想出した。

×

最初に『反逆時代の將門』を讀んだとき、これは大した力作だと思つた。立派な藝術品だと思つた。

天慶二年九月から仝三年正月までの、三十六歳、血氣旺んな將門がよく書かれてある。作者も云つてゐる如く、戲曲として、この四幕の方が遙かに上だ。力點がこれにある。

『平將門』の私鬪時代の上演を觀た人に、この第二部曲を讀むことをおすゝめしたい。さうすると、眞山氏の戲曲家としての眞價が、成程とうなづかれるであらう。

×

將門は、やはり心的苦鬪をつゞけてゐるがそれが、第二部曲に於ては奇異なるカタストロフに到達するのだ。苦悶の餘り、彼は、たうとう耐え切れなくなつた。『平將門』では、凱旋後、酒をつゝしみ、凝つと自身を見詰めてゐた將門が、今度は、神前で、大盃を呷り、その昔、同性愛の對照であつた

從弟の貞盛、その妻京御前の囚れの身をいたはり、頻りに、貞盛の行狀を訊くのだ。將門は京御前にも理解されなかつた卽、京御前は貞盛の行狀を云はない。激怒の將門、たうとう神前にて京御前を凌辱しようとする。それを多勢に取押さえられる。時に、貞盛が秀鄕の兵一萬餘をかりて攻入ると云ふ所で終幕になる。

第一幕の、五歲になつた吾子祝ひの場面、四郎の戀を諦めさせようとその失戀を慰めるあたり、なんと、ものわかりのいゝ善良な、率直な人間將門が出てゐることであらう。

第二幕、妻、東の君が、よくある奴だが、將門に、戰爭を焚きつけてゐる。それを苦しむ將門が、逃げてきた玄明をかくまひ、追捕の火長亂入の裡に、靜かに秀鄕の來臨に敬意を表するあたり、將門の、はにかんでそわ〳〵するとは全然別箇な、勇將的度量をみせてゐる。

第三幕、どの戰にもある事だが、これにも、爲憲と云ふ半狂亂の子アツパが、將門に無禮をして、それが他日の大患を惹起す動機となること。第一部曲で面會し得なかつた將門貞盛兩人が原野で會つて懷かしがる。二人とも手を取り合つて泣く。けれども、たうとう、剛直で卑怯ぎらひた將門と、京育ちの宮びかた貞盛と合ふ筈もなく引別れる。こゝらも作者のねらひ所で、ちよつと云ひ盡されない深味がある。

大躰第二部曲が、性格描寫なども、深く突込んでゐるのに對して、第一部曲は、ぐつと動きが多く、色彩に富み、なるほどこれでは、あの藝術味を遺憾なく板の上に載せることができるだらうと思はせる。

內容などくど〳〵もう云はない事にしよう。たゞ、私がこの『平將門』をよんでみて、この劇は、今の世のどんな人でも誨へられる事の多い劇である事、それ丈、此作家は、長年月の忍苦で、深く廣い學問と心的勞苦をつゞけてきた事が判る。

劇は勿論詩であるが、その詩がある譯書にあるやうな生のまゝで混入しずに、よく作家の力で融合せられて底深く澁い光を放つてゐる。誇大でなしに、セエクスピヤを讀む氣持がすると云ふのは、作家の洞察の深さと、同情の博大さとを感得するからであらう。最、性格描寫に力を用ゐたのは、將門貞盛、四郎であらう。そしてガクシヤウである四郎(弟)だけに、幾分の理解をされただけで、他から利用され、誤解され擔ぎあげられ、苦しみ〳〵さうして終に奈落の底に叩落される人間將門の性格を綜合藝術に仕あげた手腕は、脚本流行の今日偉とすべきだ。——頭痛亂語多罪——

井上正夫と新派劇

楠田敏郎

冒頭から餘談を書くのはすこし氣がさすけれど、いま、私はレシーバーを耳に當てゝ、花柳章太郎、大東鬼城と云ふ連中のラヂオドラマ「與三郎」を聞いてゐる。

が、何と云ふ拙づさだ。

ラヂオでの放送は、歌舞伎俳優諸君も、新劇俳優諸君も、映畫俳優諸君も、みんなやつた。それを、たいていは聞いたが、そのなかで今夜のものなど、最も拙い方に屬する。

花柳章太郎君に苦情を云ふために、私はこれを書いたのではない、實は、これによつて新派劇と云ふものゝ現在の狀態を云ひたいのである。

×

曾て私は、自分らの雜誌「藝術運動」に於て「無用なる演劇」の題下に、いかに現在の新派劇が愚劣であるか、行詰つて居るか、そして、またいかに無用であるかに就いて論じたが、その時、新人清水一郎にひどく愚痴をこぼされた。清水君の、その時の言葉によると、新派はたしかに惱んでゐるが、行詰つてはゐない、いま大いに打開せんとしつゝあるのだと云ふことだつだ。けれども清水君さへ、新派劇に愛想を盡して、映畫に走つたほどだから實に、私の新派無用論は、單なる暴論ではなかつたことになるのである。

×

新派劇は……と、私は此處で新派劇無用論をもう一度むし返すつもりはない。とにかく今では、新派劇はすつかり民衆から見放されて、滅亡したものだとおもつてゐる。

ところが、不思議にも、その滅びた筈の新派劇の中にわが井上正夫氏が踏み止まつてゐるのである。いや、さう云ふよりも、わが井上正夫氏があるために、新派劇がすつかり滅びたと思ひ切れないのである。それほど、井上正夫氏の存在は、しつかりした感銘を我等に與へてゐる。

×

喜多村綠郎あるために、新派の女形が滅亡しなくて困る。と云ふ意味のことを、誰かゞ云つたのを私はおぼへてゐる。

井上正夫あるがために、まだ新派劇が滅びない。私はさう思つてゐるのだ。新派は滅びるべきものだ。すくなくとも、我々は新派の滅びてゆくことに、何の哀愁や未練もない。それだのに、井上正夫氏が、ひとり踏み止まつてゐる姿を見ると、悲壯な感じに打たれざるを得ない。そして『新派も、まだ拓くべき路があるのかな』とおもふ。

×

映畫にも出るし、新劇畑へも踏み込むし、井上正夫と云ふ人は、鳥渡、市川左團次と云ふ感じの人だ。さう云へば、あの熱でゆく演出、力强いせりふ、民衆の中へとまつしぐらに進みつゝある頭のよさ。それなども、相似た點が多い。

だが、あの深く堀りさげてゆく藝風と、あの聲とは、矢張り舞臺の人であるべきだとおもふ。正直に云ふと、名高いところの名調子も、實は現代的でなくなつてゐる。あのアクセント一つで、人物が、明治時代のものになるうらみがある。けれども、その不滿は持ち乍ら、あのせりふを聞いてゐると、一種の快感に醉はされる。映畫では、だから井上正夫の價値が半減するのだ。それだけの理由でゞも、井上正夫氏は、舞臺を見棄てない方が本當である。

×

明治の時代に、新派が起つて、民衆に迎えられたのは、その「時代」を描いて見せてくれたからである。ところが、時代そのものは進んでも、新派劇は一つところにゐた。昨日の夢に醉つて、明日への歩みを忘れてゐた。そして民衆に置いてけぼりをされたのである。

いや、置いてけぼりをされたと云へば、過去のことになる、現在、新派劇はなほ醉つてゐて、どし〳〵置いてけぼりを食ひつゝあるのだ。

その中で、お世辭でなく、井上正夫氏は、新派を、時代のものにしたいとあせつてゐるのだ。時と俱に進むために、この人だけが汗みづくになつてゐる。それは、たしかに、誰もが認めることだらう。

幸ひなことに、井上正夫氏はよき演出者をもつてゐる。よき演出者は、よき航海長である。で氏は、本當に日本のよき新派俳優は自分より外にないと云ふ自負に立つて、片ツ端から、日本の新らしい戲曲を演じてくれることである。

日本にも、まう、よき戲曲作家と、その見物とは揃つてゐる。氏は、それを確信して、すこし大膽になりすぎるほどやつてくれてよいのである。

さうしたときにこそ、新派劇は、新らしい路に立つて、盛んな歡呼を浴びるだらう。

劇壇漫語

姥谷生

この六號室は僕ひとりの勉强室としたくない。劇壇のレーテストニュースを課題として、諸賢と共に考究すべきものだと思つてゐる。これはたゞ單なる『漫語』でなく僕は意義ある『時評』だと自惚れてゐる。

勿論、僕の言つてゐることに間違があれば遠慮なく叱正を願ひたい。反駁して下さつてもいゝ。そしてお互に鞭韃されたいと思つてゐる。言つたことに責任を持たなければならないのは當然だが、この僕の二頁だけでは社に何等の關係もない一個の劇愛好者の一人として、先づ當事者諸氏の寛容を願ひたいのである。

先月は『炎の空』劇の上演に際して、俳優の僭越から脚本が毀損されることによつて釀出された梅島昇氏と中井泰孝氏との間の醜い抗爭を紹介した。そして菲才を顧みず、それに私見を交へて甲論乙駁をすると共に、ひいて俳優の立場から演伎の獨立性を尊重すべきであると冗漫ながら立證をこゝろみたのであるが、この月は作家と俳優の眞摯な努力と精進によつて完成された立派な演劇が、何故に今度は一般觀衆から歡迎されないのであるか、この劇壇の啓蒙的な現狀を憂慮して、諸彦に熟考を煩はしたいと思ふのである。

井上と平將門

久びさに井上正夫氏が素晴らしいお土産『平將門』をもつて浪花座に來演した。

昨年の秋は角座で藤森成吉氏の『礫茂左衞門』を上演して大好評だつた。あの二幕目かの山上密議の一場面は未だ鮮やかに僕の腦裡にのこつてゐる。僕は昨年度の新劇を觀た中で、あれほど驚嘆にちかい感銘をうけたものはなかつたと思つてゐる。その時も興行成績はあまり良好でなかつたやうに記憶してゐる。

こんどの眞山青果氏作『平將門』四幕は東都の二月劇壇を震駭せしめたものだと言はれてゐる。僕が讀んだ雜誌の劇評の中でも、菊池寛氏は『演劇新潮』三月號の誌上で、正宗白鳥氏は『中央公論』四月號で各れも井上氏の努力と精進を激賞してゐる。『不同調』四月號では同人の木蘇、藤森、尾崎、武川の諸氏が合評をしてゐる。とにかくも『平將門ほど作家と俳優との呼吸がぴつたり合つた芝居を見たことが近頃にない。』と、それから『二度見に行つた。ところが感激は少しも薄れなかつた』さうである。

それほど東都では大好評を博しながらも興行成績が不良だつたのである。特に井上氏は本誌のために一文を寄せられて、新劇に對する自負と使命を說き『東京土產平將門』の自信を述べ、そして完璧にちかい恪好の演劇が、何故大衆に悅ばれなく、觀賞されないのかと慨嘆されてゐる。眞面目な藝術家が立派な仕事をしてゐるのに廣く世間から悅ばれないのは悲しいことである。

おそらく井上氏が平將門のやうに深く懷疑的な心持になつて、行かれるのも無理からぬことであるその不撓の精進と苦衷をお察しするが、僕等はこの不合理を動かすことの出來ない事實として、次のやうなことが痛切に考へさせられるのである。

演劇と觀衆

眞面目な作家と俳優によつて、始めて藝術的に完成された演劇が文壇劇界の知識階級にのみに認められて、どうして一般觀衆に歡迎されないのであらうか、これは作家も俳優もそのプログラムに恐らく豫想されてゐなかつて意外に思はれたに違いない。少なくとも現代の作家で（文學的戲曲で甘んじてゐる作家は別であるが）シエー

グスピアやモリエルのやうに觀衆を豫想せずして戲曲を書かないにちがひない。

凡ゆる條件を具備した『立派な演劇』が何故一般觀衆に悅ばれないのであらう。それは『見て面白くない』のかも知れない。或はその俳優に人氣がないのかも知れないいや世の中が不景氣だからだ。そして觀劇料が高いからだと主張する人もあると思ふが、この不合理な演劇と觀衆とのギャップは、今更のやうにロマン、ロオランの『民衆の藝術を有せんがためには先づ民衆を有せざるべからず』といつた命題にぶつかるのである。

この理由は簡單である。一般觀衆は依然として無自覺に基く低級な演劇に耽溺してゐる劇界の現狀によつて、その動かすことの出來ない事實が、凡てを證明してゐると僕は思ふのである。

思想もない藝術もない『劍劇』などがその前哨にあつて大多數の勢力を占有してゐる。また演劇の敵とも言ひたい我國の映畫界の現在を例證してもいゝ。多くの時代物は劍戟に終始してゐると言つても過言でない。

興行當事者の立場から考へてもスタンダアルのやうに『幸福なる小數』のみに歡迎されて、大劇場は成立して行かない。俳優にしてそれが第一義であつても滿足してゐられるであらうか、こゝに井上氏の懊惱と懷疑があるのでなからうか。

ハミルトンの說くやうに觀衆の心理は特殊である。故に演劇の普遍化はたゞ觀衆の精神的自覺に寄與を要求し見出されない限り、百年河淸に待つとも、遂にその彼岸に達することは出來ないだらう。

徒らに聲を大きくロオランのやうに『民衆は自覺せざるべからず』と叫んで、超然としてゐるより仕方がないのである。

劍劇のゆくへ

えいッ！と怒號一聲、隼のやうに斬下げた竹光の尖端には、侍や捕手の一人や二人か型のやうにふんぞり返つて仆れて行く。……

氣障な思想や哲學を盛つた新劇や面白くもない喜劇に笑はせられるよりも只に狂暴な劍劇が、却つて無邪氣で洒落て面白いかも知れない。現今の觀衆はこの無意味な『氣晴らし』に滿足してゐるやうである。

これが眞の演劇でないことは論を俟たない。そこには藝術のもつ最も尊い純粹觀照や、崇高に對する美感や、悲劇 於ける淨化作用を求めることが出來ない。たゞ劍のみが審判する運命の葛藤があるのみである。

阿修羅王のやうにオメールの神神が劍を揮つて疾走突進する時、觀衆はめざましく感じて痛快を叫ぶのである。

今なほ大衆の無反省な時代だと言へよう。メエテルリンクは近代演劇の認識と表現に就て『實際の舞臺に於いて吾われは破天荒な、狂暴な冒險といふものを殆んど見なくなつた。』ことを否定出來ない事實であると言つてゐるが、悲しい哉、我國には劍劇なるものが流行して、舞臺は血醒 猛勇殘忍で外面的動作の隆盛を來してゐる。

かうした例は外國にもないではない。羅馬人が劇よりもグラヂエタアの鬪伎を好むを咏嘆した話や丁度日本人が土佐犬の角力を好むやうに、沙翁劇場が鬪鷄のために興行が大變な打擊を蒙つたことなどは有名である。

劍劇は社會思想の一面を現はしたものだと說く人がある。民衆の盲目的な衝動性に相呼應して流行したものであると言はれてゐる。

劍劇のゆくへ――その最後の日が何時來るのか僕は知らない。しかし、いつまでも大衆は劍劇や讀物に滿足してゐるとは思はれないやがて彼等も忘れてゐた特權を採り戻すべく、劍が彼等の運命に彼等自身を審判させたやうに、劍劇も彼等によつて、また審判せられる日が來るであらう。

芝居見たまゝ

平將門

素木宗一

井上正夫の平將門

第一幕

頃承平五年三月にてありき。

舞臺は常陸と下總を境なして流るゝ毛野川河原に始る。

「お前たちのやうに、さう大きく摑んだ話はできない。天下の政治よりもおれは現に危急問題に心を痛めてゐるのだ。おれの一生の苦勞はこの毛野川一つにある。」

將門は次弟四郎の將平と面を合しつゝ藤原氏の惡政、將門等には伯父なる常陸源氏の横暴のことどもなど呪詛て、おのれの管領豊田二萬束の衰れに心勞を刻むにありぬ。

「兄者……常陸の野心がしんぢつならば兄者はどうなさるお心でござりまする」

さるにても權門藤原氏の根據は盤石の重きに在りて、諸國莊園より年々歳々積なみせる富は筑波の山の高きに比べくもあらざりしかば、その一門に箭を向けるの愚も辨へける將門。父代より又藤原氏に好誼を寄せて今の大臣忠平公には家隷の禮を執りしかば、將門また父に代りて忠節を誓ふの名符を今もなほ奉る。

「それほど京都を貴く思ふなら、いつそのこと、土地の全部を忠平公に奉つて、大臣家の莊園に改め國司不入の無税地にしたらいゝでせう」

「輕々しく口を利く男だなあ——」

ヂロリ！將門は眸黑く頤痩せる鋭き四郎の面を睨みぬ。

かゝる時、常陸より平眞樹使者として現れ、續いて泥醉しける將門の弟御厨の三郎將頼出づる。眞樹の使節は毛野川の河普請の旨なりしかば、足下に將門は踏躙りて苦めり。

「あの百曲りの河瀬に堅固な石堤を突出したら、この豊田一帶はどうなると思ふのだ——無法だ」

常陸一箇國は斯くして今源氏一族の威勢に照り映ゆる。

「兄、承知して見ろ、豊田の地面は總領でもお前一人の自由にはならないぞ」

酒氣を吐いて三郎は猛りぬ。嚮て時を經ぬ間に伯父なる常陸の大椽平國香來り

て將門と語る。
「兎に角、讓方によくよく話をつめて、お前の豊田分に災害のないやうに頼んでみる、否、話す——たゞお前方も血氣に騒立てないが好いぞ。」

第二幕

さても其後猛狂ひたる將門は戰馬を駈けて常陸に向ひ野本、石田、大串、筑波眞壁の郡を燒拂ひ伯父常陸の國香を誅す常陸の國香は貞盛の父君なり。將門かく爲してその身は那須より歸らず二十日の程經て漸く將門が舘にその姿を現す。折から栗栖院常羽御厨別當多治經明訪れて來る。
「この頃そこの名譽はどうだ。下總百姓一體は其處を蘇へりの救ひ主のやうに言つてゐるぞ」
「また油をかける」
將門顰笑——膝に産後日ならぬ嬰兒東の君との仲に爲したるを搖る。
「しかし止めやうと言つても、弦をはなれた征矢だ、中途で止まるものでない。遣るところまで遣つて見なければならない。こゝで逡巡しては常經を燒亡したのも伯父御を殺したのも、みな無駄ごとになつてしまふ。——けれども、まさかにそこは貞盛を恐れてはゐはすまい」
「打明けるがな……」
將門愚かしく笑みつゝ語る。將門の斯く褒稱さるゝ心はうらはらとなりて實にも息苦しきに在りき。將門の恐るゝ所はその夢中さ——將門自らの知らぬ間に勝ちてもあれば負けても居らるゝ、なほさら生きてもあれば死にもゐる。その吾自らの計ひ知れざる夢中の暴き力を恐れもし悔ひにもひたる將門にてやあらむ。げにすざまじき將門が盲目の揮勇にては非ざるか。今の女房東の君とて、始めは貞盛の元に嫁ぐべき女子なりしものを……
「おれは……おれはあれに戀してゐたのに相違ない。しかしおれは……自分の無骨を知つてゐる、醜さも知つてゐる恥ぢて抑へて自分と闘つてゐた時の苦しみがはるかに永かつたのだ。その苦しみに耐えかねておれは最後に、到頭おれは矢張り自分の支配を忘れる時が來てゐたそして自分に復つた時には、三郎などに妻を盗んだと言はれても奪つたと言はれても、爲方のない方法をもつておれは叔父の手から娘を奪ひ取つてゐたのだ。おれはどうして恁ウ……常に自分を失ふのだ。經明、おれは那須の湯につかつて おれは毎日そればかり考へて居た」
それまでは將門と貞盛の仲に露ほどの怨みとてなかりしを、貞盛には今は亡父の仇、ものゝなべて皆將門が己れの支配を失ひけるたまゆらの間の出來事なれば自らを何として呪詛てやまざるべけん。
「兄者、いつ那須から歸られました」
少時、弟四郎の立ち出づる。
「兄者、貞盛の話を聞かれたか。それにしても兄者、從兄の貞盛はそれほど腑甲斐ない男でござりませうか」
「和睦の一條か。おれにも分らないのだたゞ貞盛は童の時から、控へ目に、内氣な、行きとゞいた……もの柔かな性質だつた。しかしおれ達のやうな我殺な、騒ぎやすい性質ではなかつた。靜かに世間を眺めてゐる若者であつた」

その從兄おもへば伯父を殺めしことはとにかくも將門すゞろ心つぶるゝ心地がする。
「石田へ行つて來る。自身貞盛に會つて詫びる。おれは貞盛に打たれなければならない、然うだ、打たれに行くのだ……打たれてそして赦されなければならないおれは卑怯だつた……打たれて赦されるんだ」

同　第　二　場

石田の館平國香邸宅の燒跡にして夕ぐれ近し。燒爛れし焦土を踏みて貞盛悄然。
「父君もやはり世に弱いお人であつた。やはり人と爭ふことができなかつた。常陸源氏の勢力に壓倒せられて、吾がわれを立てることができなかつた。殺した者ばかり怨むべきでない……』
折から貞盛の叔父なる常陸國眞壁郡羽鳥住人平良正入り來れり。
「靜かにせよ。將門が門前に來てゐるのだ。ちやうど同時に上總の良兼のとのも到着したのだ」
「小次郎の無法者が來てゐるさうだの」
上總介平良兼も入り來る。
「しかし夜陰に馬を驅つて、彼がわたくしを尋ねるには何事かあると思ひます。彼の堅固な甲のなかに優しい心を抱いてゐる青年でござりました。わたくしに害を加へるなどとは何うしても考へられません」
館の表には將門首垂れてあり、三郎の松明に呼び迎へられぬ。
「兄者、怪我があつたら何うする。そして貞盛は何んと言つた」
「太郎は留守だ……會へなかつた」
「うむ……」
「さ、何を考へてゐる。みな貴所の身を氣遣うて駈付けて來たのだ」
「やはり來るのでなかつた……貞盛は貞盛はおれを避けた……」

第　三　幕

その後二年は經ぬ。
常陸上總勢、上總介良兼、左馬允貞盛等の手勢は三度の吊ひ合戰を行ひて茲に將門の豊田を燒拂ふに及べり。さしもの將門も此の度は散々の敗戰とはなり終んぬ。將門この舞臺に病床より遁れ來りし取亂せる姿にて襁に乳兒を包み抱き泣き叫ぶ羽生の女乳母達を引擦りつゝ現れる。
「との、それでは……斯うまで敵に侮られながら、禦矢の用意を成さらぬのでございますか」
東の君は口惜しさにか、あらずか、打ち顫ひつゝ叫びけり。
「誰と戰つてゐるのだ」
將門急しく唾を飲みて脚氣患ふわが足下を睨みつけ、
「おぬしの父だ、おれの舅だぞ。戰ふことは何でもない、いつでも戰つて見せる。けれどもおれは、昨夜と今朝、二度もつゞいて明神の祠に不吉を見てゐる。凡夫のおれにはそれがわからないのだ。それでもおぬしは、おれに出て戰へと云ふのか」
御厨別當多治經明大童の鎧姿にて駈け來る。平眞樹も郎黨二三に圍はれて不安の瞳を澱ませて連れられ來りぬ。
「さあ立て三郎。一緒に遁げやう。兎に

角一先づこゝを落ちてをくのだ。あとはおれに考へがある。

然れども三郎將頼鎧下の直垂などを燒きて無言に兄を睨むばかりなり。

「三郎。おれはこの頃さう思ふ……兄弟と云ふものはつく〴〵敵だと思ふ。お前は右と云つて、左と云つて、そして、おれがうろ〳〵して苦しむのを見たいのだ」

三郎むくと起上つてその兄の目を再び睨み着けし時には顏面宛然土の如し。

「お前は何人にも褒められたいのだ。くだらない欲情がある。それが性懦者の證據だ。百姓作人のこの慘狀を見ても、顏へ立つことのできない臆病者なのだ。お前は一族を滅すやつだ。おれ達はお前のために滅されるのだ』

かくて双方より取組み遂には爭ひて地上に互ひに轉がり合ふ。烈しき組合ひ何時果つるとも覺えず凄しき限りなり。

第四幕

將門軍裝にて假營に立戻る。めでたき凱陣のその日なり。

「あゝ、ほつと呼吸をついた。この疲勞もみな三郎だ。三郎の奴に口を利かせまい〳〵と思つて、おれは夢中に働いたのだ。今になると騙されたやうな氣もする。」

「さう云へば此方にも羨しがらせる用意があるのだ。恐らくその分捕品とてこちらの賭物には及ぶまいぞ。兄者、驚くなよ。姉の君が常陸の敵から歸つて來られた。」

東の君の恙なき顏打眺めて將門のおもへらく、わが妻を無事に送り還せしは貞盛の情と知りて太息すること暫し。折ふし郎黨の慌しく駈出でて注進するに、貞盛今宵常陸路に顯はれて信濃路かけて京都へのぼると在り——

「然うかなあ——貞盛はあの碓氷の峠を越え……雪の千曲河原を……換馬もなく木曾路にかゝるのだなあ……おれはわからなくなつて來た。おれは誰かに欺かれてかうまで身を苦しめて離間するのだ。誰がおれを動かしおれを疲れさせるのだ——あゝ、おれは寧ろ妻子が貞盛に殺されてゐれば好かつたとさへ思ふやうな氣がする……おれの方が貞盛に逐はれてゐるやうな氣がする……」

「兄者、用意が出來たそうだ。さ、打立たう」

三郎傍にて勇む。

將門弟に追軍を誘はれて恰も小兒の如き涙聲ともなりて貞盛を追ふを好まず。

「おりやこの上お前の自由になりたくない、厭だ、厭だ」

「兄者どうした、取らなければ取らるるぞ。さ、立て、立て」

「小次郎、若し貞盛を追擊しなければ、伴類百姓の謀叛が見えてゐるのだ。さ、小次郎」

三郎經明の二人に左右より促されて力なく力なく將門やうやく起上る。その姿晉運命の絲に繰らるゝが如し。

「三郎、眞樹を連れて來い。軍門の血祭にするのだ」

將門剛然として起つ、喊聲の中に將門の頰のみ寂しく沈思する。

——幕——

井上正夫に對する
印象・感想・希望

同不序順

井上正夫氏の近影

「影片會社」の

川路柳虹

はじめてその舞臺に感心したのはもう十五六年も前の事ですが有樂座でショオの「馬盜人」をやつた時のことでした。鷹揚で細かな鋭いところのある藝風を感心しました。その後いろ〳〵の新劇に於ても見ましたが彼の神經の鋭さをもつ俳優である一面に大きくこなしてゆく力をえがたいものに感じてゐます。但し最近に少しも見ませんから、どう藝風が變つたかは存じません。

大久保作次郎

『あゝ、みなさん、一つ大川平藏について氣のついたことを教へてくれませんか』と、井上正夫は一座を見廻はすのでした。

『先生、わたしら何もわからしまへんけれど、大川校長が、ま新しい靴をはいてやはりましたが、少し世帶やつれたとこが見えんように思ひますが、どうどつしやろ』と、やゝ年輩の妓の一人はいふのです。

『うん……』

しばらく一方を見つめてた井上正夫は、靜に

『靴が新しい、靴がね……新しい……靴がね』

と、なほもそれをくりかへしてゐるのです。恰も「酒中日記」の大川校長をそのままを木屋町の夏の床に見るのでした。幾年か前、京は南座で「酒中日記」が果ての宴席での印象です。

野溝七生

蒲田撮影所の脚本室でだかお見かけしたことがあつたような氣がします。勿論ちつとも直接私が個人的に存じ上げてゐるわけではありませんが、その時の印象と云へば、ちつとも俳優らしくない、素朴で云はゞ學究と云つた感じがたぶんに受けとれたのです。映畫の同氏はあの眼眸の中には、ドストイエフスキーの人物やまた獨逸の一部の人たち——例へばエミール・ヤニングスのような——の持つてゐる一種宗教的な「善良」の光りがあると思ひました。どのような世智のあともそ

の輝きを侵害しなかつたといふような、これは大切なことだと思いました。私の見ました俳優の中では、あのような眼眸を持つてゐる人を日本では存じません。最近の同氏の舞臺は何も拜見してゐませんので、ちやんとしたお返事のできないことを殘念に存じます。

井上康文

井上正夫氏の藝術はもう拾何年も見つゞけてきました。そしていつもかなり強い感激をもちます。「平將門」はすばらしいものでした。一般の評判も高かつたやうですが、いまの劇壇であの位熱をもつた芝居を見られるのはこの一座の人々のみです。正夫氏がこうした新しい創作劇に手をつけて益々新劇壇に覺醒の烽火をあげることを望んでゐます。「平將門」はもう一度見たい劇ですし、最も新しい思想をもつたものとして推賞したいものです

津村京村

井上正夫君の事に就いては最近「週刊朝日」にも書いたばかりですが、俳優としての同君が今日まで如何に藝術的惱みを續けて來たかは、既に世間周知の事實であります。それだけに同君の藝が日と共に深くなつて行きつゝある事は今更繰り返へす必要も無いでせう。唯その爲に一般民衆の中へ平俗に迎へ入れられない惧れがありさうです。そしてそこに一つの大きな問題が横つて居るでせう。

南部修太郎

明治年代の新派劇の頃から舞臺の同君を知る事は既に年久しいが、最近銀座裏の球突場で紹介されて初めて口を利き合ひ同君百五十點、自分百點で手合せをやり一回一回の無勝負となつた。百五十點は聊か無理と見たはひが目か？突き振に少し氣取りの氣はあるが、荒いと見せてなかなか細心な球である。再戰を約して別れたが、今度は甲をぬがせる積りである。

川村花菱

井上君と私とは俳優劇作家と云ふ關係よりも只の友人としてのしたしみの方が深く、私はかなりにあの人の爲に幸あれと祈る一人です。長く井上正夫論を云はしてもらへば相當に自信のあることも申上げられませうが、こゝでは只、彼は本當にさつぱりした人で、いつも若者のやうで恐らく一生あゝ云ふ感じで通す人だと思ひます。その點にあの人を論ずるいろいろのものがありませう。

尾崎士郎

小生は平將門を見たのが最初ですが、すくなくともこの芝居は小生を驚喜させた井上正夫についても、唯新派の一凡優に過ぎないと信じてゐたが、「將門」以來小生はこの俳優を尊敬してゐる。元來、演劇に對してあまり興味を持つてゐないので、進んで芝居を見るといふことはなかつたが、今後井上の所演だけは見たいと思つてゐる。

福士幸次郎

劇界の事は田舍にゐては何も申上げる資格はありませぬ。しかし平將門をやる井上正夫氏の依然たる元氣には大に意を強うします。眞山氏の雄篇平將門は東北人

にとつては特別の興味が感ぜられるものです。

額田六福

藝術的には滿點と評され乍ら、興行的には五十點にも及ばなかつた「將門」を再び引提げて大阪へ下つた君の勇氣と仕打側の元氣とには敬服する。希くば今後もこの蠻勇をつゞけて欲しい。しかしだ。腹がへつては戰が出來ぬ。毎回損をしてはいくら元氣でも何でもさう〳〵つゞけられるものではない。さりとてたゞ金儲本位の芝居もやれまい。そこでこのヂレンマからのがれるには自然に藝術味もたつぷりあり、そして興行價値も十分と云ふ脚本を求めて上演する事だ。これは井上君に望むと共に、芝居全體に對する私の最後の希望でもあるのだ。

戸川貞雄

先頃東京で平將門上演の節招待を受けましたが差支へあつて見ることが出來ませんでした。評判は大したもので、暫らく友人間でも井上の將門が論じ合はれぬた程です。長いこと同優の演技に接しないが、忘れ難いものに「酒中日記」があります。新派は滅びても井上正夫は亡びない。この事實は凡そ藝術にたづさはるものに取つてのよい示唆でありませう。

十菱愛彦

井上正夫氏は嘗て私の學んでゐた中學（京都）の教師だつたと云ふやうな話しをきいてゐますが、眞僞の程は保證されません。若しさうだつたとすれば彼が教育界から劇壇に身を投げ入れた抱負の程も窺はれます。この紙幅では千分の一も思ふことは云はれませんが、「平將門」は彼に相應しい戲曲だと思考します。彼に對する私の希望は從來と少しも變つてはゐません。

原久一郎

△新派出の人の中では、死んだ藤澤氏と共に余の最も好きな人。
△勉强家。
△今後も延びるだらうと思ふ。
△ただセリフをあまり氣にして貰ひたく無い事。（余はあの白が獨自でいゝと思ふ）映畫から脱却して專心舞臺の方だけ努力して欲しいこと。

今野賢三

私は、數年前、東京淺草、みくに座ではじめて井上を知つて以來、井上に對してその將來を注目して來た一人であります。『平將門』を見て感じたことは、なるほど新時代劇の開拓には、井上自身の藝術を最も發揚し得る境地だといふことです。しかし、私の井上にのぞんでやまないところは、よしんば現在のブルジョア觀客に歡迎されなくとも、一般民衆に眞實に觸れ、一般民衆を社會的に眼覺めさせるつまり民衆の中へはいり込んでほしい。たとへばあの レ・ミゼラブルの上演のやうに社會劇へ自己をなげ込んで行つてほしいことです。井上氏よ！未來の民衆に生きよ！

風早次郎

この題目をみて、ふと思ひ出した事ですが、井上正夫氏はどうも役者としてみる

ことよりむしろ社會革命家と觀る方がより適切なのではないかとも思ひます。こんな風に井上氏を考へることは、非常に失禮な極みですが、また一面から考へると、そうした氏の一面をそのまゝ演劇の上に生かすと云ふことは、氏のためにも、また吾が劇壇のためにも有意義なことではないかと考へます。私はまたそう云ふ意味で氏の將來を非常に期待してゐます

高須芳次郎

久しく劇界に遠ざかつてをりまして敬愛する井上君の藝も長い間拜見致しませぬ。が、井上君は以前から好きです。高田實君在世の時から度々井上君を見てその熱心、その努力、その緊張、その融通の利く藝風に一再ならず感心しました。が、正直に云ふと高田實ほどに輪郭が大きくないのは遺憾であります。井上君よ高田實以上の偉大を完成して下さい。而して史劇方面にも精進して下さい。

高原慶三

人の一生は重荷を負ふて坂を上るが如し（〃照宮御神訓）

井上正夫といふ人はピツタリこれにあてはまります。膽汁質でどこやら粘り氣と執拗さと熱と力に溢れながら陰性で押し通すところがそうです。エチエガライの「ドフアンの息子」を日本物でやつた昔を思ふと新劇團の陳勝吳廣だゝ思ひます。ショウの「馬どろぼう」もその時分に既に先鞭をつけた人です。山本有三氏がまだ文壇に現はれぬ前作者にもつてた人です蒲田の大先生になつたり洋行までしながら、その割合に世間的にも物質的にも酬はれなかつたのがこの人の二三年前のことでした。この頃は不思議に井上の地盤なるものもすつかり出來上つて、初めて坂の上にたどりついた觀があるやうです

豐岡佐一郎

性格俳優としての井上正夫！

彼の描く性格は常に明確にして甚だ印象の鮮かなものがある。又彼は寫實派の大家で、劇的最高調の一瞬を最も鮮かに強調し得る俳優である。彼に近代のアブノーマルな性格を描寫させて見たいと思ふ

福田正夫

最近新劇をあまり覗きませんが、井上氏には新作の大物を上演する熱と力があることをうれしく思ひます。願はくはその上に感覺としての新しさを、脚本からも演出からも見せて頂きたく思ひます。

西東八十八

俳優の仕事が藝であるならば井上正夫は正に其例外の人である。彼が俳優として常に示すものは情熱の力である。そしてまた、彼が俳優として常に恐らく最前線に立つてゐられるのも其情熱の強さである。だから、彼の科白は、あらゆる場合に朗らかで爽やかだ。彼の藝術には五月の朝を思はせ、エメラルドの深味を思はせる美しい切味がある。されば私は彼に其脚本選定について最もあざやかな最も澄んだ作を選べといひたい。勿論、彼の情熱が屢々、蕭々たる春雨を其舞臺に降らせ、涙に露へる微笑の脚光を浴びて、いさゝか世の劇評家達に奇怪な口實を與

へることも確かである。

長田幹彦

井上君の今度の『平將門』を見れば、何も彼も分る。千萬言の批評よりも彼の驚く可き演出が彼の本質を最も的確に最も雄辯に物語つてゐる。將來のことはもつと先へ行つて論じていゝ。先づ彼の現在をよく見てやることだ。此頃の觀客は餘りに性急で、慌たゞし過ぎる。

山田清三郎

井上氏に依つて、大阪で上演されたといふ、畏友前田河廣一郎の「陸のつきる處」を未だ東京の舞臺で見ないのを殘念に思つてゐる。井上氏に對する印象は、秋月桂太郎や藤澤淺二郎が生きてゐる頃、京都大阪などの劇場で見た記憶を僅かにもつてゐるだけであるが、それからもう十年も經つ最近の井上氏を、いつかゆつくり見直してみたいと思つてゐる。

島中雄作

井上正夫の「將門」は私も見ましたが、近來あれほど見物席から舞臺に引きつけられて見た芝居はありませんでした。人間が動いてゐたせいでせう。井上正夫の藝は別に上手だとも思ひませんが、魂を仕いかす事において力と熱とそして眞摯とを籠めた藝を見せてくれる人は他にありません。もつと大きい舞臺でもつと多く觀客を吸收しうる筈だと思ふのですが、その割でないのはどういふものでせう。機會が惠まれないせいでせうか。

佐藤緑葉

井上氏の演劇で私の見た物は、今より十年餘りも前の有樂座で興行した「馬盜人」一回だけです。其時の印象は實に何とも云へず立派なもので、それより前及び後に見た幾多の新劇中、それに匹敵し得る効果を擧げ得たものは幾らもないと思ひます。彼の本領が何處にあるかは、彼を知ることの極めて少い私が批議すべき限ではないが、彼が近來ます〳〵衰へざる元氣で新作の上演に努力してゐることをきいては、何とも云へず快い感を起さずにはゐられません。

江口渙

井上正夫君の價値はその自然な點、わざとらしくない點にあると思ひます。彼の藝は外へ外へとひろがる藝ではなく内へ内へとめり込むやうに深められて行く藝です。その點で私は井上君に多大な敬意を表してゐます。

藤田草之助

滅び行く新派軍の中に、唯一人ふみとゞまつて孤軍奮闘する井上正夫の姿は實に雄々しき若武者ぶりともいふべきです。彼が新しき立場を固めんとして、新しき創作を大いに上演するのは結構なれど、脚本の選擇に時折注意が足りないかと思はれます。何の面白味もない新作物（おまけに興行價値さへ無いもの）を演じて無駄な精力の浪費をするのは甚だつまらない事です。

佐藤惣之助

左團次にしろ井上にしろ、その科白の惡癖が又深い特質となつて、性格を形づくつてゐるのは面白いと存じます。

あの訛りも今では特異のものとして、いかなる役をも彼一流の消化力でやつてのけるのには感心します。「不粋の成功」ともいゝませうか、只どこかに不變の田舍癖があるのが遺憾です。それが又うれしいと云へばそれまでゞすが……。

邦枝完二

どこまでも「力」に依つて成長して來た藝だ。この「力」が尊い。井上君には、ほんたうに良い舞臺監督を付けたいものだ。そして、出來得べくんば、活動寫眞から足を洗つて貰ひたいと思ふ。

白石實三

戰ひから歸つた將門がごろりと床に寢たり、あくびをしたり、テクストにない實演方面で生の人間としての將門を活かして見せた井上氏の努力を嬉しく思つてゐます。同時に將門は、全關東人の古來からのアイドルですから ideal の方面も見たいと思ひましたが、何にしても大きな努力、實のある芝居を見たやうな氣がしました。氏の力で、テクストがぐつと活きてきてゐるのを感じました。

林久男

井上正夫の藝風を考へると、私は、何とはなしに、いつも獨逸の人氣役者アレキサンダー・モイツシイのことを聯想するのであります。第一、この兩者のマスクのタイプが頗る相似てゐます。それよりも大事なことは兩者の藝風の類似です。その扮する人物の性根をよく飲みこんで、その原作に於ける性格を仕いかすことに對する努力も技巧の程度も相似てゐます又、それ〴〵の人物に扮し乍らも、而も一は飽くまでもモイツシイであり、一は飽く迄も井上を脱しないといふ點に於ても、亦妙に兩者相通じてゐます。そこにこの兩者の長所も、短所もあると思ひます。又藝に熱心の結果、やゝもすれば、芝居を自分一人で背負つてしまはうとするやうな點の見える所も似てゐます。只モイツシイの藝には吾々の鼻につく一種のマンネリズムがついて廻ります。どうか井上にはさういふ缺點の目立たないことを祈つて居ります。

小寺融吉

個人井上正夫より、井上正夫一座に就て考へてみたいと思ひます。この一座は東京の興行成績はこの數年來あまり良くなきやう思ひます、其原因は、我々第三者から見ると出し物が、あゝでもない、かうでもないの末に、とう〳〵こんなことになつたと感ぜられるのが毎度で、それが根本的缺陷でせう、今出し物の上手なのは歌舞伎座及び吉及右衛門一座のみで他は皆まづい、まづい中にも井上一座がまづい、出し物さへ良ければ、この一座はもつと劇壇に活躍するであらうにと惜しまれます。

高木善治

(一)井上正夫のあの荒削な藝はかなり臭い芝居をしてゐるのに、妙に臭味がなく引きつけられます。とにかく近頃の井上の奮闘振りは大したものです。この人の芝居が大阪で餘り受けないのはどうしたわけでせう。

(二)井上正夫と云ふ人にはやつぱり色氣ぬきのものが結構です。「平門將」なんか讀んだ時からこの人には良いだらうと思ひました。眞居靑果さんの書くものなんか良いですね。「富岡先生」なんかも澤田と違つた味を出してくれるでせうね。

高安六郎

近頃はあまり見ないので何とも申上げかねますが一種のカラクターを有つ、うまい役者で、未來のある人だと思ひます。

中西伊之助

平將門を見ました。何よりもあの眞摯と熱心には敬意を表します。そして不斷の努力をも。益々新しい脚本で創意を出してもらいたい。

武川重太郎

井上と云ふ人の熱誠を第一に買ひたいと思ふ。舞臺では少しばかり神經質になりすぎるところがありはしないか。もつと肚を据ゑて演つてもいゝと思ふ。

樋口二葉

私は氏に對して個人よりも、映畫の人、舞臺の人としての氏を知る機會が多いから從つて印象としては、それから受けるもので第一氏は情熱的である。第二、性格俳優としては現在の新派劇界に他の追從を許さぬ。第三演出する映畫及演劇が殆んど統一され他の優の如く八百屋式でない。然して氏が今後演出し得るものも恐らくはこの境域を脫し得ないものであらうと思われる尙ほ氏は映畫の人でなく舞臺の人であつてほしい。そして出來得可くは一幕乃至三幕程度のもので飜譯ものにも是非手をつけてもらひたいと思ふ。

畑耕一

もう卅年にちかい昔のことですが、私は廣島で伊東文夫一座の「オセロ」(江見水蔭氏の飜案だつたと思ふ)を見物しました。その時イヤゴオをやつた役者が馬鹿にうまかつたので、芝居好きの母に、あれはなんといふ役者かときいたら、井上正夫といふのだと敎へられました。どんな風の芝居だつたか、どこの座だつたかみんな忘れてゐるのに、イヤゴオのうまかつたことだけは今でも記憶してゐますあの頃から地藝のあつた人です。

尾瀨敬止

井上氏の藝術に接する機會の少いのを遺憾に思ひます。たゞ同氏が眞の意味における新派壇のために、ます〳〵健鬪される事を祈つておきます。

水守龜之助

井上正夫君は立派な藝術家である。近代的精神を十分に表現出來る鋭い深い神經と熱情をもつてゐる。同君の優れた俳優であることを今更吹聽しなければならぬことは何と情けない劇壇であらう?近時彼の日常生活が實に簡素を極めてゐると聞き、その人格にも敬意を表してゐる。御地に於ける「平將門」の成功を遙かに祈りたい。

藤井紫影

只一度見ただけですから彼此申されませぬが、澤田程芝居をせず情熱で押通すのが此人の特色かと思ははれます、口跡の

わるいのは氣の毒ですが、是もなんとか工夫して修行をつんでもらひたいものです。

長谷川伸

澤田正二郎氏と井上正夫氏とは特筆すべき歌舞伎劇以外の大なる陣營である、二人ともに熱血がみなぎつてゐる、それは溢れる程强い力でみるものに迫る。今日の井上は新派劇でない、超新派劇である事は澤田が超劍劇である事と同一だ、二人の率ゐるものが（しかも中井哲氏と小堀誠氏とが援けてゐる對照も一奇だ）新派劇といふべく劍劇といふべく高く優超し、努めたる精進があり、不斷に良心の練磨がありして今の如くであるのはクドクいふまでもあるまい。

で、井上に欲しいものがたつた一つある外でもない舞臺以外の公人井上正夫としての才略これである、澤田はそれを持つてゐる。もし井上に適當なさういふ方面の補佐者が現れ、そしてそれをよく容れるのであつたら、それこそ刮目すべき風雲が起るだらう。

小酒井不木

私は井上正夫氏の最近の舞臺を見て居りませぬから、此答の出來ぬのを悲しみます。

坪内士行

不幸にして二三度しか見ませんが、井上正夫と云ふ人の力はすばらしいものだと思ひます。賣り物になる樣な俳優二三を左右に從へて活躍してくれたらどんなに嬉しい事でせう。

辻潤

芝居の方は門外漢でとんとわかりません正夫丈にはたつた一度御目にかゝつたが話はしなかつた、石井漢の歡迎會が牛込の「プランタン」であつた時のこと、その時一緒に並んでシヤシンをうつした筈。そうですね丈はどこからみても役者とは見えない、どことなく政治家と云ふタイプに見える、僕はその時どう云ふもんか星亨を聯想したのですよ、星亨は僕の好きな人だつたんですよ、「大軍を相手にして。さて僕は始めて戰鬪の痛快を味はひ且つ滿足するのだ」これが井上正夫君なのだ。

小林愛雄

彼の技藝はあくまでも純眞である。そこに彼の生命がある。部分的の技巧を表現するよりは、全体としての性格を表現するに長じた彼は、扮すべき人物の性根をしつかと摑んでゐる。そこに彼の生命の長い所以がある。新派が凋落しても彼が常に氣を吐いてゐるのはこの故である。私は彼の自重を望んでやまない。

伊吹武彦

一、印象　氏の藝は沸騰點の鉛といふ感じです。思ひ切つて澱み、且つ燃え、中に氣味惡くギラギラしたものを感じます。ユウゴオの常套「崇高」と「怪異」を打つて一丸とした「憶無情」のジヤン役者たる所以と思ひます。

二、感想　氏の二重の陣痛を尊く思ひます。一は、今日の新劇全般が持つ不安の當然な分前、一は、氏自身の狹く深い藝を貫かうとする惱みです。神を索めて狹きに在る柱頭道士に敬意を表します。

三、希望　氏への希望よりは寧ろ、氏を生かすべき脚本家と脚本の不斷の出現を希望する外ありません。氏のやうな俳優は、作家がひたすらその藝風に暗示されて創作していゝ、しかし罕なるべき異例の一人と思ひます。氏を生かすものは「叩頭」と「組見」ではなく、新劇壇の爲に氏を衛り愛する作家の名譽ある服從と考へます。

大森眠歩

井上正夫氏に就いては妙な感じが私にある。

それは實に簡單な、そして有り得べからざる而も事實なのだからおかしい。『月日が、年一年と進むごとに愈々若くなる役者』若返るといふ事がある。けれども十年前の井上氏より、今日の氏の方が猶且つ若い！

こんな不思議な事實があり得るだらうかところが、私の頭の中に住んでゐる井上氏は、こんな風に生きてゐる。

鈴木春浦

本名と藝名とを一にしてゐる我が井上正夫君は、どこまでも井上正夫君であつて生涯換ることなし、謂はば年々蛇が人知れず皮から脱して生長して位を澤沼と比しきで他の同人と異るところあり。井上正夫君は蛇体でない。併し君が新派から脱出して奮起以て我が劇壇に猛進し、新作家新々作家の脚本を選んで、よく之れを採用し、時代に順應し、時に將亦卓越もして舞臺に立つを憚らざりき。

而之彼は同人を顧應せざるも、決して先輩を下げすまず、前得の批評に對して盲目的に服從せず、後輩に善く教へ、或は事の實際を示して同人輩に暗示する事ありたり。井上正夫君は明治大正を苦勞に越えて昭和に足を入る。又新しき時代に向つて焦慮することも少からざるべし以來いよ〳〵以て虛心平坦おもむろに新劇界を開拓せんとしてゐる井上正夫君の態度は我國舞臺藝術家として君をおいて他に求むべからず、今度大阪に出でんとす、ます〳〵以て新劇界の本領に單刀直入せんことを望むのである。

相田隆太郎

田舍に引込みがちなので今だにその藝風に接する機會を持ちません。唯一度かなり前に映畫で「レミゼラブル」のジヤン・バルジヤンに扮した井上を見て、この人は藝術家である（劇壇には稀れなる）と思ひました。映畫などで見た位でかう云ふのは輕卒かもしれませんが、實際にさう感じたのです。

井上の重厚なジヤン・バルジヤンと高尾光子の可憐なコゼツトの姿が眼の底に殘つてゐます。

藤井眞澄

彼れの男性美を好む。彼れは藝術家としても又人間としても、男らしい男である

「平將門」のやうな俗受けのしない難物を演出するといふ事など、いかにも彼れの男々しさを表はしてゐるではないか！

井汲清治

新派俳優中にありて、唯一の藝術的良心の所有者。評判がよくて、そのくせ入りのない興業をやる人。自畫像を書いて、鏡臺の脇に置いてゐる人。大東鬼城を側に置いて行ける人。

小島德彌

私は井上正夫氏の舞臺を、近頃觀たことがありません。芝居は、これでもちよいちよい觀るのですが、誰れが何の座にかかつてゐるから觀やうといふのでなく、たゞもう行き當りばつたりなんですから尤も、映畫の上で何でしたか題は忘れましたが一二度觀ました。井上正夫も老けたなとは思ひながら、やつぱりいゝところがあるなと思つた事を憶へてゐます。希望を述べる程の親しみはないが、好きな優です。

石割松太郎

今の俳優中、もつと廣く、現今の舞臺に立つ人で井上正夫ほど眞摯な藝を見せてゐる人は、又聽かしてゐる人は又とない唯の「舞臺熱心」といふに止らない、眞に眞劍なその態度は敬服の外はない。この意味において井上の將來は底知れぬものがある。大ていの人達の將來は豫斷をはばからないが、井上の將來は俄に斷ずべからざるものがある。が「細心」の皆のみによらず、たまには「放膽」の崖頭にも立つてもいゝと思ふ。

野島辰次

井上正夫が今、どの位人氣があるのか、それを私は知りません。が、人氣があらうがあるまいが、井上正夫は斯界での第一人者であると思つてゐます。隨分前から私は井上の芝居を見てゐますが、不斷の精進を忘らない彼の態度は敬服に値するものでせう。

二月の本郷座で觀た「平將門」など井上でなければあすこまでは演ぜられないのではないかと思ひました。脚本もいゝが、しかしあの熱演、力演には感服しました。彼の今後の進路も本領もかうした方面にあるのではないでせうか。

土師清二

内へ〳〵籠つてゆく藝と熱と。これは私達を敬服させます。が憂鬱にもします。で、私の希望は一度あの熱を爆發させて欲しいと思ひます。思ふ存分に暴れる氣持で何か演つて見せて欲しいと思ひます簡單で意を盡しませんが。

若山牧水

殘念ながら小生には御返事認むる資格がございませぬ。

安間確郎

好きだ。井上正夫氏は好きだ。だから、其の行くべき途を考へて貰ひたい。『大尉の娘』などをやつてゐたんでは、それこそ、伊井、小織　…と仝じ荒野に屍を曝さなければならなくなる。新劇へ歸つた最近の態度はいゝ。

映畫も惡いと言ふのではないが、名調子を以て天下一である氏として、口をきか

ない映畫よりも……

だが、新劇と言つても、築地小劇場、新劇協會及び、澤田正二郎氏のある事を顧慮しなければならない。當然、大衆の中へ行くべき井上氏にとつて、前二者は、假りに慮ひの外に置くとしても、澤田氏は敵として中々に大きい。仝じやうな物を扱つては不利ではあるまいか。(澤田氏も、もう劍劇はやめるだらうから)その昔『檢察官』『馬泥坊』をやつたと聞いて居る。先年の『地藏敎由來』の成功を思ふにつけても、悲劇より、寧ろ、喜劇を目指すべき位地に居る氏ではなからうか。實際、そして、また、現在、大衆に向つて眞の喜劇を與へ得る人は、氏を措いて他にないやうだ。——大衆への喜劇が餘りなさ過ぎる——

白岡道太郎

新しい物に對する此人の勇氣と、それを活かしうる技倆には、推稱すべきものがあると思ひます。

たゞより積極的な忠言者が、指導者があつて、此人の持味を完全に活かしたならば、もつと人氣の出る人でせう。

伊藤悌二

彼れの藝術は人間苦そのものゝ表現であります、舞臺に於ける彼れの姿はいたいたしい程内的に苦惱を體驗した者の態度であります、その惱しさ幽鬱さは昔の聖者や苦行者の面影を存して居ります彼れの將來に於ける劇壇の使命は斯うした意味からみてもありきたりの月並な宗敎劇でなくモット純眞なモット藝術化した宗敎的な脚本を演出する事にあるではないでせうか?

なんと云つても彼れの傑作は「大尉の娘」の大尉と支那化した「ラ・ミザラブル」の主人公で御座いませう、私は彼の映畫にあらはれた大楠公と左團次の實演のそれとも批較する程野暮ではありませんが氣品がなく餘りにちいさくみられました、私の彼れが藝術に希望したき事はゆとりとおちつきとおほまかと品位で御座います。

仲木貞一

鈍重と同時に深みを感じます。而して彼に當はまる脚本も重厚な物になつてはならず、其處に薄つぺらな通俗味を缺く故興行的に損がある。今の生活に勞れた人人は、頻りと明るい輕い物を需めるが故に。

尙この人は非常に疑ひ迷ふ癖がある。餘り考へ過ぎる爲に飛んだ損を見る。猪突的な事を少し試みるといゝ。時勢が時勢だから、それにはよき指導者か參謀が入用だ。

藤森成吉

藝熱心な、新派に於ける一人者と考へます。

希望は、意識に於ける一層の新化と、人としての明快と。

村島歸之

藝術的良心といふものが、脚氣患者の向ずねほどに痲痺してゐる現今の新派畑に井上氏を持つ事は、せめてもの慰めです今から十四五年も前、新劇勃興の先驅を

した彼を見てゐる私達としては、なほ一層同氏に對して懷しみを感じてゐます。

川端康成

一、印象。一流の人物。
一、希望。「平將門」を上演したやうな演劇的勇氣。
映畫の方にも働いて貰ひたいこと。

伊藤松雄

劇壇生活から去つて四年になる私にとつて舞臺で見た井上君の印象を語るにはあまりに彼に對して氣の毒だらう。感想や希望と云ふ點から云はうならつまり僕が見てゐる最近の井上君のユキカタにこそ眞の感想も希望も生るべきだらう。

井手蕉雨

井上正夫氏の技倆は既に定評がありますから今更めかしく兎や角申迄もございますまい。あの創造的な科白いつも結構に思つて居ります。それに扮裝の巧みなことはいはゆる新派中同氏と喜多村綠郎を双璧と存じます。拙作の脚本を井上氏によつて上演したことは震災前本鄕座で喜劇「曇後晴」唯一回丈けですから作者俳優の關係から得た感想といつたやうなものは十分に味ひもせず、單に見物人としての立場から常にうまい人だと思ふのみです。行詰つた新劇界に新生面を打開するやうに同氏の努力を切に希望します。

沖野岩三郎

私はいつも此人の事を氣にかけてゐます大楠公には一寸閉口しましたが、此人の將來はまだ大いになすべき事を殘してゐます。

齊藤龍太郎

私は以前から井上正夫に特殊な厚意をもつてはゐなかつた。勿論一部の人々が云ふやうに、彼の藝術を讃仰する氣もなかつた。が、先頃本鄕座で「平將門」を見るに及んで、初めて彼の藝の並々でないことを知つたのである。私は近來あんな芝居を見たことがない。恐らく今後もあれほど感動的なものは、さう滅多に見られまいと思つてゐる。のみならず、井上としても、あれだけ、今後さう滅多に演れないだらうと思ふ。恐らくは彼の生涯を通じて「將門」は彼の傑作の一つとして殘るにちがひなからう。

家門櫻谿

大阪に於ける最近の井上正夫の舞臺で、はつきり私の腦裡に殘つてゐるのは「磔茂左衛門」である。あの力强い大きな熱をこめた藝術美、人物化の深刻味、何たる妙趣ぞと言ふのほかない。華やかな線に距離のある暗い影の添う役を、井上は俳優生活の命とせよ。

木蘇毅

何よりも彼は劇壇中で一番純粹な藝術家だと思ふ。自分の藝術に即して孤獨な道に勇往邁進する彼に自分は限りなき尊敬を感ずる。希望としては、どんなに苦しからうと飽く迄もそうした道を守つて進んでもらひたく思ふ。間もなく新時代の民衆は彼を本當に理解して心から後援することを忘れないであらうことを私は堅く信ずるものだ。

酒井眞人

受驗生時代私は井上正夫の連鎖劇を見ることを唯一つの樂しみにして日夜猛烈に勉强したものです。一高に直ぐ入れたのも是偏へに井上のお蔭だと思つて手紙を出さうかと考へたことがあつた位でしたあの一流の、首を堅に振つて聲を顫はせるところが馬鹿に氣に入つたのです。それでたしか松風村雨の正月狂言から半年續けて本郷座に通つたものです。私は井上はやつぱり舞臺に立たせた方がいゝと思ひます。映畫の井上はいつも緊張した表情ばかりをしてゐるのでユトリといふものがないのです。

大西利夫

井上正夫の藝は極めて不自然である。惡くいへば隨分クサイ藝である。それが彼の、謂ゆる新派離れのした所で今日にして尙彼に未來をのこした所以でもある。

彼の研究すべきは彼のもち前のクサミである。もつと遠慮しないで大膽にクサクなつてほしい、それでほんとうにつき進んでしまへば新らしい立派なものが完成するであらうことを信じて疑はない。惜むらくは彼は、どうかするとそのクサミに蓋をしやうとするやうに見える。それは決して彼の未來を生かすものではないであらう。

富田泰彦

井上君は新派劇の最後の頁を飾る人であり、また新派から新劇へのエポックの藝術の持主として、更に太い一線を新劇の上にも劃しつゝある點に生命が未だ〳〵長い人だと思ひます。

國枝史郎

ホフマンシュタールの『痴人の死』バナード・ショーの『馬泥棒』ゴーゴルの『檢察官』外人素人（アマチュア）の演つた『ベルス』等、井上正夫氏は二十年前から、かういふものを演戲した。みんな私は見た筈である。この他、所謂新派劇方面での、井上氏の演戲も隨分見た。その結果私に感じられたことは、大方の世間の人達の、感じてゐるものと同じであつた。(一)演戲に新鮮味のあるといふこと(二)人物の性格をよく摑み、それを上手に現はすといふこと(三)徹頭徹尾面目だといふこと(四)よく研究を行き渡らせるといふこと(五)始終勉强をしてゐるといふこと(六)新手を出さうと工夫してゐるといふと(七)藝風は大まかで大きいといふこより、堅實でさうして緻密だといふこと(八)全体が如何にもスガ〳〵しいといふこと(九)周圍の忠告をよく入れるといふこと(十)決して傲慢不遜で無いといふこと(十一)作者側の注文をよく入れるといふこと。

長谷川伸氏の『世に出ぬ豪傑』へ、早く眼を付けて演じたことなど、好感を以て見ることが出來る。

あせつてゐるやうには見えるけれど、その實ゆつくりおちついてゐる。他の新派の俳優より時代を見る眼が明かである。萬事のやり口が賣名的で無いのに、世間の人達がよく認め、尊敬と人氣とを博してゐる。劇界での紳士である。本流の巨頭といふよりも、寧ろ傍流の巨壁であるこれが或る時代には損をしてゐたが、今日では反對に酬ひられてゐる。生命の長い俳優といへやう。

浪花座五月興行上演脚本

死の一歩前

四幕

中井泰孝

登場人物

源三郎　井上正夫
長男多吉　藤野秀夫
次男留三　山田隆彌
宿屋の番頭周吾　小堀誠
直次郎　梅田重朝
多吉の妻お里　石河薫
お里の母　米津左喜子
その他客ABC、近所の女、老人等。

第一　理店髪の店先

理髪店内、中央より稍上手に正面して入口、粹な暖簾下る。入口より下手正面して鏡二枚。入口より上手が居間、火鉢、茶棚など置く、種々のポスターなど下つて居る。その居間の正面が肘掛窓、明け放してある。そこから見える軒には造花が挿してあり、旗竿なども見える。奉燈の赤い提灯が二つ下つて居る。向ふ側の家の國旗や提灯も見えてゐる。この家の奥は直ちに道路になつてゐる。

幕開く

午後八時頃、極めて遠く樂隊の音、お里は居間の方に火鉢で煮物をしながら、裁縫して居る。多吉(額の半面に痣のある男)は火鉢の側で夕刊を讀んでゐる。留三は手を洗つてゐる。居間の隅の方には近所の若者ABが將棋を指して居る。一番下手の椅子にも若者Cが腰を下して耳を掻いたりニキビを絞り出したりしながら。

C　新町の青年團の行列が一番氣が利いて居るつて話だ。

留三　四十七士の勢揃ひだつてね。

C　うん、それを見たいと思つてゐるんだがね。

留三　此の前を通らないかな。

多吉　新町だつたら此處を通らないよ。

お里　今朝から幾組通つたらう、小學校の旗行列だけで

も三組か四組通つてますね。

多吉　うん、鐘紡の女工が一組通つたな。

C　何か假裝でもしたのかい。

多吉　いや、只の提灯行列だ。

留三　それから瓦斯會社の假裝行列が通つたぢやないかあゝ、あれは僕も途中で見て來た、隨分ふるつてるね、烏天狗の行列なんざア變つた思ひ附きだよ。

樂隊の音次第に近づいて來る。

お里　また來ましたよ。

お里立つて窓から戸外を覗く。

留三　假裝行列かい？。

お里　また小學校の提灯行列らしいわ。

C　ぢやアつまらねえや。

樂隊を先途に小學校の提灯行列が通る。

A　手には？……。

B　銀桂……。

A　銀桂と……銀に桂か……えゝ、一か八だ、突つ込んでやれッ。

B　突つ込んでやれと……一寸傷いな……。

聯人風の男喉簾の間から顔を出して。

職人　大分間があるかい。

多吉　誠に御氣の毒樣ですが、今日はこれでお仕舞にしたいと思つて居る所なんですがね。

職人　そうかね、いや私も今日は何處へ行つたつて駄目だらうと思つて諦めては居たんだが、門前を通つたつたら店が開いて居たもんだからね。

多吉　そうですか、誠に相濟みません、いゝえ、家も今日は朝から休む筈だつたんですが、昨日後廻しに願つて置いて、遂々昨晩出來なかつた御近所の方だけを、なにしてるつて譯なんで御ざんすよ。

職人　そうか、ぢやアまた明日來らア……。

多吉　相濟みません。

お里　どうもお氣の毒樣で御座いました。

職人風の男去る。留三の客出來上つて去る。

留三は暫く將棋を覗いてやがて二階へ上る。

B　はッ〳〵〳〵、遂々三番立て續けに叩き附けてやつた譯だな、どうしても此の次からは角を落すんだね。

A　（憤怒を押えて）今の將棋は決して負けの將棋ぢやなかつたよ、あの桂馬を捨てたのが惡かつたんだ。

B　はッ〳〵〳〵、あの桂馬など問題でないよ、矢張り君が弱いから負けたのさ、僕が強いから勝つたんだよ。

A　君はいつでも後で人を嘲弄する樣な事を云ふから不可ないよ、勝負は時の運だよ。

B　何も嘲弄しやしないよ、當然の事を云つたんだよ。

C　そうら初つた君達の將棋、は吃度お終に喧嘩にな

A るんだからうるさいよ。
（Cに）ね、堀田君、一寸來て見て御覽よ、此う云ふ場合の桂馬だがね。
C いやだよ、俺は喧嘩の仲間入りは眞平だよ。
A （Bに）君は、人を馬鹿にする癖があるから不可ないよ。もう君とは指さないよ。
B 誰も指して下さいと云いやしないよ。
多吉 誰でも勝負事に負けるとひどく憤怒くものと見えるね。
A 僕は決して負けたのが口惜くつて云ふのぢやないよ、高さやんは卑怯だからいやなんだよ。
B どうして僕が卑怯だつて云ふんだい。
A 卑怯ぢやないか、あんな所に歩を打つて待駒をするなんて。
B そりや君、仕方がないよ、君の思惑通りにばかりは行かないよ。
A あの歩さへなかつたら、僕の方が慥かに勝つてたんだ。
B はツははは、僕の方はあんな手數な事をしなくつても勝つには勝つたんだけどね。
A あれさへなければ僕の勝さ。
B あんなものは僕は問題にしちや居ないよ、つまり僕はあの銀を取らせたつて勝つて見せるよ。
A 大きな事を云ふぜ。
B そんならもう一番行かうか。
C おい止せよ、また終ひに喧嘩になるんだから。
A よし行う。
人々笑ふ、AB再び指し初める。
多吉 お里。
お里 はい。
多吉 留三は二階かい。
お里 そうでせうよ。
多吉 また寢てるんだらう、お父さんの歸つて來ない内に起して置けよ。
お里 好いぢやありませんか、どうせもうお仕事も無いんだもの。
多吉 でも、またお父さんが怒るからさ。
お里上手へ入る、直次郎老人入つて來る。
多吉 おや、此りやお珍らしい、よく出て入らしやいましたね、さ、どうぞ。
直次郎 どうも久濶く御無沙汰しました。（中へ入つて）いつも御壯健で……。
多吉 あなたも御達者で……。
直次郎 遂思ひながらな、御無沙汰ばかりして。
多吉 私こそ……、さ、どうぞお掛け下さい。
直次郎 有り難う（四邊を見て）結構なお店ですな、好いお

店だ。

多吉　いや、もうほんの間に合せで、さ、おかけ下さい。

（お里出て來る）

多吉　あお里、お前初めてだつたな、郡山の家の隣の小父さんだよ……。

お里　まあ、左樣ですか、どうぞお掛け下さいまし、初めまして。

直次郎　多吉さんのお神さんかな。

多吉　え……。

直次郎　そうかな、お初にお目にかゝります、私はな、郡山のお家の近所者で、直次郎つて者で御座ります、どうぞよろしく。

お里　どうぞ宜敷く御願致します。

直次郎　そうか、まあ兎に角結構なお店だ、好いお店だ兼ね〳〵大そう繁昌して居なさるつて事は家の方でも大した評判ですよ。

多吉　そうですか、お耻しいこつてすね。

直次郎　本當に結構なお店だ、立派なお店だ、で近頃久濶ぐお父さんも郡山の方へ歸つて見えないもんだで、どうして居なさるかと居つてな、お父さんはお達者かな。

多吉　え、大丈夫です、一寸今電燈會社まで行つて居ますが、もう戻つて來るでせうどうぞ御ゆつくり。

直次郎　もう源さんとは二年越會はないんだ。

多吉　そうですか、親父もどんなに嬉ぶでせう、ぢや濟みません、仕事をしながらお話しますよ。

直次郎　さ、どうぞ〳〵、だが此れだけ大きなお店では

多吉　お前さんお一人ぢや仲々大抵ぢやないね。

多吉　今弟が手傳つて居てくれますからね。

直次郎　弟つて云ふと、留さんかね。

多吉　そうです。

直次郎　もふそんな年になつたかな。

多吉　今年檢査ですよ。

直次郎　ほう、そうかな、成程、年を數へて見れば慥かに二十一だ、何でも日露戰爭の明くる年の凱旋祝の日に生れたのを覺へて居るよ、若かい人達のづんづん育つて行くのにばかり吃驚して、手前が同じ樣に老耄て行くに氣がつかねへで居るんだから老人なんて始末におえねえもんだよ、はッ〳〵。でも小父さんはお若かいよ。

直次郎　なアに駄目ですよ、いくら氣持だけは强い氣で居ても身體がきゝませんや、身體がね、私はお前さんのお父さんより一つ上で今年六十一ですよ。でもお達者で結構ですよ。

多吉　（ぶら〳〵將棋の側へ來て）まだかい。

C　もう少しだよ。

B　もう好い加減にして歸らうよ。

B　もう少しだお待ちよ、一緒に歸へるから。
C　また喧嘩の捲添を食ふのは眞平だよ、左樣なら。
多吉　左樣なら。
お里　また入らつしやい。（C去る）
お里　番茶で御座いますが……。
直次郎　有り難う、いや、源さんも結構な御身分になんなすつた、結構なお店だ。
多吉　今日入らしたんですか。
直次郎　いや、昨日來ましたよ、今度市制五十年紀念祝賀會で以て大變賑かだから出て來たらどうだつて娘ん所から云つて來たでね、孫共の採領と云ふ役でやつて來ましたよ。
多吉　そうですか、娘さんてお峰さんですね。
直次郎　そうですよ。
多吉　お峯さんにも長い事お目にかゝらないがお達者なんでせう。
直次郎　達者は達者ですが、何しろ貧乏者の子澤山でな中々金は殘らないが、子供だけはよく產みますよハツ〳〵。
多吉　結構ですよ。
直次郎　家のお峰は慥か多吉さんとは澤山達はなかつた筈だね。
多吉　私の方が一つ年上なんですよ、小供の時分にまゝ事をすると、いつも私が婿さんでお峰さんが嫁さんでさア、よく遊んだもんだ。
直次郎　もうあんた三人の母親だよ、好いばゞアでさアね。
多吉　お峰さんがばゞアなら、私は好いぢゞいですよ。
直次郎　お前さんはいつ見ても若いよ、まだ三十には大分間があるんだらう。
多吉　戯談でせう、三十の上を一つ出てるんですよ。
直次郎　すると家のお峰は恰度な譯かな。
多吉　そうですよ。
直次郎　驚いたね、あれもいつの間にか三十になつたのかな。尤も子供の年など數へて居る隙がないよ、手前の年すらまごついて居る始末だでな、ハツハツ〳〵。

源三郎入つて來る。

お里　お歸んなさい。
源三郎　ひどく珍らしい人が來て居たな。
直次郎　久濶く會はないから、どうして居なさるかと思つてな、出た序に寄つて見たよ。
源三郎　よく出て來なすつたね。
直次郎　孫のお招伴でね、どうも御無沙汰しました、いつも御壯健で。
源次郎　遂思ひながら御無沙汰ばかりしまして、いつもお變りなくつて……さ、此方へ上つて下さい。
直次郎　いや、却つて此の方が好い。

源三郎　久しぶりだ、ゆつくり話そう、まあお上り。
直次郎　そうしても居られないんだ、此れから歸つて孫のお供をしなくつちやならないんだから、然し賑やかなこつちやありませんか。
源三郎　いやもう、本通などはまるで歩くも退くも出來ない人出だ。（お里に）お前達も早く仕舞つて、ちつと出て見て來るが好い。
お里　え、後に行つて見て來ませう。
源三郎　いや、ちつとも飲めないんだ……うむ、サイダーが好いだらう。
お里奥へ去る。
源三郎　（電球を見せて）な多吉。
多吉　え。
源三郎　今度は兩方とも五十燭にして來たよ。
多吉　そうかね、却つてその方が結局經濟かも知れないね。
源三郎　俺もそう思つたからね、まあ一度試に使つて見るさ、都合惡るければまた取り替へれば同じ事だからな。
多吉　あ。
直次郎　源さん、羨しいよ、實際お前さんは幸福な人だよ、どうだい此の立派な店は、結構だね、家の方でも皆評判してますよ、大した繁昌だつてね。
源三郎　お蔭様でね、近頃大分お客も來てくれる樣になりましたよ。
直次郎　もうお前さんも樂隱居だ、此んな結構な店は出來るし、好い嫁さんは來るし、それに留さんも、もう一人前になつて居ると云ふ事だから安心なもんだ、此の上の望みは早く孫の出來る事だけだね。
源三郎　まだ〳〵安心と云ふ所へは行きませんよ、私ア恁うして何もせずにぶら〳〵して居るし、留の奴は（思ひ出して四邊を見る）一人前になつたと云つても、此れも年だけの事で、仕事の方はまだ〳〵雛子ですよ、だから、何も彼多吉と嫁と二人ぎりで背負つて居る譯なんですよ、だがまあ、此の二人が恁うして一生懸命働いてくれる、追々には何とかなるだらうと思つて居るんだがね。
直次郎　結構だね。
源三郎　留はどうした、また何處かへ出て行つたのか。
多吉　何處へも出ないよ、二階へでも上つてるかな。
源三郎　また寢て居るんだらう……どうも留三の奴が少し怠惰者でね、困つて居ます。
直次郎　親や兄弟の脛を嚙つて居る間は皆そうだよ、今に心が出て來りア直ぐ治るアね。
源三郎　多吉や嫁が、私の前をかばう樣にして可愛がつてゐるものだから、それを好い事にして、どこま

でもの、さばつてね……。

お里サイダーを持つて來る。

源三郎　お前さんは呑まない人だから、此んな物でも上つて下さいよ。

直次郎　いや、どうぞ何も構はないで下さい、只もうお前さんの顏だけ見て歸るつもりで來たんだから。

お里　折角お出下さいましたのに何のお愛想も御座いませんで……。

直次郎　いゝえのう、御忙しい所を飛んだ御邪魔をしてしまいました。

源三郎　お里、留三を起して來てくれ、また屹度寢て居るんだから。

お里　でも、もう仕事も無いんですから好いでせう。

源三郎　いや、打捨つて置くと、いくらでも自怠落になるから起して來てくれ。

お里去る。

直次郎　正直の頭に神宿るとはよく云つたもんだ、好い嫁さんぢやないかね。

源三郎　まあ家の寶と云つたら、あの嫁ですよ、家は御覽の通りの貧乏世帶で、おまけに多吉が此の通り不具者同樣の男だから、あたり前の嫁は貰へないものと諦めて居た所へ、幸ひあれが來てくれてね、よく働いてくれますよ、第一氣立が極く素直でね

直次郎　結構だね、本當にお前さんの身分が羨しいよ。

八時の時計が鳴る。

直次郎、おや、八時だな、飛んでもないお邪魔をしてしまつた。

多吉　どうです、今夜は家へ宿つて入らつしやいませんか。

直次郎　有り難う、實は今夜孫共の採領をして見物に出かけなきやならないんですよ、でね源さん、一つお願があるんだがね。

源三郎　はア。

直次郎　家の二番目の倅を今度、分家と云ふ樣な譯で家持に出して見たんだがね、所で分けてやつた田地と云ふのが本の僅かなもので、奴にしても此れぢやあんまり物足りないから、餘他から少し畑でも借りて何ぞやつて見たいと云ふんでね、そこでお前さんとこの、あの稻荷下の畑を貸して貰はれるかどうだか、お父さん奈良へ出たら源さん所へ寄つて聞いて來てくれと恁う云ふ譯なんだが、どうだらう。

源三郎　そうさな、あれは今どんな風になつてるかな、あんたも知つてる通り家の納稅から小作一切の事は、竹屋敷の孫四郎に賴んであるんで、何ならあそこで聞いて見て下さい。孫四郎の方さへ承知なれば私の方はどつちでも好だいんから。

直次郎　そうかな、ぢやア孫四郎さんの方へ一度當つて

見やう、若し向ふで好いと云つたら一つ頼んますよ。

源三郎　承知しました。

直次郎　いや、こりや飛んだ御厄介かけました、どうも御馳走様で御座いました。

源三郎　折角來ておくんなすつたのに何の事もなくつて

直次郎　多吉さん、一度郡山の家へも來たらどうです。

多吉　お母の墓參りかた〳〵……。家内を連れて行つて御近所へもお引合せして置きたいと思つて居た所ですから近いうちに參りますよ。

直次郎　是非な、待つて居ますよ、では御免下さい。

多吉　どうも失禮しました、お峰さんにも宜敷く。

直次郎　左樣なら。

源三郎、直次郎を送つて戸外に去る。多吉は白布を折り畳みながら、ふと二階に注意して、上手へ行こうとする。お里出て來る。

お里　あら、あの方お歸りになつたの。

多吉　歸つたよ。

お里　まあ、一寸呼んでくれるとよかつたのに……。

多吉　今まで二階に居たのかい。

お里　え。

多吉　何して居たの?。

お里　留さんと話して居たのよ。

多吉　（氣を取り直した樣に）そうか。

お里、その鏡の前を片づけてくれないか。

お里　はい、本當に濟みませんでしたね。

留三出て來る。

多吉　あ、留三、お前そのバリカンを皆んなよく拭いて抽出に入れて置いてくれないか。

留三　あ……。（バリカンの手入を始める）

源三郎入つて來る、戸口の所で

源三郎　もう扉を閉めても好いんだらう。

多吉　え、もう好ございます。

源三郎　（暖簾を取りはづして潜戸の附いた扉を閉ぢる）早くしまつて、皆んなで公會堂の方へでも行つて見て來たらどうだ。

多吉　え。

お里　ねお前さん、連れて行つて頂戴よ、そして歸りにお神明樣へお詣りして來る樣に……。

多吉　うむ、だけど今日は朝から頭が重くつてな、どうも風を引いたらしいんだ。

源三郎　なに風を引いた?そいつは不可ないな、大變惡い風が流行つてるそうだから氣をつけないと不可ないよ。

多吉　お前一人で行つて來い。

お里　私一人で?……、つまらないわ……。

留三　姉さん、僕連れて行つて上げやうか。

お里　え、連れて行つて下さいな。

多吉　そうだ、お前も行くんだつたら、連れて行つてやつておくれな。

留三　あ……。

多吉　ぢや何だ、ちつとでも早い方が好いから、後は俺が片づけるから、早く仕度しろよ。

此の間源三郎は火鉢の側で夕刊を讀んで居る。留三は上手へ入る。お里は替替を初める同時に多吉も片づけ終つて手など洗ふ。

源三郎お　公會堂の方へ行くんだつたらな、先づ此れから新町へ出て、角の飾物を見て、それから臺所町を下つて何へ行くんだ、霞町の踊、それからまた本通へ出て公會堂へ行くんだな。

お里　そうですか。

源三郎　そして歸へりにお神明樣へお詣りして來ると恰度好い道順だよ。

お里　そうですね。

源三郎　（若干の金を投り出して）さ、お小使だ。

お里　いゝえ持つてますよ。

源三郎　まあ持つてお出。

お里　どうも有り難う御座います。

源三郎　どら、私はお風呂へ行つて來やうかな。

お里　行つてらつしやい。

源三郎　歸へりに玉子を買つて來やう、そして玉子酒でもしてそれを呑んで早く寢て見るが好い。

多吉　あ……。

お里は帶を結びながら石鹸と手拭を源三郎に出して渡す。源三郎出て去る。

多吉　（白い仕事服を脱ぎながら）角の木藥屋まで行つてくるかな。

お里　私行つて來るわ。

多吉　好いよ、風邪藥を一服買つて來て呑んで見やう。

お里　ぢや、私着物着てしまつたら行つて來ますよ。

多吉　好いんだよ（行きかける）

お里　ねお前さん。

多吉　（潜りかけた顏を向けて）うむ？。

お里　お前さん、あんまり苦しい樣だつたら、私出るのを止しませうか……。

多吉　（搖き消す樣に）そんな事しなくても好いよ、なアに本の頭が重いだけなんだ、仕度が出來たら早く行つて、お出よ。

出て去る。間もなく留三出て來る（久留米絣の上着羽織金枠眼鏡をかけて居る鳥打帽）お里もすつかり仕度が出來て、二人出かけやうとする、近所の宿屋の番頭周吾、ふところ手で入つて來る、心安だてに椅子に腰をおろす。

周吾　いよう、青年紳士、何處へ行くんだい。

留三　公會堂の方へ行つて見て來るんだよ。

周吾　兄さんは？
お里　お藥買ひに行きました。
周吾　何だ、兄さんは行かないのかい。
お里　風邪氣なんですつて。
周吾　ふむ……お父さんは？
お里　お風呂へ。
周吾　ぢや二人ぎりかい。
お里　え。
周吾　おい留さん、好いかい、兄貴の嫁さんなど引つ張り廻して。
留三　また初まつた。
お里　好いぢやありませんか、姉弟で歩いたつて。
周吾　お里さん、あんな正直な旦那樣をあんまり燒かせると爲にならないぜ、だけど何だな恁うして見ると、此の方が餘程似合ひの夫婦だな、はッ〳〵はッ。
お里　いやな人……、ぢやね周さん、家の人が直ぐ戻つて來ますからお留守居して居て頂戴ね。
周吾　あ、だけどお里さん
お里　え、。
周吾　痣面の旦那樣と歩くよりは、矢張り若い奇麗な男と歩く方が心持が好いだらう。
お里　知らないよ、ぢや賴みますよ。

留三とお里出て去る、周吾は抽出から櫛を下して鏡に向つて撫でつけ居る。多吉入つて來る。

周吾　風邪を引いたんだつてね。
多吉　どうも頭が重くつてね。
周吾　それや不可ないね。
周吾はまた椅子に腰を下す。多吉は火鉢の側へ來て坐り、藥を呑む用意する。
多吉　今日は隙かい。
周吾　あ、まあ隙なんだね、どうして遊んで居る所を見ると……今日の樣なお祝日でも仕事をしたのかい
多吉　忌だつて云へない人達に來られてね、半日だけのつもりが、遂々一日働いてしまつた。
周吾　まあ忙しいのは、どつち道結構だよ、お父さんはお風呂だつてね。
多吉　え。
周吾　今お里さんと留さんが出て行つたね。
多吉　公會堂の方まで行つて見て來るつて出て行つたよ
周吾　ひどく睦しさうにして出て行つたぜ。
多吉　うむ二人はよ程うまが合ふと見えて、ひどく仲が好いんだよ。
周吾　あゝして手を取り合つて睦しそうに歩いて行く所を見ると、まるで似合の夫婦だね。
多吉　はッ〳〵〳〵。

周吾　あんな所を見ても、多吉さんはちつとも燒けないかい。

多吉　戲談云つちや不可ないよ、姉弟ぢやないか。

周吾　そうかなア……だけど多吉さん、氣を附けないと不可ないぜ。

多吉　何を……？。

周吾　知らぬは亭主ばかりなりと云つてね、はつと氣が附いた時には、もうすつかり弟に女房を寢取られて居たなんざ、あんまり名譽な話でもないからねそうなつたら、弟に讓り渡して俺は山へ引込むよはッ〳〵〳〵。

周吾　いや、戲談事ぢやないぜ、近所の噂は兎も角として、俺の目から見ても、どうも臭い、どころぢやない、全く怪しいぜ、今僕がひよつこり入つて來ると二人が此處んとこで以て抱き附いたりしてふざけて居たぜ。

多吉　（暗い顏になる、それを無理に押し隱す樣に）また持ち前の病氣が出たね、お前さんと云ふ人は、そんな人のいやがるやうな戲談を云はないと、本當に好い人だがなア。

周吾　僕の云ふ事にだつて戲談もある代り本當の事もあるよ、此れだけは本當の事だぜ、今お里さんが出て行く時だつてこんな事云つてたぜ、見憎くい男と歩いて居るよりは、矢張り若い奇麗な男と歩いて居る方が心持が好いつて、はッ〳〵〳〵、兄貴すつかりまる潰れだね。

多吉　そんな事云つて居たかい。

周吾立ち上つて再び鏡を覗き乍ら

周吾　精々氣を附けるんだね、若い奇麗な女房を持つと此れだから困るよ。はッ〳〵〳〵、俺もこんな苦勞を早くくて見たいもんだ、さ、此れから一寸本通りの方でも覗いて來るかな、まあお大事に……。

多吉　左樣なら。

周吾去る。多吉据え附けられた樣に考へ込む。

多吉　まさか、まさかそんな事はない。

再び考に沈む、暫くして彼は立つて上手に入る。お里の針箱と小さな手箱を持ち出して來て、四邊に注意しながら調べる。嫌て立つて壁間にかけてある着物の袂を調べてハンケチや紙屑など取り出す。次第に彼の氣持は慌つて來る。表へ出やうとする。出會頭に源三郎入つて來る。

源三郎　何處へ行くんだ。

云ひながら上へ上る、四邊の散亂してゐるのを不審さうに見る。

多吉　お里を迎へに行つて來るんだ。

源三郎　お里を……？……今行つたばかりぢやないか、まだ好いよ、留三も一緒に行つてるんだ心配ないよ、卵を買つて來た、玉子酒でもして飲まう。

行きかゝる、源三郎を呼び止める樣に

多吉　ね、お父さん。
源三郎　うむ？……。
多吉　私の居ない時に、お里と留三はどんな風にして居ますかね。
源三郎　どんな風つて？……。
多吉　二人で二階へでも上り込んで居るやうな時がありませんか。
源三郎　そんな事は決してないよ、お前また今夜に限つて何だつてそんな事を云ふんだ。
多吉　今夜鶴屋の周さんに妙な事を云はれたんだよ。
源三郎　また彼奴め、いつもの悪い癖を出してつまらねェ戯談を云ひやがつたんだな、お前もまた何だつてあんな奴の云ふ事を本氣にして居るんだ、彼奴はさう云ふ戯談を云ふ奴だつて事をお前だつてよく知つて居るぢやないか。
多吉　いや周さんが云つた事ばかりぢやないんだ、段々考へて見ると思ひ當る事がいくらもあるんだ。俺アこんな不具同様な身體で嫁を貰ふなんて、間違つて居たんだな、お父さん。
源三郎　お前、本氣でそんな事云つてるのか。
多吉つか〳〵と鏡の前に立つて自分の痣の顏をつくづくと見入る、源三郎はその樣子を注視する。
遠くに樂隊の音。　——幕——

第二　理髮店の奥室

舞臺あまり大きくない部屋、正面下手に店への出入り、開け放した障子、暖簾下がる、そこから店の一部が見える、その側に階段の一部現はれてゐる、正面上手にも襖の出入口がある、上手側面は障子、日光がギラ〳〵と庭木の影をうつしてゐる、下手側面は押入、箪笥、佛壇、鏡臺、小箪笥その他卷かない障子紙や仕かけてある裁縫道具など置いてある。
時＝前場から約一ケ月を經過してゐる午后。——幕明く——
奥の方をラウ屋が通つてゐる。源三郎一人考へに沈んでゐる。奥の方に人聲
蔭の聲　誰も居ませんか。
源三郎　はい……
蔭の聲　一つやつて貰いたいもんだがね。
源三郎　誠にお氣の毒樣ですが、生憎くと只今伜が留守でございますので……。
蔭の聲　さう、ぢやまた來やう。
源三郎　どうも相濟みません。
源三郎、再び元の處へ來て考へに沈む。留三出て來る。
源三郎　なんだ、お前家にゐたのか。
留三　……。
源三郎　お前も留守だと思つてお客を斷つて仕舞つたんだよ。
留三、表の方へ出て行かうとする。
源三郎　お前何處かへ出て行くのか。

留　三　家に居てもつまらない。
源三郎　一寸話がある、此處へ座れ。
留　三　（溢々遠くの方へ座る）
源三郎　お前は、近頃の家の店をどう考へて居るんだ。
留　三　別にどうも考へてやしない、困つたと思つてゐるだけだ。
源三郎　困つたと思つたら、何故働かないのだ。
留　三　そりやお父さん無理だよ、こんな大きな店を俺一人でちよく〳〵働いたつてどうにもならないぢやないか。
源三郎　お前はこの店が惜しいと思はないか。
留　三　そりや惜しいと思いますよ。
源三郎　ひと頃の家の店と來たら、お前達が飯の食ふ隙もない程繁昌して居たぢやないか、それがこの頃の有様はどうだ、一日〳〵と客足が減つてさびれて來るばかりだ、此の分で行つたら近いうちに潰れてしまふかも知れないぞ。
留　三　だつてそれは何も俺のせいぢやないよ、それを云ふんだつたら兄さんに云つた方がいゝよ、此の店は兎に角兄さんの手一つで潰そうと立てやうと勝手なんだもの、それに此の頃兄さんはどんな心持ちで居るんだか知らないけれども、あゝして毎日毎日家を明けちやぶら〳〵遊んでばかり居るんだらう、そうして歸つて來りあゝニガ虫を噛みつぶした様な顏をして俺になんざア言葉一つ掛けてくれやしない、いくら一生懸命働いて居たつて御苦勞だと一言云はれた例がないんだ、俺ア何もそんなにまでされて手傳ひたくはありませんよ。
源三郎　そりやお前の間違つた考へだよ、兄さんは病氣の體ぢやないか、この頃の兄さんの様子を見ろよ日に〳〵やつれて行くぢやないか。
留　三　何の病氣だか知らないが、病氣なら病氣でもいい、そんなら何にも俺に出て行けがしに厄介者扱ひにしなくつてもいゝと云ふんだ。
源三郎　それはお前のひがみよ、それもこれも病氣がさせるんだと思つたらお前にだつて血を分けた、たつた一人の兄貴ぢやないか勘忍出來ない筈はあるまい、兄さんがさうするなら俺もかうするぢやア滅茶苦茶と云ふもんだ、兄さんが働けなかつたら俺が代つて二人分働かうつて氣になつてくれるのが本當ぢやないか、な留三、お父さんの身にもなつて呉れ、天にも地にもたつた二人しかない子供が目の前でそうして噛み合つて居るのを見て居ると、俺はもう六十と云ふ體を抱いてどうしていゝか判らなくなつてしまふんだ、な留三、働いて店を盛り返へしてくれ、そして此の俺に、俺の伜は

働き者だと田舎へ歸つて自慢をさせてくれ、な留……。

留三　……。

源三郎はそつと泪を拭ふ。間。留三は靜かに立つて靜かに去る。源三郎は後見送つて沈思、軈て障子紙を靜かに卷き初める。お里鍋に入れた糊を持つて入つて來る。

お里　お父さん、出來ました。

源三郎　そうか、そこへ置いてくれ、さて二階から先きに張らうかな。

お里　そうですね、その方がよどざんすね。

源三郎は紙と糊を持つて階段を上つて去る

お里は裁縫にかゝる、留三靜かに入つて來る

留三　あゝつまらないなア。

お里　どうして家の中がこんなになつちまつたんだらう

留三　兄さんは、全體何處へ行つてゐるんだらう。

お里　何處へ行つてゐるんだか、聞いたつてちつとも教へてくれないんだもの、本當に困つちまうわ。

留三　姉さんにも矢つ張りそんな風なの……。

お里　え、病氣のせいだらうとは思つて居るけど……でも此頃はまるつきり私に何にも云つて呉れないんだもの……。

留三　僕はもう何處かへ行つてしまいたい……。

お里の側に横に寢る

留三　俺はもう此んな家に居るのがいやになつた。

お里　留さんにも飛んだ苦勞をかけるわね。

多吉入つて來る。前場とは見違へる程悄衰して居る、彼は暫らく立つて二人を見詰めて居る。

お里　あ、お歸んなさい。

留三も慌てゝ起きる、お里はマントを取ろうとする。多吉は自分でかける。

お里　お醫者へ行つて來たんですか。

多吉　……。

お里　御飯はまだでせう。

多吉　……。

廊下へ出て投げる樣に腰を下ろす。

留三　兄さん、何處へ行つて來たの。……

多吉　……。

留三　返辭位ひしてくれたつていゝぢやないか。

多吉　何處へ行つて來やうと、俺の勝手ぢやないか。

留三　兄さん、今日は歸つて來たら、すつかり聞かして貰はうと思つて居たんだ、どうして兄さんは此頃俺にそんなにつけんどんな風をするんだい、何にか俺に氣に喰はない事でもあるのかい。

多吉　（無言、頭を抱えてゐる）

留三　俺なんさア、どつち道厄介な者だから、どんなにされたつて構はないが、兄さんがそんなに遊んでばかり居たら、店はどうなるんだ、店は……。

多吉　どうでもなるやうになればいゝんだ。
留三　そうか、兄さんがさう云ふつもりなら何も俺達は餘計な心配はしなくても好いんだ、お父さんから餘計な小言を聞かなくつてもいゝんだ。
多吉　店なんか、さつさと潰れてしまつた方が好いんだ
留三　そうか、ぢや俺も今日から仕事は止さう。
多吉　ふん、お前はよく働くよ、店をほつたらかして、此んな所にばかり引込んで居てな、大そうよく働いてくれるよ、俺なんざア早く死んでしまつた方が、この店は立派に立つて行くだらうよ、どこかそこら早く死ね〳〵つて云つてらア。
留三　(泣き聲になつて)兄さん、それほど俺が憎くなつたのか。
多吉　……。
留三　それほど邪魔だつたら、兄さんだつて男だもの、男らしく出て行けと云つたらどうだ。
多吉　誰が邪魔だと云つた。
留三　邪魔にしてゐるから、そんな妙な事ばかり云ふんぢやないか。
多吉　ふん、しら〳〵しいにも程があらア……。
留三　まあ厄介者などはどうなつてもいゝさ、だけどたつた一人しかない親だけは眞當に面倒見ておくれよ、
多吉　何だと。
留三　ふん、親も厄介だといふのか。
多吉　うぬ、どこまで俺を馬鹿にしやがるんだ。
　火鉢を掴んで飛びかゝる
お里　お前さん何をするんです、留さん早く逃げて下さい、早く〳〵。
　お里は多吉を押す、倒れる、留三は危く逃げ去る。
　お里、多吉の側へかけ寄る。
お里　お前さん、落着いて下さい、ねお前さん。
多吉　(全く狂暴な態度になつて)何故留を逃がした、あれをぶたせたくねえのか、それほどあの留が可愛いのか、手前達はぐるになつて俺を馬鹿にしやがるんだ、畜生、手前達は俺が死ねばいゝと思つてるんだらう。
お里　お前さん。
多吉　何だその眼つきは、泣き眞似をするな、そら涙流すな、畜生、犬犬ふんこんな汚ない……汚ない面の男よりは、若い奇麗な男の方がいゝだらうよ。
お里　えッ……お前さん、お前さんは私が留さんとどうかして居るとでも思つて居るのかい。
　多吉はいきなりお里の頬を撲る
多吉　こん畜生、どこまでしら〳〵しいんだ。
お里　え、撲つてお前さんの氣持ちが晴れるんだつたらいくら撲られても構はないわ、だけど……だけどそんなありもしないことを……。

多吉　云ふな、云ふな、現在今茲で何をして居たんだ、何をして居たんだ、云へまい〳〵。

いきなりお里の髪を掴んで引摺り廻はす

源三郎二階から下りて來る。

源三郎　多吉、何をするんだ、何をするんだ。

引わける。

多吉　出てけ、出てけ、たつた今出てけ。

源三郎　多吉、何て眞似をするんだ、まあ落着け、お前は思ひ違をして居るんだ。

多吉　思ひ違ひぢやない、俺あ現場を見てるんだ、何でもいゝ、早く出てけ。

荒々しく階段の處まで行つて、また二三歩引返へして、

多吉　お父さん、私は今日限り此女を離縁したんだから早く叩き出して下さいよ。

源三郎　おア好い、お前に二階へ上つて少し寢て御覽…

多吉興奮して二階へ上る。源三郎は泣き伏して居るお里を見て

源三郎　お里、勘忍してくれ、あれの氣はどうかしてゐるんだ。

お里　いゝえ、私はぶたれるのなんか、何でもありませんだけどあの人は……飛んでもない事を疑つて居るんですもの……。

源三郎　判つてゐる、私は初めから判つて居たんだ、だがそんな事をお前や留三に云つちや、あんまりあれの價値を下げると思つて何も云はなかつたんだこれつて云ふのも、常々自分の顏があんなだから僻ふ〳〵として居る所へ、あの鶴屋の周吾の奴遂に、つまらない冗談を云はれたのを眞にうけて々あんなになつて仕舞つたんだ。

お里　私があんまり、留さんなどにも心安だてに無遠慮だつたのが惡るかつたのかも知れません

源三郎　そうばかりでもないんだが、あの通り根が氣の小さい男だから、そうと思ひ込んだら、てんで人から云はれる事など耳にも入らなければ、自分でも自分の心持を取り返へす事も出來ないんだ。

お里　私、もう一度とつくりと話して見ますわ。

源三郎　さ、それは一寸考へ物だ、頭があんなになつて居る時は、何でもない事でもそれを自分の腹の中で疑の種子にこしらい上げてしまうんだ、まあそのうちに體の方が達者になつて來れば自然心持ちも治つて來るだらう、そうすれば默つて居てもお前の潔白も判つて來る譯だ、辛いだらうが今の間我慢してゐておくれ。

お里　ぢや私はどうしたらいゝでせう。

源三郎　さ、そこだ、これは今茲で考へた事ではないのだ、此間から實はお前に相談して見やうと思つて

居た事なんだがな、お前も見る置り、多吉の心持は兎に角として體の方が日増しに疲れて行くばかりなんだ、打つちやつておくとどんな事になるかも知れない、で醫者の云ふのには一日も早く轉地療養をさせろと云ふんだ、それで私はかう考へたんだ、多吉をつれて暫らく田舍へ歸つて見やうかと思ふんだ、そうなるとお前の體だが、決してお前を疑つてこんな事をするんぢやないんだよ、ただあれの體のよくなるまで、お前には本當に氣の毒だが……。

お里　そしたら、私どうしたらいゝんでせう。

源三郎　つまりこれもあれの病氣を直したい爲めだ、つまりな、お前は……一時實家の方へ……。

お里　えツ、私に里へ歸れつて云ふんですか。

源三郎　暫らくさうして貰いたいと思ふんだが、どうだらう。

お里　（聲を上げて泣き伏す）病氣だから戻つて來いと云ふなら判つてゐます、それだのに病氣だから實家へ歸れ……自分に惡いことがあつて離緣されるのだつたら諦らめもつくでせうが、病人を拋つておいて自分一人歸りたくはありません、常々何も働けない私なんだから、せめて病氣の時だけでも精一杯つくして上げるのが本當だと思ひます。

源三郎　さう云はれると私はもうどうしたらいゝか判らなくつてしまう、いやお前の心持ちはよく判る、だが、早く云ふとお前と顏見合はせて居るとあれの病氣の治らないうちに年中氣をいら〳〵させて居る事になるんだ、これもあれの病氣を治す爲めだと思つて暫らくの間歸つて居て呉れないか、あれの病氣さんよくなれば直ぐに戻つて貰うんだからな。

お里泣き伏す、源三郎も泪を拭ふ、永い間、多吉降りて來る、立つたまゝ。

多吉　さつさと出て行け、出て行け。

お里靜かに泪の眼を上げて、許へるやうに立つて居る多吉の顏を見詰める、多吉は廊下へ腰を下して頭を抱へる。

縫ひさしの多吉の着物を見詰めてそれをいきなり顏にあてゝ泣く、間。

源三郎　多吉、暫らく田舍へ歸らうよ。

軍隊の喇叭の音近づいて來て長い行軍の足音が續く。——幕——

三幕　一　田舍の家

前場から約一ヶ月ほどたつて居る。夕方、近くに汽車の音が聞えて居る。上手に母屋の裏が傾斜して見えて居る、板戸の入口と高い窓がある。下手の方に納屋の一部が見える。夕陽が淡く輝いて居る。奥の方は道路、背景は一面の青麥と菜種子の花の畑、道路に沿ふて燒木の杭が並ぶ。家の前に滿開の

櫻の古木二三本。——幕開く——

鳥が啼いて居る、源三郎（野良から歸つて來たままの姿）薪に腰を下して考へ込んで居る。暫く靜かな時が流れる、裏口から留三帽子を手に持つて出て來る。

留三　ぢやお父さん、私は五時二十分で歸りますよ。

源三郎　今夜は泊つて歸つたらどうだ。

留三　もう兄さんに會ふのはいやだ、お互に嫌な思ひをするだけ損だ……方はどぢや店のつち道拋つてしまふより仕方が無いんだね。

源三郎　まう一度元の店にして見たいと思つて居たが、もう此處まで來てしまつちやどうにもして見やうもあるまい、だがあのまゝ人手に渡すにしても、私はもう一度見まから渡したいと思ふのだ、此處五六日うちには何とかして、出かけるつもりだから兎に角それまであの儘にして置いてくれ。

留三　だけど、どうせ渡すものなら如何にも未練たらしくいつまでも引張つて置かないで、一日も早くこんないさこさから放れちまつた方が好いぢやありませんか。

源三郎　お前達はそう云ふけれども、あの店を出すまでには容易な苦勞ぢやなかつたんだ、未練もあるよだけどお父さん、今度稻荷下の畑を賣つちまつたんだそうぢやないか。

留三　誰に聞いた。

留三　先刻隣の小父さんに聞いたよ、もう此れで此處の家にも何んにもなくなつてしまつたんだね。

源三郎　……。

留三　もうこの家へ歸つて來る見詰もなくなつたなア。だけど全體そんな金をどうするつもりなの、お父さん。

源三郎　恁うして居ると目に見えない金が要るんだ、先刻も話す通りだ、お里の所から子供が生れたから來てくれと度々云つて來ても、思ふ樣に行かないんで顏出もしないで居ると、今度はお里を餘他へ嫁にやる事にしたから子供を受け取りに來いと八ケ間敷く云つてよこしたんだ。それからも遂無沙汰が重なつてるうちに遂々怒つてしまつて、近い所に向ふから子供を渡しに來ると云つて來た。あのお母はお里と違つて、義理も情も無い女子だ本當に連れて來るかも知れない、そうすりやヤどうにか子供を賴む方法も考へなきやならない、それだつて先に立つものは金だ、まだ多吉の方だつて治らないまでにも一度は病院に入れて治療さしてもやりたいと思つて居るんだよ。

留三　お父さんは兄さんの事ばかり考へて俺の方はちつとも考へてくれないんだね、兄さんの病氣なんか自分で態々引張り出した樣なものだ。

源三郎　そりやそうかも知れない、だがそうだからつて

打拋つつて置けないのが子供の親だ、お前達から見たら、親ほど馬鹿な者はないやうに見えるかも知れないが、それは聽てお前も子供の親になつた時に初めて俺の心持が判つてくれるだらう……。

間。　直次郎出て來る。

直次郎　何だ、もう歸へるのかい。

留三　え……。

直次郎　久濶ぶりで來たんだから一晩くらい泊つて行つたらどうだね。

留三　え、だけど私は矢張りあつちの家の方が本當の自分の家のやうな氣がしますよ。

直次郎　そりやアそうだらうね、お前さんにしたら此處の家よりも向ふの方で長く育つて居るからな。

留三　ぢやお父さん歸へりますよ。

源三郎　兎に角俺の行くまで、そうして置いてくれ。

留三　……あ……、ぢや小父さん左樣なら。

直次郎　左樣なら、まだお出よ。

留三　えゝ……。

つまらなさそうに去る。

直次郎　で源さん、あの畑の代だがね、此れはまた登記も踏んで居ないのだから、勿論餘他の人なら前金なんて事はとても出來ない事だが、お前さんも困つてゐる所だし、まあ先きにお渡しする事にして持つて來たよ、ぢや二百二十圓、よく調べて見て下さい。

金を渡す。源三郎は金を掴つたまゝ沈思。

直次郎　親から讓られた財産て云ふものは有り難いもんだね、お前さんだつて今此んな不仕合に出會したと云つても、代々傳て居た例へあれだけの畑でも殘つて居たから、恁うして差詰めお金になるんだからぬ、金く有り難いもんだよ、後はどうしやうと子供の勝手だが、殘されるだけは矢張り殘して置いてやる可きもんだね……。

源三郎は暫く默然と地上を凝視する。

源三郎　此れで私も立派にお前さんに負けてしまつたんだ。

直次郎　何が負けたと云ふんだね。

源三郎　今から三十年も前の事だ、今の小學校の落成式の晩だ、村中の人が集まつて居る中で、俺はお前さんに耻しめられた事を今まで忘れては居なかつたよ、二人の子供を立派に育て上げて、どんな事をしてもお前の家産以上のしんだいにしなきや置かねエと考へて居たよ、だがそんな事は、今の俺の境涯から見るとまるつきり夢の樣な事だつたんだな、人間には自分ではどうにも出來ない運と云ふものがあつたんだ、この次から次と續いて來る不仕合にかゝつちや、意地も張もあつたものぢやない、今ぢやもう正直云ふと今まで腹の中で仇と

思つて居たお前さんから嬉んで有り難く此の金を貰いますよ。

直次郎　そう云ふ昔の事を云はれると、私はどうも辛いよ、源さん、だが人間はつまり運なんだから、よくなるも惡くなるも仕方が無い事さ、おゝ大分暮れて來た、ぢやな、明日にでも一寸一筆今のやつの請取りを書いて持つて來て下さいな。

源三郎　今晩早速書いてお屆けします。

直次郎　どうぞ賴ん申しますよ、ぢや御免なさい。

源三郎　どうも飛んだ無理を願つて相濟ん事でした。

直次郎去る。源三郎は摑つた紙幣を見詰める。人の來た氣配、彼は無雜作に紙幣を懷に入れながら急いで家内へ入る。正面道路の方から、更に悄衰した多吉登場、櫻の木の下へ來て背をもたせかける。可なり長い間。嬰兒を抱いた源三郎が多吉を探す風で出て來る。續いてお初出て來る。

源三郎　多吉、そこに居たのか、多吉これを見ろ、今お里のお母が運れて來てくれたんだ、おゝよし〳〵お前には初兒で、私には初孫だ、可愛いぢやないか、一度抱いて見ろよ……。

多吉の目は訝しく光る、いきなり嬰兒を摑もうとする。

源三郎　何をする、何て眞似をするんだ。

多吉　そんなもの、俺の子ぢやない……。早く叩き返して下さい。

源三郎　多吉、馬鹿な事を云ふもんぢやない。

多吉　お父さんまでが俺を欺すのか……。彼奴らア何處まで俺を苦しめやがるんだ。

お初　何ですつて多吉さん、俺の子でないんですつて、俺の子で無かつたら誰の子です、何の彼んのと云いたい放題な事を云つて實家へ返して置いて、子供が生れたからつて云つてよこしても、誰一人顏出しもしないで置いた癖に、態々連れて來れば、俺の子でない、何て云い草です。

源三郎　いやお母さん、そうまあ氣にかけないでさ、近頃どうも病氣の爲かして、始終クサ〳〵して居るもんですから、遂こんな事を云つてしまうんで困つてゐます、どうぞ氣にかけないで下さい、病氣の爲なんですから。

お初　いくら病氣の爲だつて、病氣のせいにばかりして置ける事と置けない事とありますよ、多吉さんにあゝ云はれて見るとお里は亭主のあるのに他の男と不始末をして父無子を產んだつて事になるぢやありませんか、これでは私も此のまゝ聞き捨てにして歸へる譯にはいきませんよ。

多吉は興奮と衰弱に蹌踉として、家の中へ驅け込む樣に入る。

お初　多吉さん、待つて下さいよ。

源三郎止めて

源三郎　待つて下さい、あれはとても今では眞面目な話は出來ないほど頭が狂つて居るんです、どうかあれの云つた事は氣にかけないで下さい、そこでこの嬰兒ですが、多吉がいくらどんな事を云つても勿論私が引取りますし、また多吉の病氣さへよくなればお里にも歸つて貰はなければならないんですが、だが、今茲處でこの子を引取つた所で男の手一つではどうにもなりませんし、またこんな嬰兒を今から母親の乳を放れさせるのも可哀さうですから、いづれ乳のある人が見附かるか、また多吉の病氣の治るまで連れて歸つて、お里の所へ預つて置いて貰いたいと思ふんですが。

お初　それは困りますよ、あんな事を云はれない先きなら兎も角も、俺の子でないなんて難癖をつけられた子供は、可哀さうですが連れて歸る譯には行きませんよ。

源三郎　理屈を云へばそれに違ひありませんが、私の手ではどうする事も出來ないのですから。

お初　それは仕方がありませんよ、そりや私にだつて只つた一人の孫なんですから可愛くない事はありませんよ、だけどこれが犬の子や猫の子ではないんですからね、筋のたゝない子供をお預りする譯には行きませんよ、大體あなた方は餘り虫がよ過ぎますよ、亭主が病氣だから歸つて居ろ、子供が生れたから引取りに來て下さいと云つてよこしても手紙一本よこさず、仕方がないから恁うして私の方から遠い道を汽車に乘り馬車に乘りして、連れて來て見れば、いくら頭が狂つてるとは云いながら、云いたい三昧な事を云つて置いて、後でまだ連れて歸へれ、そりやあんまり虫がよすぎますよ また後で改めて御相談の上でどうするとも、今日はどうしてもお預りして歸る譯には行きませんよ

源三郎　然しお母さん、あんたも私も子供の親になつた身體です、子供と云ふものはお互に可愛いもんですよ、子供の爲にする苦勞は、何でもないのが親です、眞逆かお里はこの子供を喜んでよこした譯ぢやありますまい。

お初　いゝえ、お里は引取つて頂くのを喜んで居ますよ

源三郎　ぢや何ですか、お里は平氣で此の子供を手放してよこしましたか。

お初　え、お里もそれが本當だと云つてゐますよ。

源三郎　そうですか、引き取りませう、產みの母親に見捨てられた子供だ、このお祖父に育てられるのが仕合かも知れないつて云つてゐたと、お里にそう云つて下さい。

お初　ぢやアミルクを向ふへ置きましたからね、今夜の飲料には十分ありますから。

源三郎　有り難う。

お初　ぢや、もう汽車の時間にも間がありませんからお暇致します。

源三郎　どうも遠路の所御苦勞樣で御座いました、いつれそのうち御禮には出ますが、お里にも產後の身體を注意する樣に云つて下さい。

お初　お邪魔しました。

行きかける。

源三郎　あ、お母さん…

お初　（ふり返へる）

源三郎　（懷から紙幣を摑み出して）これア誠に僅かだが、お里へ御嫁入の御祝と、この子が今日まで御厄介になつた御禮の印を兼ての事です、どうぞ持つて行つて下さい。

お初　（流石に恥ぢ入つて）いづれ何も彼も後で改めて御相談申さなければならないのですから、これはまた後で預きませうよ。

源三郎　いや後の相談は相談として、これは本の私の志です、どうか持つて行つて下さい。

お初　そうですか、ぢや兎も角も遠慮なしに頂いて參りますよ。（嬉しそうに受けて）では御免下さい。

お初急ぎ足に去る。小學兒童の唱ふ聲。源三郎見送つて靜に家內へ入る。――廻る――

同二　田舍の家

部屋二つ、上手六疊位、下手三疊位、廣い方の部屋正面半壁、半ば襖間、上手側面が幽な床の間、下手側面は三疊との境の襖間。三疊の間下手側面に窓、正面障子、四五人の子供の合唱が遠くに聞える。

室內は薄暗くなつてゐる、そこには多吉が自殺して斃れて居る。暫く舞臺空間。源三郎は子供を抱いて片手にランプを持つて三疊の方へ入つて來る合の襖の所で暫く六疊の樣子に耳を立てる、靜かに入る。

源三郎　何だ、此んな所に轉寢をして居たのか、多吉、何も着ずに寢て居て、風邪を引くと不可ないぞ、そんなに眠いんだつたら、何故床を……多吉、多吉。

慌てゝ子供を側へそつと置いて

源三郎　おい多吉、多吉、あアツ……。多吉、何て事をするんだ、多吉、多吉……お前より先きに死にてえ俺は、今まで何の爲に生きて居たんだ、多吉、俺どうなるんだ、あゝ、俺アどうすれば好いんだ。

子供激しく泣き出す、源三郎は多吉の屍骸と子供との間にまるで狂人の樣になる、子供を抱き上げて。

源三郎　よし〳〵〳〵、あゝ泣かないでくれ、また俺の意地張りからお前に難儀を見せてしまつた、よしまだ汽車は立つまい、もう一遍祖母ちやんに賴ん

でお母ちやんの所へやつてやる泣くんぢやない〳〵

源三郎は狂ひ廻る樣に多吉の屍體に布團をかけて置いて、走つて去る。——廻る——

同三　田舍の家

舞臺は一に戻る。

日は漸く暮れかゝつて居る。奥の道路を自轉車が通る。源三郎子供を抱いて飛び出し、上手の方へ驅け出さうとする。汽車の音、續いて煙を吐く音

源三郎　あ……もう出てしまつた……。

彼は踉々と櫻の根方へ來て立つ。靜かに、そして据えつけられた樣に子供の顏を見詰る。雨が降り出して來る。彼はそれにも氣が附かずに聽て子供を胸に抱き込む樣にして次第に聲を上げて泣きしやくつて來る。雨愈々激しく、日全く暮れる。

——幕——

第四　再び理髮店內

前場から約一週間ほどたつて居る、舞臺以前よりは下手に寄つて居る、鏡は一枚だけ現れて居て、二枚は隱れて居る、隨つて上手の居間の方が廣く現れて居る、店の內部は以前とは違つて淋しい。——幕開く——

夕刻、留三が火鉢の側に座つて居る。近所のお神らしいのが二三人奥の方へ出たり入つたりして居る。A、C、老人、他に若者二三人が思ひ〳〵に座して雜談に更つて居る。B入つて來る。

B　兄さん逝くなつたんだつてな。

留三　遂々行つちまつたよ。

B　僕は暫く大阪へ手傳に行つてゐたもんだから、ちつとも知らなかつたんだよ、全く人の命なんて判らないもんだね。

老人　だから今も云ふんだよ、多吉さんの樣なあんな心掛けの好い正直な何の罪もない人がころり〳〵二十臺や三十で死ぬかと思ふと、俺の樣な此んな世間から邪魔扱ひにされて居る業突張がいつまでもいつまでも蔓り生かしにされてゐるんだから、全く婆婆と云ふ所は思ふ樣に行かねェ所だよ。

B　實際だね。

A　何が眞實だよ。

C　だけど年をとつた人は、若い者の死んだ所へ行くと、皆同じやうにそんな事を云ふね、如何にも自分が身替りにでもなりたかつた樣な事を、そのくせ、さアとなると矢張り死にたくはないだらう。

人々哄笑。

老人　そう老人を素破拔くもんぢやないよ、だが、假にお前が死んだ所へ行つても同じ樣な事を云ふかも知れないな、いづれ年寄りの云ふ悔みの言葉なんて大抵きまつたもんだよ。

C　はッ〳〵〳〵隨分開けつ放しなお爺さんだな。

B　そして此の店は此れから先き、づつと君がやつて

行くのかい。

留三　いや、もう今日の法事が濟んだら明日にも引拂ふつもりなんだもつと早くそうしたらよかつたんだが、兄貴が此の家で以て長い事仕事をして居たんだから、せめて一七日の法事だけでも此處で濟ましてから引拂いたいつて親父が云ふもんだからね。

老人　そうだ、多吉さんがこの店を出した頃は全くよく働れえたもんだ、折角此れまで仕上げた店を拋つてしまうのは惜しいもんだなア。

B　ぢやアもうこの家へ來て將棋を指す事も出來なくなるなア……。

留三　また僕が店を持つたら來ておくれよ。

B　あ、行くとも。

老人　そうだお前も早く店を出して、うんと働れえてお父さんに安心させておくれ、お父さんも近頃めつきりやつれたな、時に子供はどうしたね、好い預り人でも見つかつたかね。

留三　いゝえ、矢張り親父の所に居ますよ、早くどこかへ預けた方が子供の爲でもあるからそうした方が好いつて云ふんだけれど、親父はもう、この子は誰にも渡さない、おれが育てるんだつて、とても手放しそうもありませんよ。

老人　俺なんざア便所へ行くにせえ杖を突張つて行く始來だ、あの老人の手一つで、嬰兒を育てるなんてとても容易の業ぢやねエ、神樣でもなけりや出來ねえ事だ、人事ぢやねエ、留さん賴むぞ、親孝行してくれ。（泣く）

留三　……。

B　お父さんはまだ來て居ないのかい。

留三　まだ來て居ないんだよ。

老人　な、子供の事で思ひ出したが、お里さんはまたこの奈良のどこかへ緣付いて來てると云ふ話だな。

留三　姉さんがッ……。

A　こいつは隨分人情にかけた話だな。

B　そんな不人情な人でも無さそうだつたがな。

留三　そんな事があるからあの子供を無理に引取らせやがつたんだな、俺ちつとも知らなかつた。

老人　いやこりやア恐らく本人の心ぢやあるめえ、あのお母と云ふ人が、俺は今の伊勢春の仲居をして居る頃からの事をよく知つてるんだが、それこそ血も涙も無え女子だからな。

留三　いくらお母が不人情だつて、產んでまだ半年とも過ぎない嬰兒を平氣で手放すほどの女だ、葬式と一緒にお嫁に行く位の事は何でもないだらうよ。

C　そうして見ると全く女なんてものは賴りにならないもんだね。

A　また女を頼りにして見た事もろくにないくせに、頼りにならない方からばかり考へないで、先づ頼りになりそうな方から考へて見ろよ、君の心持は常にそんな風だから、自然將棋の方も負けてばかり居るんだよ。

C　飛んでもない所へ將棋を持つて來たもんだな、よし、そんなに僕の將棋をくさすんだつたら、一番行こう。

A　いかう……。

老人　おい止せや、今日はどんな日だと思つて居るんだね。

留三　いや却つて好いよ、おやりよ、もう佛になつてしまつてからは、側で沈み返つて居るよりは陽氣にしてくれる方を喜ぶに違ひないよ。

A　よし、好い事を云つてくれた、ぢや坊さんの來るまで一つ行こう……。

B　將棋かい。

AとC將棋をさし初める。

留三　僕一寸此れから親父を迎に驛まで行つて來ますからね、お願しますよ。

老人　そうか、ぢや行つてお出。

留三出て去る。

B　だけど何だな、全く女房を貰ふには餘程よく吟味しなくつちやならないね。

老人　そうだよ、つまり云ふと亭主が男を上げるのも、男を下げるのも、女房一つにあるよ。

B　その筆法で行くと總理大臣になるのも一つは女房のせいだと云ふ譯だね。

老人　勿論だよ、女房が半分持つて居る樣なものだ、俺なんぞ立派に總理大臣になれる資格は持つて居たんだが、女房が惡るかつたばかりに、遂々一魚屋で終つてしまつたと云ふ譯さ。

B大きく笑ふ。

B　ぢや俺も好い女房を貰つて總理大臣にならうかな

老人　それに限るよ。

B新聞を取つて讀む。老人將棋の側へ寄る、豆腐屋が通る。

老人　あッ、駄目〳〵、そんな事をしたら、此處へ桂馬を打たれて、飛車取り王手と來られるぢやないか成る程な。

C　お爺さん側から教えちや駄目だよ。

A　あゝ、そんな手はつまらない手だ、恁う云ふ時は銀の頭の歩を突くんだよ……それ、そうなると金歩で金と上るだらう、そこでその角がなつて金取りさ、こりアもうお前さんの負けだ、よし、私が代つて挽回してやらう。

無理に老人はCを退けて盤に向ふ。

老人　さア來い。

近所の女の二出て來る。

女の二　何だよお父さん、年甲斐もなく、今日あたり將棋なんか指して、お止しよ。

考人　うむ、佛樣は……。却つて陽氣な方を嬉ぶそうだよ。

女の二　ね、お止しよ。

女去る。

女の三　ね、高ちやん、お供物をするんだけれど、どんなにしたら好いんだらうね。

B　さア僕もよく知らないんだがな。

女の二　あ、家のお父さんが知つてますよ、ねお父さんお供物をして下さいよ。

よし、お供物を、して下さいよと恁う行つたらどうする。

女の二　お下さん。

老人　あいよ。

女の二　早くですよ。

老人　あいよ、今直ぐだ。

女の二　お父さん。

老人　あいよ。

女の二　待つてるんだからさ。

老人　あいよ、そう來たか、よし。

女の二　もう坊んさんが來るからさ。

老人　そう、坊さんが……くると、どうだこれで好いだらう。

A　あゝやられた。

老人　まだ〳〵修業が大切だな、ハッ〳〵〳〵。

女の二　お父さんッ。

老人　あ、あ。

女の二　早くお供物をして下さいよ。

老人　そうか〳〵。

老人上手に入る。

女の二　まるで氣違ひなんだから……。

ぷつ〳〵云ひながら縫いて入る、留三は荷物を下げ、源三郎子供を抱いて靜かに入つて來る。ひどく悄衰して居る。

B　あ、見えた〳〵。

A　お歸へり。

源三郎　誠に遲くなつて濟みませんでした、昨晩から少し身體を損ねたもんですから……。

A、B、Cは各悔の言葉を延べる。

女三人ぞろ〳〵出て來る。

女の一　お歸んなさいまし、まあ此の度は申し樣もない御不幸で、どんなにかお力落しで御座えませう。

源三郎　有難う、此れも持つて生れた運だと思つて諦めて居ます、だが今日は飛んだ御厄介になりました何も此處まで出て來てする程の法事でもありませんが、この店はあれが出した店でもあり、また御

近所の皆様や、日頃お親しくして頂いて居た方達にお別れをさせたいと思ひましてな。

女の二　本當にお大抵の事ぢありませんでしたね。

（嬰兒を受け取つて）まあ〳〵可愛らしい嬰ちやんだこと。

女の三　まあよく肥つて居ることね。

源三郎　もう婆婆から足を洗ふつて時になつて、此んなこぶが出來て困つて居ますよ。

女の一　まあ、本當にお大抵ぢやありませんね。

老人走り出して來る。

老人　お父さん來なすつたな。

源三郎　久濶く……。

老人　私アもうお前さんの顏を見るともう何も云へないよ。（泣く）

源三郎　不仕合これきりと思ふなと云ふが、もう私も今ぢやア息をついてゐると云ふだけです。

老人　尤だよ〳〵、だがまだ留さんと云ふ寶がある、氣を強く持つて居て下さいよ。

源三郎　有り難う……留三もう仕度は出來てるのか。

女の一　え、もう恰然とあちらへ出來て居ますよ。

源三郎　そうですか、ぢや留三、何も無いだらうが皆樣に上つて頂く樣にな。

留三　え、皆さん、どうぞ彼方へ、そのうち坊さんも來てくれるでせうから、さ、高ちやん……。

老人　さ、それでは向ふへ行つて頂きませう。お父さんもお出なさいよ。

源三郎　へ、後から直ぐ參ります。

人々ぞろ〳〵と上手へ入る。源三郎は持つて來た袋の中から牛乳を取り出して乳瓶に移して嬰兒に飲ませる用意をする、僧侶入つて來る。

源三郎　あ、これは御苦勞樣で御座います。

僧　この度はまた飛んだ御不幸で、さぞ御愁傷な事で御座いませう、老少不定、どうも致し方がありません。

源三郎　あ、留三、御寺樣がお出下さつた、御案内申しておくれ。

留三出て來る。

留三　御苦勞樣で御座います。

僧　では御免下さい。

源三郎　どうぞ……。

留三は僧を導いて入る。この時入口へお里忍びやかに覗ひ寄る。間もなく、女の三出て來る。

女の三　お經が初まつたからあつちへお出なさいまし。

源三郎　はい、參ります。

女の三　私が少し抱きませうか。

源三郎　有り難う、此の頃は私の手加減を覺えたかして私の手を放れると直ぐ泣き出しますので……。

女の三　そうですか……。

話しながら上手へ入る。お里時々忍び寄つて家の中を覗く。留三出て來る。お里を見咎める。お里走り去ろうとする。

留三　姉さん……。

戸口の方へ寄る。お里戻つて、只首垂れる。

留三　姉さん、どうして居ます。

お里　……。

留三　兄さんは遂々死んでしまいましたよ。

お里　……(激しく泣く)

この時源三郎覗く。

留三　姉さんはお嫁に行つたんですつてね……。

お里　……(更に強く泣く)

留三　今日は兄さんの一七日で近所の人達に來て貰つて法事の眞似事をやつて居るんです、姉さんにも上つて線香の一本も上げて貰いたいと云いたいんだが、人のお神さんに眞逆そんな事は云はれないからね……。

留三居間の方へ歩みかける。

お里　留さん。

留三　え。(ふり返へる)

お里　私が惡いんだから何も云ひません。

留三　何も聞きたくもありませんよ。

お里　留さん……お父さんも來て居ますか。

留三　來て居るよ。

お里　嬰兒も一緒に。

留三　え。

お里　……。

留三　產みのお母さんに捨てられた嬰兒はお祖父さんの手で安〳〵と育つて居ますよ。

お里　一寸で好いから會はして貰はれないでせうか。(泣く)

留三　お嫁に行きたくつて手放した父兒に會いたいつて云ふのかい。

源三郎　留三待つてくれ、お里、久濶くだつたな。

お里　お父さん。

源三郎　多吉は遂々死んでしまつた。

お里　……(泣く)

源三郎　だが隨分お前も辛かつたらう、俺はよく判つて居る、お前の心持はよく判つて居る、お前達は誰が惡いんでもない、お互があんまり不仕合な生れ合せだつたのだ……。

子供泣き出す。留三は居間に腰を下す。

源三郎　おゝ、よし〳〵〳〵。

お里訴へる樣に無言で兩手を出す。

源三郎　おゝ抱いてやつてくれ、抱いてやつてくれ。

お里乳を呑ませる、泣き止む。

源三郎　おゝ、お母さんに會つて嬉しいか、嬉しいだらう、嬉しいだらう……うんとおつぱいを呑まして

貰へよ、そこに立つて居ちや何だ此處へかけろ。
椅子をお里にすゝめる。

源三郎　お前も聞けば餘他へ緣附いて居ると云ふ事だがそれもお前の立場がどんなに辛かつたか、俺には目で見たよりもよく判つて居る。だがそれもお前の運だから、その家へ行けばどこまでもその家の人でなけりやならないぞ、此の子供は俺の手で、どんな事をしても立派に育てゝ行くつもりだから決して此の子供の事など考へたりしてその爲めに先きの人達に面白くない樣な氣持を起させる樣な事があつちやならないぞ。

お里　（袂を顏に當てゝ泣く）私は死んだつもりで行つて居るんです。

間。

源三郎　乳をたら腹のんで、好い心持に眠つて居る、罪のないものだなア。

お里　もう此れから先きは、づつと田舍の方へ行つてしまひなさるんですか……。

源三郎　そうしやうと思つて居るよ、明日にも此處を引拂ふつもりだ、この店もお前や多吉が寢る目も寢ずに作り上げた店だが、これとも、もうお別れだ。
源三郎鏡を凝視する、長い時が過ぎて。

源三郎　あ、多吉が居る、多吉、多吉だ、多吉そりや思ひ違ひだ、いや思ひ違ひだ、この親を信用しろ、此の親を信用しろ、親は子供に嘘はつかないぞ、多吉待て、待て、その剪刀を放せ、おい多吉……
彼は全く發作的の錯覺を起して狂ふ。周吾漂然と入つて來る。

周吾　おや、お父さん歸つて居たね、久濶く會はなかつたね。

源三郎　（鏡に映つた周吾の顏を見て更に狂暴になる）あア、貴樣だ、貴樣だ、貴樣は俺の家を滅茶々々にしてしまいやがつた、うぬ、どうするか覺へて居ろ。
源三郎はそこにあつたストーブ用の金の棒を取つて、鏡を叩き割る。「あゝ此處に居る、うむ、此處にも居る」と叫びながら三枚の鏡を割つてしまふ。荒狂ふ彼は呆然と立つて居る周吾を見ると棚の剪刀を持つて飛びかゝる。

源三郎　貴樣だ、貴樣だ、貴樣だ。
叫びながら遂に周吾を刺して斃す。この物音に奥から人々が出て來て恐ろしそうに見る。反動的に沈まつた源三郎はあらぬ方を凝視して。

源三郎　多吉、……多吉……多吉……。
遠く流して歩く三味線の音。

——幕——

脚本上演に際して改竄添削の止むなきに到りました。惡しからず御諒承を願ひます。作者）

毛谷村私見

新谷誠水

私と毛谷村に一寸した因縁がある。五ツ位の時だつたか、生れ故郷の芝居小屋で、臨時に彌三松の子役に買はれた事を覺えてゐる、それから子供心にあの毛谷村が好きになつた紅梅が咲き亂れてゐる軒場、鶯が鳴く春日和尺八のゆるやかな音を思ふと、たゞ難い歌舞伎情調におそはれて、よく叱られながらも、芝居の木戸をくゞつたものである。

長ずるに從つて、この毛谷村の院本を讀み初めて又、別な面白味を悟つたのは、お園といふ娘形である。片外しものの政岡の樣な役以外、振袖等の娘形を主人公とした歌舞伎劇立派に娘形の題し物として、この彦山以外に見當らない事である。

天明年間、多くの淨瑠璃作者が多くの作品を出した時この彦山の作者は何か一趣向と種種の智惠を絞り拔いた結果が、珍らしくも、娘形を主人公とした此劇が生れたものであらう。

それだけに、このお園は彦山の各場を通して無性の色氣を加へる事になつてゐる、大きな石臼を持ち上げる大力の女が、一度六助に會ふと、限りない色氣を出して、家來の死を別れ、甥の彌三松を投げ出しさへする、即ち作者がねらつた娘形の一極致、實に敬服の外ない現し方である。

浪花座の四月、我童のお園は大體に雀右衛門等が學んでゐるといゝたい。そうして珍らしく出立の場が加つて、例の生醉の件を見せてゐるが、此間場のお園には慨して色氣が加らず聰明と意志の强いお園を現すには、我童といふ人は適役であつた、然し、この半面の性格に成功はしたが、何處までもこの聰明と意志の强さがつき纏つて、六助内の場で、肝腎の色氣を忘れて了つたのは實に殘念であつた。

着附も色襦子は梅幸の藤鼠にやつぱり劣る樣である、花道から彌三松を抱えての見得までは、そのつけまとふ聰明と强い意志が無難に芝居をさしたが「呆れて取落す」所謂娘形の身上であり、此場の山の色氣の件になつてからが極めてまづい、持つてゐた懐劍は無雜作に投げ出して了ふ。臼の件では「どうなとしたが」でこれも只型を見せるばかり、女だてらの力業、六助に見られて恥かしいといふ思が全然無かつた、梅幸のたまらない思入れ、頭でのゝ字をかくといつた、處女らしい仕草の研究が余程足りないと思ふ。

聰明過ぎたお園、どつちかといへば理性に勝ち過ぎて色氣を忘れたお園、何やら新らしい見方で一幕かけそうなお園である。これもひつきようは、娘形としての工風が、一段も二段も欠けてゐるからである。

このお園に對して、延若の六助が又そつ氣ない六助であつた。最も六助はお園の女房役である以上、お園に色氣がみじん無いとすれば六助とても受入れる事は出來なくなるであらうが……然し延若と我童の毛谷村では、延若の題し物である、延若が總てを誂え、我童がこれに從つてゐる、そこでこの毛谷村には

延若一流の考へ過ぎの欠點が無類にある事である、先づ屋臺の下手にわざ〳〵臺所をくつつけた事である。例の穴釜と、尺八の火吹竹それだけの仕事に、特に縁前を廣くした事である。これだけもいたづらに、空隙を與へるのみで、何の助けにもならないのである、幕明き早で、毛谷村らしくない……そういふ感が浮んだのである、三段のくつぬぎも、其一つである。さりながら、小手先の利く延若「何とでごんす」の邊りは、幸四郎の活歴風なのよりは秀でゝもゐるし、吉右衛門のと又異つた味があるが、この小手先が利き過ぎて、お園とのツケ廻しに、刷毛先を撫でゝ笑はして見たり「我夫」で首をスクメテ舌を出さんばかりの笑を買つて見たり、小細工といふか、前受けといふか、無骨な六助を殺すも甚しいものである。私はこの毛谷村を見た翌日、道頓堀の四月號の延若と川尻氏の毛谷村問答を讀んだが、これで見ると、延若も大分毛谷村に就ては研究してゐる樣である、そして此人一流の工風があるが、お園との物語りの間の臼を轉す所等は全く珍型である、それから六助の出立に奥で獨り例の鐵砲玉の袴に着替へる件りがある、女房になつて、初めて殿御へ着せる着物、この間に嫋形としての色氣が無性に現はしてある作者の働き、延若はこれを全然討死させてゐる、私は樂屋に延若氏を訪れて、此點を正すと「京極との立合に、京極の着替へがある、六助が仕合の着附と筒袖に着替へる、又袴に着替へる都合三度、舞臺で着替へるは、餘り工風がおまへん、そこで最後は内部で着替へる方が、手間も早いしと思つたまでゝ、お園には其間に彌三松を着替へさしてまんね」と、實になんの苦もなく片附て了つたが、これには、些か呆れざるを得無かつた、前二つの着替は拔いても、肝腎の着替のこの袴、これを全然時間經濟や何かで蔑でやられては耐つたものではない。それから幕切の椿と梅、これを彌三松に持す事である。臼を腰かけに使ふまでに、繪畫美の心得のある延若が、かつ色見する紅梅のと、梶原平三を氣取つた梅の花を襟首にさす事を忘れたのは、もつての外であつた。この花も延若氏は重要視してゐない、むしろ玉椿等は、すぐに首が落ちるもの、目出度い外出には不吉視してゐる樣であつた。

延若の六助の秀逸は、斧右衛門の母の件の無念の思ひの件りである、ともすると誰れもが劇中の一挿話位にしか思つて輕じる件を閑却してゐない事であつた。

成駒家斷片

北川康男

幾等道頓堀が淋しくとも、成駒家の一座がかゝると必ず一道の活氣がみなぎり、ヤンヤと大入が續く。それだけ大成駒家は大阪人の何物かを握つてゐる。

又來月もか、と云ひ乍ら人々は矢張りセツセと吸ひ寄せられて行くのである。

そこには何物にも代へ難い大成駒家の德がある。三四十年前の成駒家！それだけの年月はけみしても以前として成駒家の人氣は若きその全盛時代と變らない。ゴマ鹽頭のおつさ

んがまだ子供の時から、成駒家、成駒家と人氣を集めてゐた鴈治郎老が四十年後の今日に到つても成駒家を凌駕する優を見出されず、成駒家は關西芝居の權威であると共に道頓堀の人氣を背負つて立つてゐる。年と共に成駒家の藝は層一層洗練せられ、光りを放つて來る。二十年前の「紙治」今の「紙治」舞臺の優にそれだけのはゞと、神に入つた藝を見出せるが何時も乍らに若々しい。

成駒家が「境特山の敦盛」を演るつて！とけげん顔する人はあつても、その舞臺を見ては只うなづかされずにはゐない。

水々しい若衆姿の敦盛を演つてゐる鴈治郎老はもう六十を越してゐるつてね。

×

白井さんが成駒家を大切にしやはるのも無理はおまへん、成駒家のあの人氣、私達の子供の自分からの人氣がちつとも落ちずに持續してゐやはるんだすもの！大阪と成駒家、あの人の在存は何と云つても關西の强身であり誇るべき藝術家です。松竹さんも興行で損をする事は少くないでしようが成駒家の興行で損はおまへんやらう。とかつて筆者に帝キネの山川社長が語つてゐられた事がある。成程成駒家のあの根强い人氣には何人たりとも敬服されるものであると共に我が大成駒家中村鴈治郎老の人氣こそ、コンスタントのものではあるまいか？。

喫煙室

高橋蓼雨

▽原稿締切當日の本誌編輯部、犬養毅から風袋を引いてもまだお釣が來さうな痩軀鶴の如き鳥江さん、右翼に陣取つて鉛筆を舐めつゝ何やら譯の判からぬ事を書いては破り破り思案投首。スタイルが提督ネルソンに似て居る達筆家の成山さんは中央の机に頬杖ついて頭痛鉢卷の體。左翼には眼元なら鼻筋なら頭の髪までワシントンの再來を想はす姥谷さんが青息吐息。斯く古今東西の英傑三人が鳩首するからには天下の一大事か、又は時節柄支那の內亂に就て出兵の御相談でもして居るやうに見えるが實は其麼堅苦しい問題とは違うて「櫻」と題する和歌を詠むでみたが孰れも水準を出でぬ拙作揃ひ。其處へツカ〳〵やつて來たのが南洋から今捕りたてといふ兎でも鼻の大きな杉村蚊象朝臣、櫻……櫻に鼻は滿更緣が無いでもない、爰は一番我輩に任して置けと流石斯道の達人、即座に原稿紙へサラ〳〵。

いにしへの奈良の都の八重櫻
けふ九重ににほひぬるかな。

成る程、是れには文珠の智惠でも及ばぬ。

▽市川莚平、片岡松壽、中村福六、實川雁藏、實川延五郎外數名の大男が新町万樂の表二階へ集つて某優の送別會、銘々腕に撚かけ六韜三畧虎之卷の秘術を盡して三味線太鼓の亂痴氣騷ぎ。後れ馳せの一老妓息を切つて驅け上りさま銘々へ一臀をくれて

「いやゝわ、まあ好かん事、大方此麼事やらうと思ふてましてん、爰のおかみはんは且那はん方を役者はんや言ふて妾を巧いこと欺ましまんねん、阿呆くさ」

拳闘家擬きの俳優一同脇の下から脂汗タラタラ。仲居老妓へ眼配せして、シ――ッ。

▽文樂の竹本相生太夫、辨天座の役を濟まして聖天山下の御蟲負先へ桃の節會に招待され山海の珍鮮佳肴に舌鼓、宴酣となり何か一藝と太棹を握る、淨瑠璃こそ巧いが三味線の素養ある筈なく無茶苦茶に調子を上げ

て、デン、デン、デン。

次の間で餓狼のやうに食事中の此家の親族

艶子さん裾もあらはにお座敷へ飛び込み

「一寸々々、ラヂオとめてお呉れやす、雷さんの假聲を放送して八釜敷いわ」

相生さん怒るまい事か、頭から湯氣立てゝ

「三味線を雷とは言語同斷、座敷牢を仰付けらる可き大罪人なれど雛祭ゆへ差許す、以後は屹度慎み居らうぞ」

赫ッと睨め付け、天神の蘆を拂ひ、ギュウ〳〵と今度は三十八本の髑子に捻ぢ上げて

委細構はず、デン〳〵〳〵。

▽中村霞仙さんの門人、中村霞香さん、道頓堀の役を濟まして宅へ歸り近所の風呂へすつぽりつかつて身心の疲勞を洗ふて居ると例の銀行取附けの噂

霞香さん湯槽の中で龜の子の樣に首をすくめて耳を澄ますと、どうやら自分が預金してゐる銀行も危ないらしい。

草履天で宅へ飄け戻り、握り飯を竹の皮へ包み自分の命より大切な預金通帳と判とを腹卷へ括りつけて一刻千秋の懐ひに夜の明けるを待ちツイ近所の郡部の某銀行支店へいて、武内大臣、和氣清麿、藤原鎌足等の印しある紙幣取り交ぜて十二圓何十錢を悉皆引出して歸へつたものゝ此大金の隠し場に困る。米櫃へ入れたら鼠が喰う、書籍へ挾んだら火事に燒ける、甕へ入れたら大水に流れる、懐中して居ては電車で掏摸られる、あはれ四方の神々樣、向ふ三日間、茶斷ち鹽斷ち鯱鉾立ちしますから佳い智惠を授けたまへと拍は手うつて沈思默考、軈てある丈けの智惠を絞つて腹卷の邊りを親指でグッと押え圓助はづんで大タクに乘り、景氣よく爆音立てゝ今已れが郡部の支店から引出して來た同じ銀行の市内の本店へ自働車を横着げ全部預けて通帳を展ひて額へあて「あゝ、これで大丈夫や」

▽水谷八重子が食パンを注文するのに三百グラム下さいとウエーターを困らして居たが今度浪花座へ出勤の女優さん達も一寸話せる。衣裳部を呼んで

「妾の衣裳れ、棲下百センチにして下さいれ」

衣裳屋面ン喰つて豆鳩のやうに眼パチ〳〵

「百センチ……あの……千筋よりもつと大柄で……？」

滿艦飾の女優さん姫御世のあられもない、すつくと立つて左前を指し

「棲下の寸のことよ」

衣裳屋小首傾け

「棲下百尺、こりゃ何んぞの間違やろ」

井上に對する
印象・感想・希望

中村白葉

もう彼是廿年近くなると思ふがまだ自分達の學生の頃、たしか新時代劇協會といふ名で井上氏が、自由劇場を向ふに廻して孤軍奮闘してゐた事があつた。その時分、自分は米川正夫と共に大の井上びいきで、否井上崇拜で、その謳歌を雜誌などに書いたものだ。それ以來「井上正夫」の名は僕にとつて非常な親しみを持つてゐる。近頃又新作物の上演に妙技を奮はれるのは嬉しい極みだ。日本劇壇のために、只管氏の健在を祈る。

（編輯後に御回答を頂きましたので、卷末餘白ながら惡　からず御諒承の程御寛容を願ひます）

編輯後記

姥谷生

◇誰でも自分の仕事をするのに意氣と悦びをもつてしたいと思ふにちがひない。その仕事に熱情と希望を持てないほど心寂しいものはない。どんな小さな仕事でもお互に積極的な心持になつてこそ出來るものである。雜誌の向上發展は編輯する者の責任にもあるが、また周圍の人びとの厚意と同情によつてなされて行くものだと思ふ。『先代萩』の細川且元の科白ではないが、たとへば『虎の威をかる狐』のやうな人があつたとしたら、仕事などはとても愉快に出來ないものである。編輯後記としては私情にわたり過ぎた憾があるが、折時こんな人間のために感情を惡くさせられて、仕事の上にも支障を起されることがあるので一寸牢記してみたのである。

◇本誌の寄稿家は毎月のやうに同じ顏觸れで飽足りなく思はれてゐるかも知れない。それで讀者の範圍も限られるやうにも思はれるが、徒らに讀者に媚びるやうなことはしたくない。それに營利主義をはなれた本誌は廉價なゆゑに、よく賣れても毎月のやうに見込み以上の損失をやつてゐるので、今のところでは止むを得ないことだと思つてゐる。たゞ劇愛好者の機關として、また好意ある先輩諸氏の寄稿を仰いで、多少なりとも保存に價する雜誌にしたいものと考へてゐる。

◇この月は各座の舞臺寫眞を除いてみた。あまり珍らしくもない藝術的價値の少くない口繪などを多く挿入することは却つて目障りになると思つたからである。それから廣告ポスターなどに脚本『鹽原多助經濟鑑』六幕掲載とあるが、こんど本社の都合上や紙數の超過などで掲載が出來なかつた、あしからず御諒承を希ひたい。

◇新劇のために不斷の精進と努力をつゞけてゐられる井上正夫氏に對して、廣く劇壇及文壇の先輩から印象、感想と希望を求めた。かゝる多數の御回答に接したことを井上氏と共に深く感謝してゐる。

◇毎月のやうに厚意ある先輩諸氏から多くの寄稿を戴くことが出來てまた感謝してゐる次第であるが、特に東京の川尻清潭氏からは型などに就て今度も『馬の別れ』の長文も得たことは讀者と共に悦びたい。田中總一郎氏の『南新田紀行』の興味深いものを始め、成瀨無極氏の『春宵夜話』や高安月郊氏の『圓朝の鹽原多助』高安吸江氏の『鹽原多助とワグナー・馬の天才』などは精讀を願ひたい。そのほか高谷伸、高原慶三、富田泰彦、楠田敏郎、新谷誠水、綿貫六助諸氏の感想及研究はまた必讀の文字たるを失はない。

◇中村鴈治郎丈の談話は本社の日比老人を煩はした。特に本誌のためによせられた井上正夫氏の『東京土產平將門』は劇壇のために見逃すことの出來ない一文である。

◇こゝに擱筆するに及んで、先輩及讀者諸賢の御健康と尙一層の御摩援を祈る。

昭和二年五月一日發行

雜誌『道頓堀』五月號 第九輯

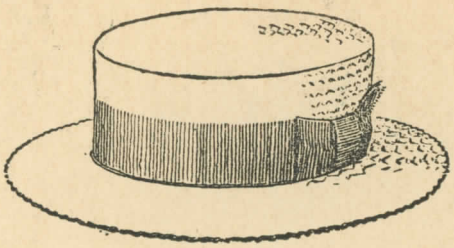
□誌代は前金お拂ひに願ひます。
□郵券代は一割增にて御註文を願ひます。

定價・金參拾錢

昭和二年四月二十五日印刷
昭和二年五月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地
松竹合名社內
編輯者 姥谷久一
發行者 成山桂三
大阪市東區備後町二丁目
印刷者 岡本省三
大阪市東區備後町二丁目
印刷所 プラトン社

大阪市南區久左衛門町八番地
發行所 松竹合名社
電南〔一二四〇番〕〔六六八五番〕



堂ビルのみやぎ屋

風薫る五月！

あなたのスタイルを
一段と高める
肅洒なお好みの
品々がお立寄りを
お待ちしてゐます。
今夏の御裝身の
かず〳〵は
みやぎ屋にと
お決め下さい。

堂ビルの洋品百貨店

一階みやぎ屋　電話北 自五八九〇番 至五八九九番

若く明るい顔になる

レート白粉

東京・大阪
平尾替平商店

金三十錢（郵税四錢）